ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 76号

赤坂今井墳丘墓にみる階層制について ---------- 福島　孝行 -- 1
大宮町左坂古墳群の経塚状遺構 ---------- 石崎　善久 -- 11
近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2) ---------- 野島　永・野々口陽子 -- 19
平成11年度京都府埋蔵文化財の調査 ---------- 奥村清一郎 -- 35
平成11年度発掘調査略報 ---------- 41
51. 狭間墳墓群・平山古墳・カチ山北古墳群
52. 平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡
53. 市田斉当坊遺跡D地区　54. 大畠遺跡第4次
長岡京跡調査だより・73 ---------- 47
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧 ---------- 49
センターの動向 ---------- 50
受贈図書一覧 ---------- 52

2000年 6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

赤坂今井墳丘墓にみる階層制について

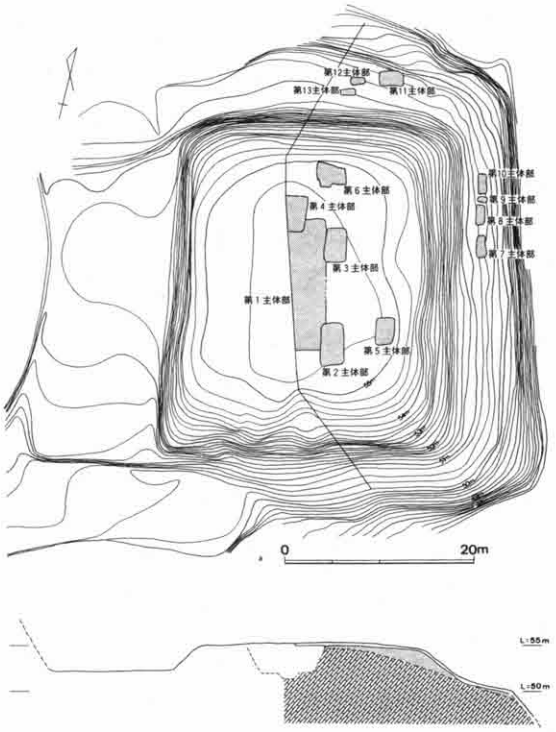
福島　孝行

1．はじめに

平成11年度、当調査研究センターが峰山町において行った赤坂今井墳丘墓の調査は、丹後弥生後期の墓制を考える上で非常に重要な成果を収めることとなった。(注1) この墳丘墓は周辺埋葬用の平坦面を含めた墓域が48mを測り、当該期の墳墓の中でも日本全国で10指に入る規模を誇る。また、中心主体部は長軸14mを測り、当該期において日本最大であるばかりか、前期古墳の墓壙と比較しても遜色無い規模を誇っている。今回はこの巨大墳丘墓に埋葬された人々が社会からどう扱われたか、即ち埋葬に現れた階層制について検討することとする。

検討に当たって前もって整理しておかねばならないことが若干ある。それは何をもって階層差と認めるかということである。私はかつて拙稿において墳墓群を共時的に捉えた上で階層制の進展を測る基準を提示した。(注2) しかしこれは修士論文の一部を抜き出して少ない紙幅の中に納めた物であるため、何故これが階層制の指標になるのかという事については詳しく触れることができなかった。そこで、今回改めて稿を起こすに当たり整理しておきたい。

私は拙稿で墓の造営が非生産的であり、従って墓は特別の事情がない限り、最小限の規模で、かつ確実に葬ることを基本とすることをすでに述べた。(注3) したがって個人に対してその個人が属する社会が一定の規模以上の墓を作るということは、必要以上の労働力をその個人に対して割くということを、社会が認めたということを示す。また、人は農繁期であろうがなかろうが、寿命が尽きれば死ぬ。人間は死ねば1～2日で腐敗を始め、まず腹部を中心に淡青色に変色し、また溶血した血液素が染み出て樹枝状の腐敗網という赤紫色の模様を作り出す。そして腐敗ガスが体中に充満して膨らみ、耐え難い悪臭を放つ(注4) したがって死んだ後、農閑期を待って葬るということは考えられない。また、残存状態が良好な近畿地方の木棺内に埋葬された人骨を見ると、亀井遺跡ＳＸ－01(Ⅲ～Ⅳ様式)で、頭蓋骨にサヌカイトの破片が突



第１図　赤坂今井墳丘墓墳丘平面図(注１文献)

第１表　西日本の区画墓における階層制分類基準（福島1996を一部改変）

類型	細分	区画墓の存在	土壙墓との併存	墳丘の優劣	区画墓数	主体部数	主体部の優劣	中心主体	墳丘規模50m以上
a類	a類	×	–	–	–	–	–	–	–
b類	b-1類	○	○	×	複数	複数	×	–	×
	b-2類	○	○	×	複数	複数	○	×	×
	b-3a類	○	○	×	複数	複数	○	○	×
	b-3b類	○	○	○	複数	複数	○	○	×
	b-4a類	○	○	×	複数	単数	–	–	×
	b-4b類	○	○	○	複数	単数	–	–	×
	b-5類	○	○	–	単数	単数	–	–	×
c類	c-1類	○	×	×	複数	複数	×	–	×
	c-2類	○	×	×	複数	複数	○	×	×
	c-3類	○	×	×	複数	複数	○	○	×
	c-4類	○	×	×	複数	単数	–	–	×
	c-5類	○	×	○	複数	複数	×	–	×
	c-6類	○	×	○	複数	複数	○	×	×
	c-7類	○	×	○	複数	複数	○	○	×
	c-8類	○	×	○	複数	単数	–	–	×
d類	d-1類	○	×	–	単数	複数	×	–	×
	d-2類	○	×	–	単数	複数	○	×	×
	d-3類	○	×	–	単数	複数	○	○	×
	d-4類	○	×	–	単数	単数	–	–	×
e類	e類	○	×	–	単数	単数	–	–	○

き刺さった男性が仰臥伸展葬で埋葬されているが、大腿骨、膝蓋骨、脛骨が完接した状態で出土しており、その他の骨格も乱れた様子は見られない。鬼虎川遺跡第12次調査第５号方形周溝墓第１主体部（Ⅱ様式）では、成人骨が仰臥屈肢葬で埋葬されていた。こちらもほとんどすべての骨格が完接しており、全く乱れていない。丹後での例は弥生時代には良好な例が存在しないが、参考として古墳時代中期前半に位置づけられる大宮町大谷古墳の例がある。組合式石棺内に熟年女性が仰臥伸展葬で埋葬されている。こちらも残存する人骨にはほとんど乱れがない。そのほか人骨の残りがよい例を見る限り、ほとんどの例が白骨化してから棺内に持ち込んだと考えられるような骨格の乱れが見られるものはない[注5]。したがって死亡後、腐敗があまり進まず、白骨化する以前に埋葬されていることが想定される。白骨化に要する時間は夏場で10日から１週間以上、冬は数カ月以上とされる[注6]。したがって夏場で考えるならば、10日以内でなければ亀井遺跡例や、鬼虎川遺跡例のような状態で埋葬することは困難であると考えられる。こうした検討から人が死亡した場合、基本的には死後すぐに墓域を定め、葬送儀礼を行い、とりあえずの埋葬を完了すると考えられる。ちなみに『魏志倭人伝』には「停葬一〇日」とあり、上述の検討と符合している[注7]。つまり少ない人数で、長期間にわたって墓を作るということは考えられない。弥生時代においては短期間に動員できるだけの人員を集めて墓を造営するのである。墳丘や墓壙の掘削や盛土の量はそのまま動員できる人員の延べ人数を表している。即ち大きな墳丘を削り出したり、盛土によって造るということは、それだけ大人数を動員する事を社会が許すということであり、造墓主体者から見れば、社会にそれを認めさせるだけの権力を持っていたことになる[注8]。つまり赤坂今井墳丘墓

の中心主体の被葬者及び被葬者からその権力を受け継いだ造墓主体者はその墳丘と中心主体部の巨大さによって自らの階層の高さを誇示しているのである。また、社会が準備した墓地を特定の単位集団、または個人が独占する、またはそれらのために新たに墓地を準備するといったことを社会が認めるということも、社会から見れば生産性を著しく侵害する行為である。そのようなことが行われれば、社会は他の構成員のために新たな墓地を用意しなければならないか、墓地を造って埋葬すること自体を諦め、山野に放置せざるを得なくなる。実際中世において、庶民の多くや、公家の子供達でさえ埋葬されず、山野に放置されていた。(注9) こうした墓地の独占という現象は、それを認めさせるという権力の存在を示唆する。そして、区画墓の墳丘上平坦面の中央部に他の墓壙より大型の墓壙が占地するという状況をもって我々は「中心主体」と呼ぶが、区画墓において、近接した時期で中心主体と切り合ってなおかつ中心主体より古い墓壙は存在しない。(注10) これは中心主体が、その墓域の造営の契機となった人物であると考えられる。即ち、その個人のために墓地の中の一定の墓域を画して独占することが社会から許される人物を表している。以上の労働力、占有、造墓契機の３点について、西日本の区画墓、特に埋葬主体が明らかな「吉備」地域の墳丘墓、「備後」地域北部から「丹後」地域の貼り石方形墳丘墓、「出雲」地域から「因幡」地域の四隅突出墓を要素分解してまとめたのが拙稿の分類表である。詳しくは触れないが、ａ～ｅ類へ向かって高い階層構造をもっている社会であることを示す。ただし、西日本における弥生社会が、ａ～ｅ類へ向かって直線的に、即ち進化論的に進むのではなく、各地域によって地域の独自性をもって変化をし、最終的に古墳時代的な特定個人墓に到達する地域もあれば、前時代の埋葬習俗を色濃く残す地域もある。

以上に述べた前提に立って以下に赤坂今井墳丘墓の階層制について検討してゆく。

赤坂今井墳丘墓は西から伸びる丘陵の先端部に立地し、墳丘の西側を大きく切り放しており、その背後や墳丘の東側平野部には隣接する墳墓を認めない。従って赤坂今井墳丘墓は複数の区画墓で構成される墓地ではなく、単独の墳墓であるため、拙稿分離基準のｄ類に当たる。各主体部の規模に優劣があり、中心主体も存在するため、ｄ－３類に分類される。この分類は弥生時代後期後葉においては楯築墳丘墓や西桂見墳墓など一部の超大型墳墓を除けば、最も階層制が発達した分類である。赤坂今井墳丘墓は墳墓そのものが非常に発達した階層制をもっていると言える。では、次に墳墓内部の階層構造を見ていくこととする。

２．各主体部の検討

(1)第１主体部

まず第１主体部であるが、調査地内で切り合う墓壙が３基存在するが、いずれも第１主体部が切られており、第１主体部被葬者の死がこの墳墓の造営の契機になった事は疑いない。そして、この墳墓が単独で存在していることから、この主体部に葬られた人およびその権力を受け継いだ人物は墓地を占有することを許された、もしくは第１主体被葬者のために墓地を新たに獲得することができた人物である。更に長軸14ｍの墓壙は当該期の国内最大であり、国内最大の墳丘規模

をもつ楯築墳丘墓でも９ｍである。短軸の規模は不明であるが、仮に浅後谷南墳墓第１主体部の比率を借りて長軸：短軸＝３：２であるとすれば、短軸は約9.3mとなり、墓壙上面の面積は130㎡に達する。また同じく浅後谷南墳墓第１主体部の比率を借りると墓壙の深さは3.7mになるが、丹後においても２ｍを大きく越える深さの墓壙は存在しない。従って、ここでは墓壙の深さを約２ｍと見積もっておく。すると墓壙掘削に要した土量は単純に深さを面積に掛けると260㎥にもなる。ただし、これは墓壙を直方体と仮定したときの値であるため、本来の数字はもっと小さくなるが、それでも200㎥を下ることはまずない。現在土木作業員の１日当たりの盛土掘削土量が約１㎥であるといわれている。弥生時代における１日当たりの盛土掘削土量を推し量る術がないため、この数値を代用すれば、200人日分の土量である。10人なら20日、20人なら10日前後、40人なら５日といった期間が必要となる。発掘現場での経験的な知見では作業員一人当たり畳２帖分、約3.3㎡の広さがなければ、非効率的であり、かつ隣の作業員との接触の危険がある。130㎡を3.3㎡で割れば、39.4となり、約40名が作業したとして、５～６日間かかるという計算になる。この間に木棺であれば、棺材を切り出す人、棺材を加工して木棺を作る人、副葬品を用意したり、朱の原料を入手したり、石杵で朱を作る人、供献土器を焼く人が必要であろうし、木棺を安置するにも、固定のための裏込めにも人出がいる。しかも10m級の木棺であれば、それぞれの作業に通常の５～６倍の人員が必要である。そしてまた巨大な墓壙を埋め戻す作業が必要である。掘って埋めるだけで400人日分の作業が必要で、木棺や副葬品・供献土器の準備にかかる人員を含めれば、のべ500人に上る人員をこの主体部だけに投入していることになる。墓壙掘削から埋め戻しまで10日間だとして毎日50人の屈強な男性と相応の女性がこの第１主体部には投入されていることになる。もちろんこれはいくつかの仮定に基づいた試算に過ぎないので実体を表すものではないが、どれだけの作業量が必要なのか、これらの数値から想像していただきたい。土量などの詳しい、正確な数値は発掘調査を待たねばならない。以上の検討から第１主体部がいかに弥生時代にあっては膨大な破格の作業量によって形成されたかが理解できよう。第１主体部被葬者及び墳丘墓築造主体者は契機、占有、作業量の３点で非常に強力な権力をもつ人物であるといえる。

(2)第２・第３・第４主体部

この３基は中心主体である第１主体部を切って、即ちわずかに墓壙を重複させて築かれている。この墓壙を重複させることについては野島　永がすでに詳しく述べている。(注11) したがってここではそれに触れず、重複するものと、そうでないものの比較にとどめたい。第２主体部は長軸4.5ｍ・短軸2.4ｍ・深さ90cmを測る二段墓壙に、長軸3.35ｍ・短軸90cmの舟形木棺を納め、鉇を副葬している。墓壙面積は10.8㎡、墓壙を直方体に見立てたときの体積は10㎥を測る。体積調査範囲では第１主体部に次ぐ２番目の規模を誇る。それでも墓壙長軸で３分の１、面積でおよそ13分の１、体積でおよそ30分の１程度しかない。つまり上の試算を援用すると３人で３日で掘削し、３日で埋め戻せる。木棺を作る人員を考えても30人日を越えないと思われる。第１主体部の試算と比較するとおよそ17分の１でしかない。しかし丹後の弥生後期後葉の墳墓に関していえば、中心主体部に次ぐ大きさの主体部の中では浅後谷南墳墓の第２主体部と並んで丹後最大級であり、

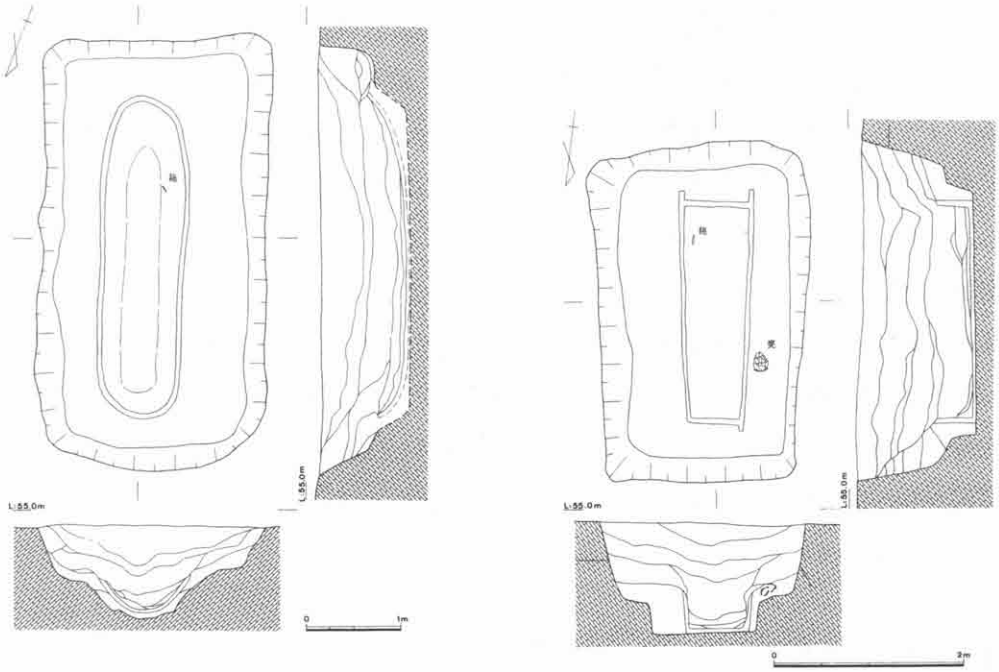
ほぼ同時期かやや下る可能性のある帯城墳墓群Ｂ地区の中心主体部である第１主体部を凌駕する。第３主体部は長軸3.55m・短軸2.3m・深さ1.2mの二段墓壙に、長軸2.35m・短軸80cmを測る組合式の箱形木棺を納め、鉇を副葬し、棺側裏込め上に完形の甕１点を供献する。墓壙面積は8.2㎡、墓壙体積は9.8㎥を測る。掘削にはやはり３人で３日、木棺を作る人員や、供献土器を新調したとしても30人日の作業量で事足りる。また完掘していない第４主体部は墓壙の規模が長軸3.75m・短軸1.7m以上を測る。この３基は墓壙長軸が3.5～4.5mで、第４主体部を除いて短軸も２m台前半である。これらの規模は丹後弥生後期において中小規模の区画墓の中心主体並の規模である。

(3)第５・第６主体部

墳丘上平坦面には中心主体部からやや離れた位置にある主体部がある。それがこの２者であるが、調査中に保存が決定したため、どちらも完掘しなかった。第５主体部は長軸2.8m、短軸1.85mを測り、墓壙面積は5.2㎡である。第２・３主体部や後述する周辺主体の数値を借りて深さ１mとすると、墓壙体積はおよそ５㎥となる。第６主体部は長軸3.0m・短軸1.8mを測り、墓壙面積は5.4㎡である。これも深さ１mとすると墓壙体積が5.4㎥となり、これら２基に必要な作業量はそれぞれ15人日内外となる。

(4)第７・８主体部

墳丘の周囲に設けられた周辺埋葬用の平坦部に配置された埋葬主体の内、東辺に配置された１群から深さが半分の第９主体部と小型で木棺の無い第９主体部を除いたこれら２基は墓壙の規模が類似している。第７主体部は長軸2.3m・短軸1.0m・深さ1.1mの一段墓壙に長さ1.8m、幅45cmの箱形木棺を納めている。墓壙面積は2.3㎡、墓壙体積は2.5㎥を測る。棺内に短刀、鉇、鉄



第２図　赤坂今井墳丘墓第２・第３主体部(注１文献第３・４図より)

鏃をそれぞれ１点ずつ納める。墓壙体積は第５・６主体部のおよそ半分である。したがって作業量は７～８人日程度であろう。第８主体部は長軸2.0m・短軸1.0m・深さ1.1mを測る一段墓壙に長さ1.7m、幅47cmの舟形木棺を納める。棺内に鉇１点を副葬する。墓壙面積は2.0㎡、墓壙体積は2.2㎥を測り、作業量はやはり７～９人日程度であろう。

(5)10主体部

第10主体部は長軸2.1m・短軸90cmを測り、墓壙面積は1.9㎡と第７・８主体部と大差はないが、深さが45cmと前２者の約半分であるため、墓壙体積は0.85㎥にしかならない。ここまで来ると、墓壙掘削にかかる労力より木棺を作る労力の方が大きくなる。掘削には２人日しかかからない。しかし長さ1.7m・幅40cmの箱形木棺を作るのに、木を伐採して運ぶのに２～３人日、木棺の作成に１～２人日として、３～５人日は必要であろう。第10主体部には朱が塗布されていたので、朱の作成にも１人日が必要であろう。したがって作業量は合計６～８人日程度必要なはずである。

(6)第９主体部

赤坂今井墳丘墓で検出された埋葬主体部中最小の墓である。長軸1.1m・短軸52cm・深さ35cmの土壙墓で、副葬品は無い。東西に主軸をもち、墓壙底は西側、つまり墳丘側が広く36cmを測り、東側は30cmしかない。西日本において人骨が残存する主体部の例では、木棺の内法もしくは木棺痕跡の幅が36cm以下の木棺は小児を納める例が卓越する。したがって第９主体部も小児を納めた可能性が高い。だとすればこの墳丘墓に埋葬された被葬者の中にただ一人だけ子供が含まれていたことになる。ちなみに墓壙面積は0.57㎡、墓壙体積は0.2㎥である。作業量は１人日に満たない。

(7)第11・12主体部

周辺主体部の内、北辺の１群からやや小型の第13主体を除いたこの２基は規模がよく類似している。第11主体部は長軸2.6m・短軸1.8m・深さ60cmを測る二段墓壙に長さ1.8m、幅60cmの箱形木棺を納め、棺内に鉇１点を副葬している。墓壙面積は4.7㎡を測り、墓壙体積は2.8㎥を測る。第12主体部は長軸2.4m・短軸1.5m・深さ45cmを測る二段墓壙に長さ1.88m・幅55cmの箱形木棺を納める。またこの主体部のみ墓壙内破砕土器供献を行う。墓壙面積は3.6㎡、墓壙体積は1.6㎥を測る。墓壙面積では平坦面上の第５・６主体部に迫る規模であるが、体積は第７・８主体部と大差無い。これらも作業量は７～８人日程度であろう。

(8)第13主体部

第13主体部は周辺主体部の北辺の１群の中でも最小の主体部である。長軸1.75m・短軸63cm、深さ40cmを測る一段墓壙の土壙墓である。墓壙の規模から成人が埋葬されていると考えられるが、伸展葬の成人埋葬の中では最も労力の少ない埋葬である。墓壙は当時の成人の平均身長が160cm前後、肩幅が40～60cm程度とすると、丁度ぴったり入る大きさに掘られている。ちなみに墓壙面積は1.1㎡、体積は0.4㎥となり、ほぼ１人日の作業量である。

３．階層制のモデル化

以上に各主体部における作業量の概算を行ってきたが、これを元に赤坂今井墳丘墓内の階層構

造をモデル化してみたい。基本的には作業量と配置の比較である。その前に埋葬の時間差について触れておきたい。第１主体部と、第２・３・４主体部は切り合っている。これは少なくとも第１主体部の埋葬が完了した後でなければ起こり得ない現象である。同時であれば埋土に差が見られず、切り合いは確認できないからである。従って第１主体部→第２・３・４主体部の埋葬順が推定できる。これ以外は切り合いがないため埋葬順を推定できない。また各主体部からは土器の出土がほとんどなく、第３主体部と第12主体部の甕を除くと細片である。第３主体部の甕は丹後地域において弥生後期後葉～末によく見られる所謂ナデ甕である。第12主体部の甕は北陸の影響を受けたと思われる甕で、法仏Ⅰ～Ⅱ式に類品が見られる。法仏Ⅰ～Ⅱ式は丹後の後期後葉～末の土器とほぼ並行すると思われる。またその他にこの墳丘墓から出土している土器片を全て実見したが、この時期幅から大きくはずれる個体は存在しなかった。従って赤坂今井墳丘墓は後期後葉～末の間に造営されたと考えられる。従って偶然の行為の集積の結果こうなったのではなく、ある一定の規律、もしくは権力の中で計画的に遂行された結果であると考えられる。第７～10主体部が非常に近接して作られながら、全く切り合わないこともこの推定を裏付けている。

次に赤坂今井墳丘墓内におけるグループ分けについて触れておきたい。赤坂今井墳丘墓は大きく４つのグループに分けられると考えられる。第１のグループは中心主体とそれに切り合う主体部である。第２のグループは墳丘平坦面上にありながら中心主体部を取りまくグループとは離れた位置、平坦面の外縁部に位置するグループである。第３のグループは周辺主体部の北群であり、第４グループは周辺主体部の東群である。第２グループは北群と東群に細分できる可能性もある。

では階層制をモデル化することとする。まず第１主体部は500人日を越える圧倒的な作業量を使って構築され、またこの墳丘墓築造の契機ともなり、この墓地を１基の墓で占有することを認めさせられる人物であるわけであるから、この被葬者は圧倒的に高い階層であると考えられる。また墳丘に関する詳しい分析をしていないが、後背の丘陵を切断した作業には1500人日程度の作業量が必要である。100人掛かりで２週間かかる作業量である。「停葬一〇日」に間に合わせようと思えば最低150人の男性と食事等を用意する人物を投入しなければならない。さらに掘削によって生じた排土を墳丘前面の凹地に埋め、墳丘と周辺埋葬用の平坦面を整形する作業が必要となり、墳丘の築造には合計で2000人日を越える作業量が必要である。近畿地方全域を見渡しても当該期においては比較にならないほどの作業量であり、動員数であったと考えられる。従ってこの被葬者は集落内でも特に重要な人物、即ち首長であったと考えられる。従って階層を三角形で表現したとき、最も上部で他の者との間に一線を画した形で存在する。

第２～４主体部の被葬者について、墓壙体積は10㎥未満であり、作業量は30人日程度であるが、その他の被葬者の２倍の作業量であるため、第１主体部に次ぐ位置に置かれる。ただし、第１主体部との間には一線を引く。またこの三者の中で第２主体部の墓壙面積は他の二者より大きい。占有面積が広いことにより他の二者よりやや高い地位にあった可能性がある。

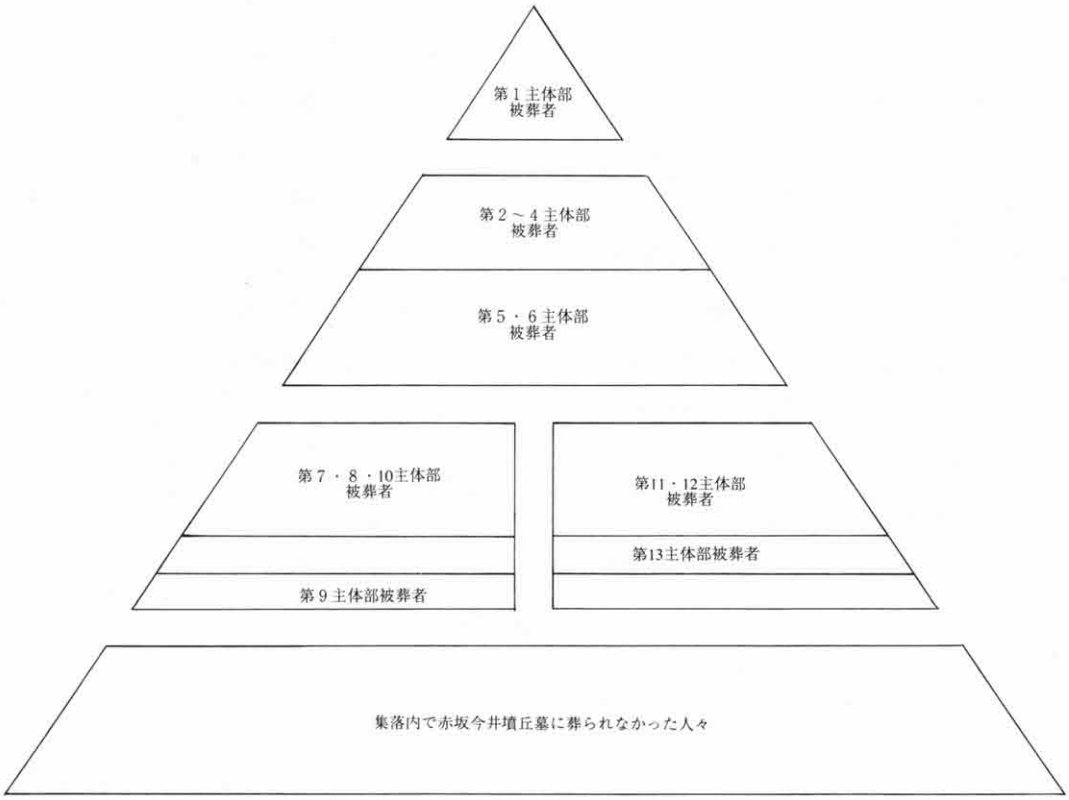
第５・６主体部の被葬者については推定される作業量が第２～４主体部の半分であり、第２～４主体部の被葬者の下位に位置付けられる。

第７・８・10主体部と、第11・12主体部は作業量がさらに半分であり、第５・６主体部の被葬者より下位に位置付けられる。また、墳丘上平坦面が十分余裕を持っていながら、そして大きく時期差があるわけでもないことから、墳丘上平坦面に位置することを許されていないと考えられる。従って第５・６主体部の被葬者との間に一線を設ける。また、北群と東群はグループが異なると考えられることから両者の間に一線を設ける。

第13主体部の被葬者はさらに下位、第９主体部被葬者は第13主体部の下位に位置付けられる。

こうしたモデル化によって得られた階層構造は集落内の発掘調査によって検証されなければならないが、丹後においては弥生時代の集落内部を調査した例は少ない。また集落全域を調査した例は皆無である。従って赤坂今井墳丘墓でモデル化した階層構造を検証するためにはどういった集落構造が必要かという事について述べておきたい。

第１主体部の被葬者は首長であると述べた。したがって彼の住まいおよび集落内外の利害を調整したり、祭祀を取り扱う場としての大型掘立柱建物跡が必要であろう。近畿地方のそういった建物を見ると、池上遺跡・武庫庄遺跡・中海道遺跡など独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡の存在が挙げられる。赤坂今井墳丘墓の第１主体部被葬者を輩出した集落にはこうした建物が必要であろう。また、丹後の弥生後期前半から中葉にかけての墳墓にはいくつかの単位集団が群集して墓地を形成しているが、赤坂今井墳丘墓は単一の単位集団によって形成され、その内部がいくつかのグループに分化している。言い換えれば、首長と彼が属する単位集団、そしてその集団が肥大化することによって生じた小集団によって構成され、その他の単位集団は墓地から排除されて



第３図　赤坂今井墳丘墓階層モデル図

いる。従って集落内でも居住地に分離が生まれ、例えば吉野ヶ里遺跡の内郷のように他の住居群から隔離された構造をもつ可能性がある。そして内郷の中に、さらに区画を設け、大型竪穴式住居跡などの首長居館と独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡を配置し、区画の外側には３つのグループが単位を作って竪穴式住居跡や掘立柱建物跡を配置していると考えられる。

このような重層構造をもつ大規模な拠点的集落で、ほぼ同時期のものは近傍には古殿遺跡しかない。古殿遺跡では過去谷地形の中に水利施設を設けた遺構が検出されているが、集落内部の構造は分かっていない。今後、この遺跡から前述のような構造が検出されれば、今回の検討は的を得ていたことになり、そうでなければ再検討しなければならないだろう。

４．外部との階層制

赤坂今井墳丘墓が提示する階層制の問題はこの墳丘墓の内部にとどまらない。何故ならこの時期、この墳丘墓とほぼ同時期に類似した内容の墳墓が丹後内部の数か所で築造されているからである。赤坂今井墳丘墓の特徴を整理すると、１：截頭方錐形の墳丘、２：大型の中心主体、３：周辺埋葬用の平坦部、４：中心主体を含め、主な主体部には墓壙内破砕土器供献をしない、の４つが挙げられる。こうした要件を満たす墓には網野町浅後谷南墳墓、峰山町金谷１号墓があり、やや時期が遅れるものに久美浜町天王山Ａ27号墳がある。また中心主体の状況が不明な赤坂今井墳丘墓を除くこれら３基の墳墓には中心主体部に舟形木棺を採用するという共通性もある。先に赤坂今井墳丘墓の出自集落として古殿遺跡を比定したが、浅後谷南墳墓の位置する福田川流域と金谷１号墓の位置する鱒留川流域の結節点に古殿遺跡が位置し、そのやや北、福田川沿いに赤坂今井墳丘墓が所在する。この位置関係と墓制の共通性から、この３基は非常に強いつながりがあると考えられる。天王山Ａ27号墳はやや遅れてこのグループに参入したと考えられる。赤坂今井墳丘墓はこのグループ内でも最大の墳墓であり、他の墳墓を圧倒する作業量をもって築造されている。従って赤坂今井墳丘墓はこのグループ内でも盟主的な存在であったと考えられる。ここではこの集団を赤坂今井グループと呼ぶこととする。このグループは弥生後期前半から一貫して丹後弥生後期社会をリードしてきた大宮町東部グループに対して対向する為に形成されたとも考えられる。この時期大宮町東部グループの墓地は帯城墳墓群である。特にＡ地区が併行関係にある。後期前半に圧倒的優位を保った三坂神社墳墓群や左坂墳墓群を擁し、大宮女神社遺跡を中心集落とするであろう大宮町東部グループは、帯城墳墓群の段階では一辺５～８ｍの小規模な方形台状墓を３基営んでいるに過ぎない。この時期は阿蘇海に面した大風呂墳墓群の築造される時期でもある。東に大風呂墳墓群、西に赤坂今井グループと、新興勢力に挟まれ、大宮町東部グループの相対的地位は低下したと考えられる。赤坂今井グループの登場は丹後弥生後期社会に大変動をもたらした大事件であったのである。

５．おわりに

赤坂今井墳丘墓の調査に触発され、この墳墓のもつ階層構造と、丹後弥生社会における相対的

地位について考察してみた。その結果この墳丘墓が非常に高度に分化した階層構造をもっており、その中心主体を除く階層間は労力２倍の懸隔をもって峻別されていることを見た。また、赤坂今井墳丘墓の被葬者が他の集落とグループを作っており、その盟主としての役割を果たしていた可能性を指摘した。そしてこのグループの登場が、丹後弥生後期社会の変革をもたらすほどの影響力を持っていたことを指摘した。しかし、個々の試算などにはまだ問題が残る上に、赤坂今井墳丘墓は半分が調査されたのみで、不明な点も多い。今後もし赤坂今井墳丘墓が調査されることがあれば、その時点で改めて検討していきたい。

なお、調査の所見に当たっては、当調査研究センター黒坪一樹・石崎善久両氏よりご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

（ふくしま・たかゆき＝調査第２課調査第１係調査員）

注１　黒坪一樹・石崎善久「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第92冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

注２　福島孝行「弥生時代墓制に見る階層性－京都府北部を中心に－」（『京都府埋蔵文化財論集』　第３集）　1996

注３　前掲註(2)

注４　関西医科大学法医学講座
「法医学講義　個人識別(白骨)」　http://www3.kmu.ac.jp/~legalmed/lect/skull.html
「法医学講義　死体現象」　http://www3.kmu.ac.jp/~legalmed/lect/sitai.html
岩手医科大学医学部法医学教室　「97法医学講義ノート　死体現象」
http://forensic.iwate-med.ac.jp/lectures/notes2.html
「dead_phenomenon」　http://www2d.biglobe.ne.jp/~aquila/medical/s3/m44.html

注５　亀井遺跡　中西靖人ほか『亀井遺跡』1982　(財)大阪文化財センター
鬼虎川遺跡第12次　上野利明ほか『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』1987　(財)東大阪市文化財協会　東大阪市教育委員会。
大谷古墳　奥村清一郎ほか『大谷古墳』1987　大宮町教育委員会

注６　前掲註(4)

注７　『三国志』魏書　烏丸鮮卑東夷伝　倭人条

注８　ここでいう権力とはマックス・ウェーバーが「或る社会的関係の内部で、抵抗を排してまで自己の意志を貫徹するすべての可能性」と規定したものを指す。マックス・ウェーバー著、清水幾太郎訳『社会学の根本概念』　1972　岩波文庫

注９　佐藤晃一「石塔の立つ風景」『北近畿をめぐる考古学』Ⅲ　第13回両丹・但馬考古学研究会交流会資料　1995

注10　墳墓の再利用で、見かけ上そのように見える墓は存在する。例：坂野丘墳墓、内和田５号墓など。

注11　野島　永・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」（『京都府埋蔵文化財情報』第74号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

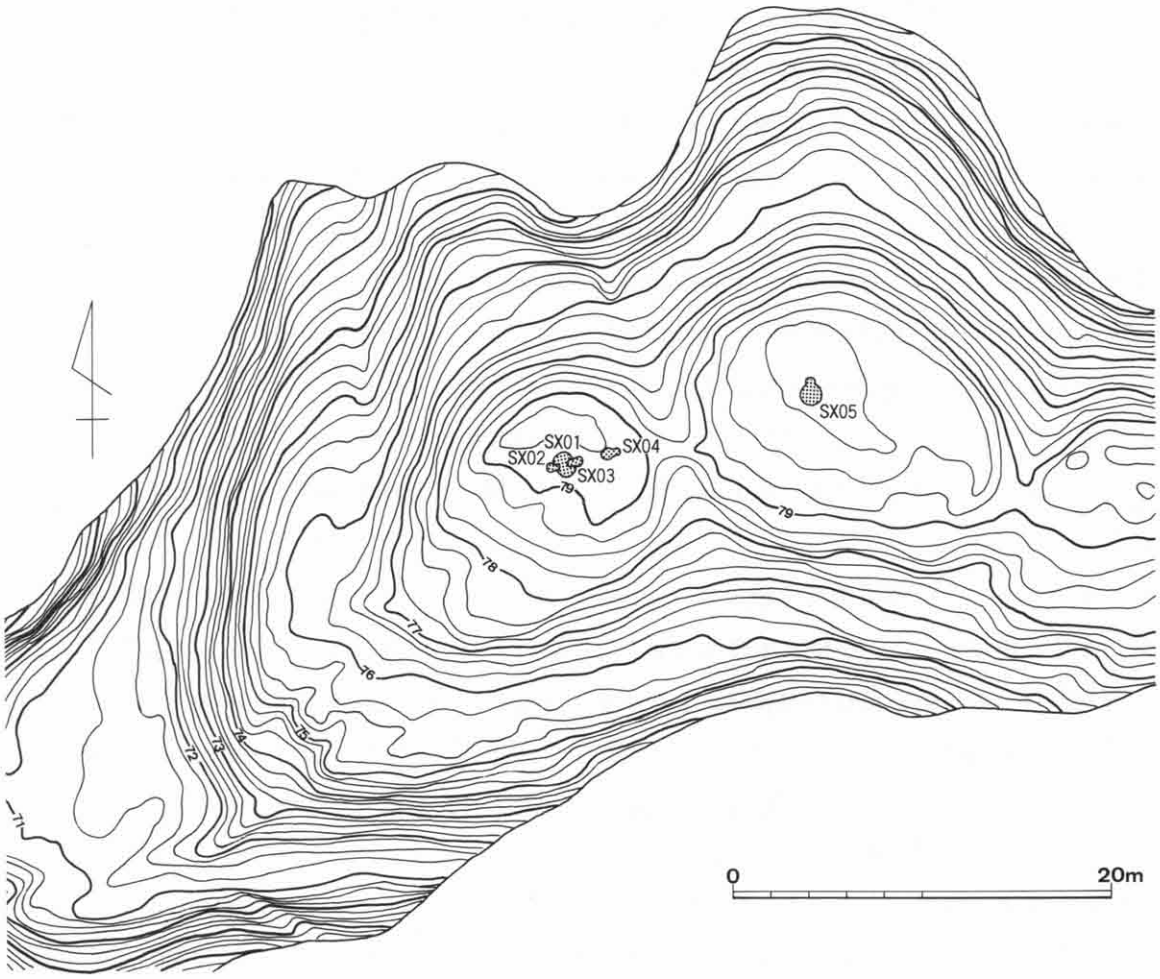
大宮町左坂古墳群の経塚状遺構

石崎　善久

1．はじめに

今回報告する資料は丹後国営農地(東部地区)関係遺跡である左坂古墳群の調査によって検出された経塚状遺構である。調査は1993年に実施し、古墳群自体の報告はすでに『京都府遺跡調査概報』第89冊にて行った。(注1) しかしながら、諸般の事情により概報には掲載することができず、ここで改めて紹介することとした。

遺跡は京都府中郡大宮町字周枳に位置する。経塚状遺構は中郡盆地へ向かい東から西へ派生する丘陵陵線上に造営される左坂B－1号墳・B－2号墳の墳頂部で検出された。この2基の古墳からの眺望は非常に良く、中郡盆地の竹野川上流域を眼下に見渡すことができる。B－1号墳墳頂部からは4基、B－2号墳墳頂部からは1基の経塚状遺構をそれぞれ検出した。



第1図　左坂経塚状遺構配置図および周辺地形測量図

2．遺構

Ｂ－１号墳から検出した経塚状遺構を各々ＳＸ01～04・Ｂ－２号墳から検出したものをＳＸ05として説明を加える。

ＳＸ01　Ｂ－１号墳墳頂部中央で検出した。ＳＸ02・03により切られており、Ｂ－１号墳墳頂部で造営されている経塚状遺構の中で最も古いものと判断される。遺構の構造は径約1.2mを測る大形の土坑の西壁に小横穴を穿つ構造をとる。なお、小横穴床面は大形土坑床面よりわずかに低い。小横穴内には土師製筒形外容器に納められた鉄製経筒１点が安置されていた。小横穴の閉塞は自然の角礫を複数用いて行われている。埋土の状態は上層(第２図１～３層)に堅く締まった粘質土が、最下層にはやや締まりの悪い粘質土が認められた。上層の状態から人為的に埋められたものと判断され、木櫃・木棺等の存在を考えることは困難である。遺物は小横穴内に納められた土師製筒形外容器・外容器内に納められた鉄製経筒・大形土坑底面(第４層中)から出土した銅銭23枚がある。銅銭は土坑底面から散乱した状況で検出されたが、中には連接した状態のもの、銭差しと考えられる和紙製のこよりを伴うものなどが認められる。

ＳＸ02　ＳＸ01の西を切る経塚状遺構である。横穴部は正確に検出できなかったが、閉塞施設の存在から横穴部を伴うものと判断した。明確な大形土坑を伴わず、土師製筒形外容器を納めた横穴部までが一体化した形態をとる。底面は横穴部まで滑らかに傾斜する。遺物は横穴部に相当する部分から土師製筒形外容器１組を検出した。

ＳＸ03　ＳＸ01の東を切る経塚状遺構である。横穴部は正確に検出できなかったが、閉塞施設の存在から横穴部を伴うものと判断した。明確な大形土坑を伴わず、土師製筒形外容器を納めた横穴部までが一体化した形態をとる。底面は途中に段を形成した後横穴部まで滑らかに傾斜する。遺物は横穴部に相当する部分から土師製筒形外容器１組を検出した。

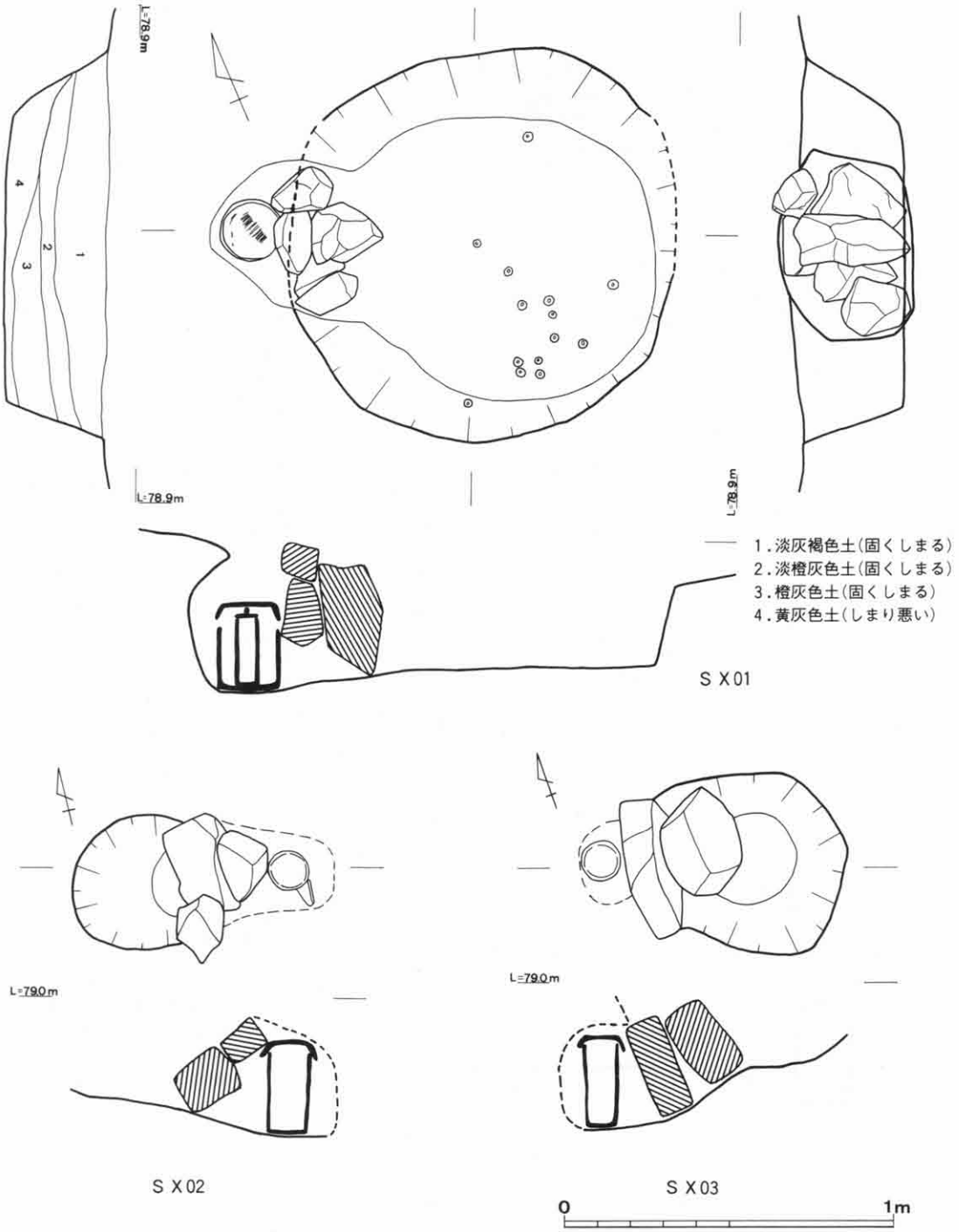
ＳＸ04　ＳＸ01の東に位置する。他の経塚状遺構とは切り合い関係を持たない。遺構の構造はやや大形の土坑の東側に小横穴を設ける。大形土坑の底面より小横穴底面の方が一段低く作られている。横穴部は１枚石により閉塞されている。遺物は検出することができなかったが、小横穴部からは径15cmを測る円筒状の粘土槐を検出した。木製の筒形容器が粘土に置き換わったものと判断する。

ＳＸ05　Ｂ－２号墳墳頂部で検出した。遺構の構造は径約1.3mを測る大形の土坑の北壁に小横穴を穿つ構造をとる。小横穴床面は大形土坑床面はより一段深くなっている。小横穴内には土師製筒形外容器に納められた銅製経筒１点が安置されていた。小横穴には閉塞施設が認められなかった。土坑内埋土に注目していみると、大形土坑底面にはやや堅く締まる暗燈灰色粘質土が認められた。この４層上面には小横穴天井部崩落土と考えられる第５～８層が堆積しており、一定期間大形土坑には空間が維持されていたものと判断される。最終的に土坑を埋めている１～３層は極めて締まりの悪い土層であり、木棺の陥没痕に堆積する埋土とよく似た状況であり、人為的に埋め戻したというより最終的に陥没した土であると判断する。以上の点からＳＸ05は一定期間空間が保持されていたものと思われ、１～３層の状態から木蓋のようなもので土坑を覆っていた

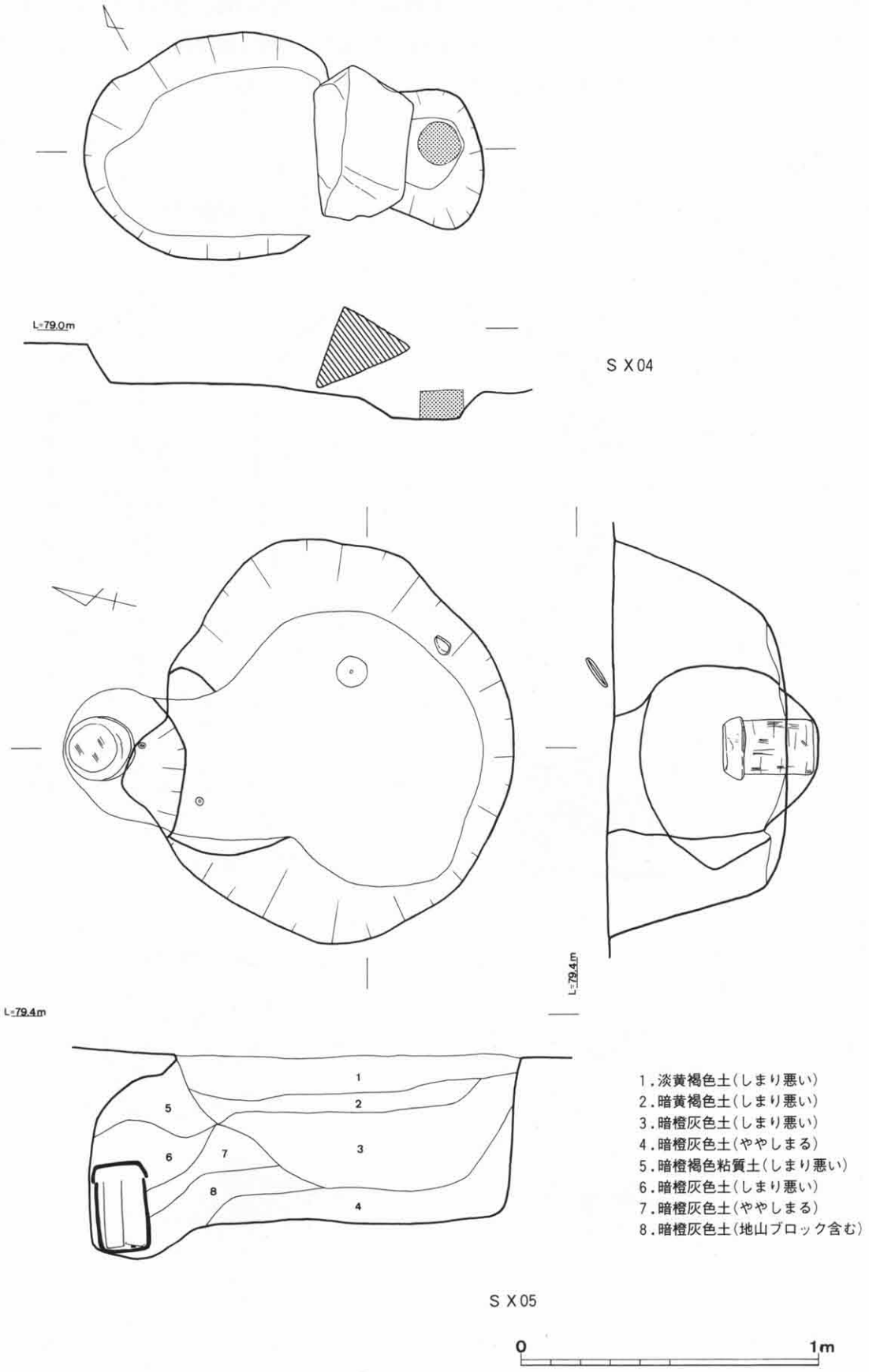
可能性がある。遺物は小横穴内出土の土師製筒形外容器・銅製経筒の他、大形土坑底面に銅銭3枚、青白磁合子片が検出された。また、表土掘削中ではあるが和鏡1面が出土しており、検討した結果この経塚状遺構の上面に相当する位置からの出土であることが明らかとなった。

3．遺物

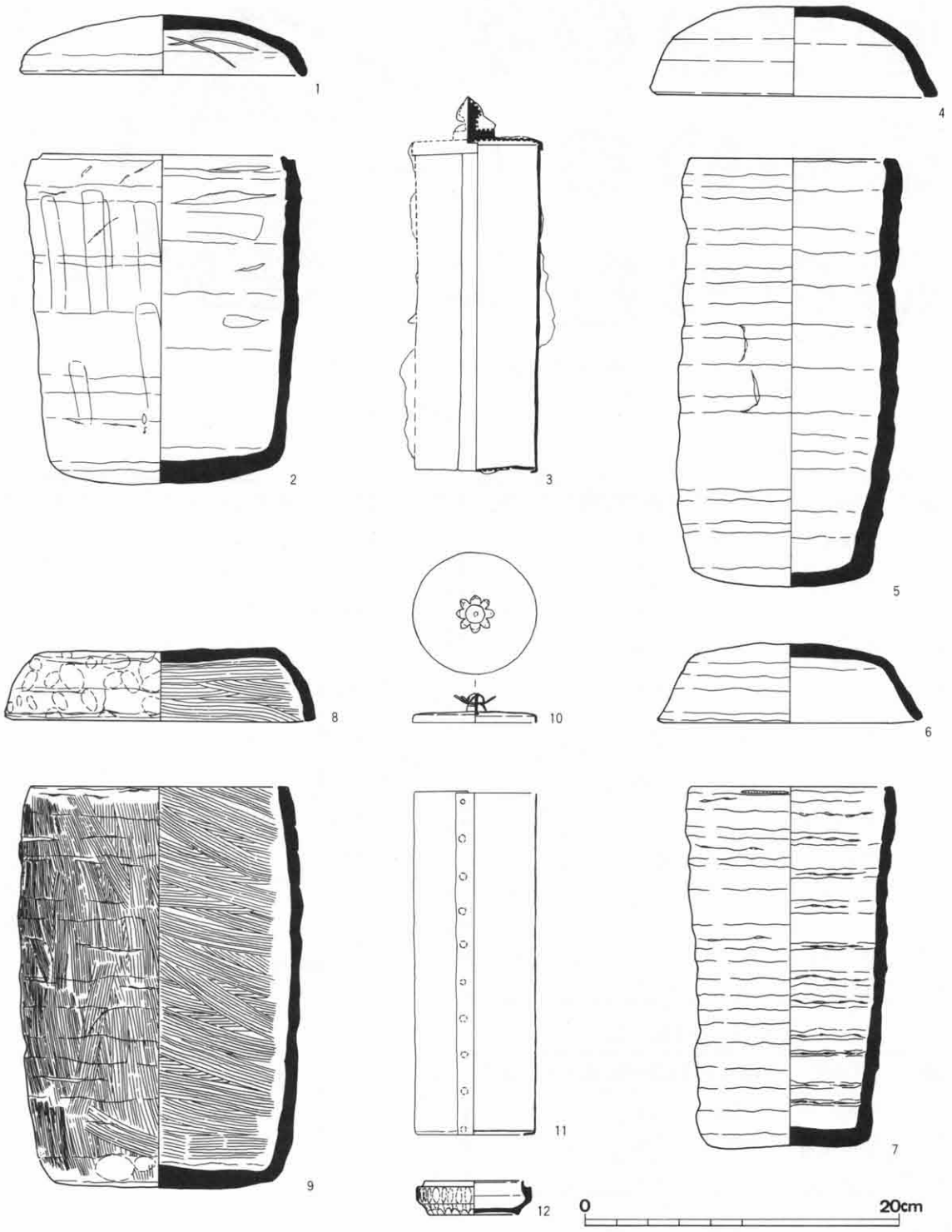
ＳＸ01出土遺物(第4図1～3・第5図13～25)　第4図1・2は土師製筒形外容器である。蓋



第2図　左坂経塚状遺構実測図(1)

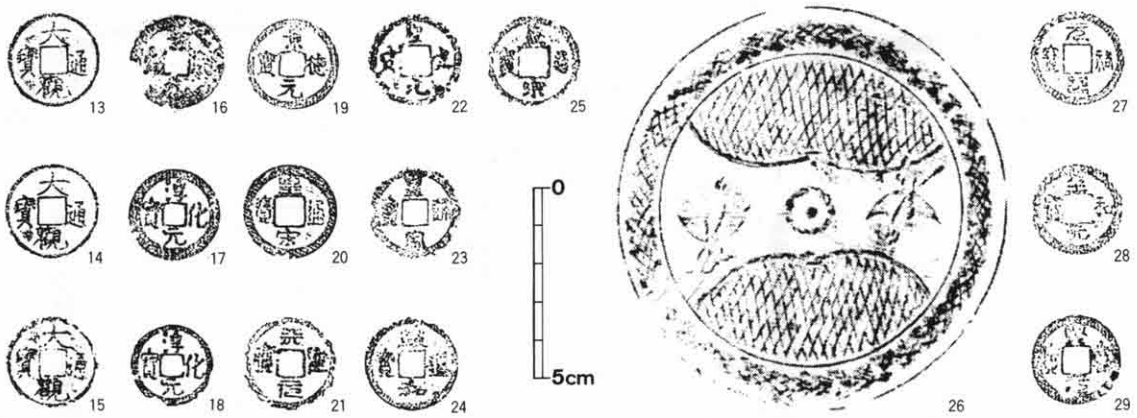


第３図　左坂経塚状遺構実測図(2)



第４図　左坂経塚状遺構出土遺物実測図(1)

は口径17.6cm・器高3.8cmを測る扁平な形態を呈する。身は口径15.2cm・器高20.9cmを測り、口径に比して器高が低い。第４図３は外容器内に納められていた鉄製経筒である。銹化が著しく詳細な観察が困難である。蓋は宝珠状のつまみをもち、つまみは円形の台座部分に取り付けられているようである。身は１枚の鉄板を円筒状に作り、円形の底板をはめ込んだ後内側に円筒部下端を折り曲げることにより固定している。筒状部の接合の方法は現況では鋲などが観察できず不明



第５図　左坂経塚状遺構出土遺物実測図(2)

第１表　ＳＸ01・05出土銭貨一覧表

ＳＸ01出土銭貨一覧

番号	銭貨名	初鋳年次	鋳造時代	最大径	備考
13	大観通寶	1107	北宋	2.5	
14	大観通寶	1107	北宋	2.5	
15	大観通寶	1107	北宋	2.5	
16	熙寧元寶	1068	北宋	2.5	
17	淳化元寶	990	北宋	2.5	
18	淳化元寶	990	北宋	2.2	人為的ケズリ
19	景徳元寶	1004	北宋	2.4	
20	皇宋通寶	1038	北宋	2.5	
21	天聖元寶	1023	北宋	2.5	
22	聖宋元寶	1101	北宋	2.5	
23	皇宋通寶	1038	北宋	2.5	
24	政和通寶	1111	北宋	2.5	
25	皇宋通寶	1038	北宋	2.5	
	開元通寶	621	唐	2.3	
	開元通寶	621	唐	2.3	
	開元通寶	621	唐	2.4	
	開元通寶？			2.2	9と銹着
	明道元寶	1032	北宋	2.3	
	政和通寶	1111	北宋	2.5	
	淳熙元寶	1174	南宋	2.4	
	不明			2.3	紙付着
	不明			2.6	5と銹着
	不明			2.3	

ＳＸ05出土銭貨一覧

番号	銭貨名	初鋳年次	鋳造時代	最大径	備考
27	元祐開寶	1086	北宋	2.5	
28	至和元寶	1055	北宋	2.5	
29	熙寧元寶	1068	北宋	2.4	

である。蓋を含めた全高24cm・径7.8cmを測る。第５図13～25は銅銭である。23枚中種類の判別できたものは第１表に示すとおり、北宋銭が大半を占めるものの南宋銭・唐銭がわずかに認められる。

ＳＸ02出土遺物(第４図４・５)　第４図４・５は土師製筒形外容器である。蓋は口径17.0cm・器高5.6cmを測る。身は口径11.8cm・器高27.1cmを測る細長い形態を呈する。

ＳＸ03出土遺物(第４図６・７)　第４図６・７は土師製筒形外容器である。蓋は口径16.0cm・

器高5.1cmを測る。身は口径6.0cm・器高22.7cmを測る細長い形態を呈する。接合痕が明瞭に残る。

ＳＸ05出土遺物(第４図８～12・第５図26～29)　第４図８・９は土師製筒形外容器である。蓋は口径18.5cm・器高4.5cmを測る。天井部は平坦に作られ、全体に扁平な形態を呈する。内面は粗いハケにより調整される。身は口径15.2cm・器高25.4cmを測る。内外面に粗いハケが顕著に認められる。第４図10・11は銅製経筒である。蓋は八弁の花弁をもつつまみをもつ。つまみは３つの部品から構成され、最下段には円形の台座をもち、中段に花弁を表した銅板を配し、上段には鋲をもつ金具を使用して蓋本体まで鋲足を通した後、先端をつぶすことにより固定を行っている。口径7.6cm・器高1.9cmを測る。身は１枚の銅板を円筒状に巻き、接合は10本の銅鋲で行われている。底板は円形の銅板をはめ、円筒部下端を内側に折り込むことにより行われている。口径7.6cm・器高21.7cmを測る。第４図12は青白磁合子身である。全体の1/3程度が残存する。底部には吉祥句と思われる刻印があるが判読できない。口径6.3cm・器高2.2cmを測る。第５図26は双鳥網文鏡である。面径約10.3cmを測る。鏡背部に「南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛」と３行にわたって墨で記されている。第５図27～29は銅銭である。内訳は第１表に示すとおり全て北宋銭である。

４．まとめ

以上、左坂古墳群で検出された５基の経塚状遺構とその遺物の紹介を行った。若干の問題点の整理を行いまとめとしたい。

遺構の形態では大きく大形土坑を伴うものと、伴わないものに大別することが可能である。ＳＸ01がＳＸ02・03に切られていることから、おおむね大形土坑を伴うものから伴わないものへと変遷するものと考えられる。久美浜町豊谷遺跡の報告において、肥後弘幸氏[注2]はその断面形態に着目し、遺構の変遷観を提示しておられるが、今回の調査でもおおむねその変遷観に合致するものと考えることができる。

埋土・閉塞状況では全体として類似するＳＸ01とＳＸ05の間に差違がみられた。ＳＸ01は大形土坑の埋土が堅く締まっており、自然石を用いて閉塞しているのに対し、ＳＸ05の埋土はきわめて柔らかく閉塞施設を持たない。同様の類型の遺構でも、埋土の状況を検討する限り、異なった原理が背後にある可能性がある。

経塚状遺構の性格については、大形土坑を伴うものに関して、杉原和雄氏は墳墓の可能性を指摘しておられる[注3]。今回の調査では火葬骨などを検出する事ができず、埋葬施設であるという確証を得ることができなかった。

遺物には優品が多い。そのうちでもＳＸ01出土銅銭の枚数が、23枚と非常に多い点が注意される。京都府下の銭貨を伴う経塚を集成・検討した森島康雄氏によれば[注4]、大形土坑に横穴を掘る形態のもの(Ａタイプ)には１枚のみが埋納される例が多いとされ、土坑が切り合う形態のもの(Ｂタイプ)には９枚が埋納される例が多いとされる。ＳＸ01は森島氏分類のＡタイプに分類されるものであり、その銭貨の出土量は群を抜いて多い。一方のＳＸ05では出土銭貨の枚数は３枚と森

島氏の集成に合致した結果を示している。このような、出土銭貨量の違いは、遺構埋土の状況と相まって、両者の性格の差を反映しているのではないだろうか。

経筒ではＳＸ01に鉄製のものが、ＳＸ05には銅製のものがそれぞれ埋納されていた。両者とも、在地で生産されたものとは考えられず都を介在して入手されたものであろう。

以上、不十分ながら若干のまとめを行った。今後、同種の遺構の増加に伴い、さらに詳細な検討が行われるものと思われる。特に、大形土坑の性格については脂肪酸分析などの理化学的方法も使用しながら検討をするべきであろう。(注5)

なお、本稿をなすにあたって、杉原和雄氏(京都府立京都府山城郷土資料館)より多大なご指導をいただいた。記して謝意を表したい。

(いしざき・よしひさ＝調査第２課調査第１係調査員)

注１　石崎善久「左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』89冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

注２　肥後弘幸「豊谷遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査概報』1992　京都府教育委員会)　1992

注３　杉原和雄「経塚と墳墓」(『考古学雑誌』74-4)　1989

注４　森島康雄「京都府における銭貨を伴う経塚」(『出土銭貨』第６号　出土銭貨研究会)　1996

注５　今回の経塚状遺構でも脂肪酸分析用の埋土のサンプリングは実施したが、諸般の事情により分析を行うことができなかった。

第８図　双鳥網文鏡((財)元興寺文化財研究所撮影)

近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)

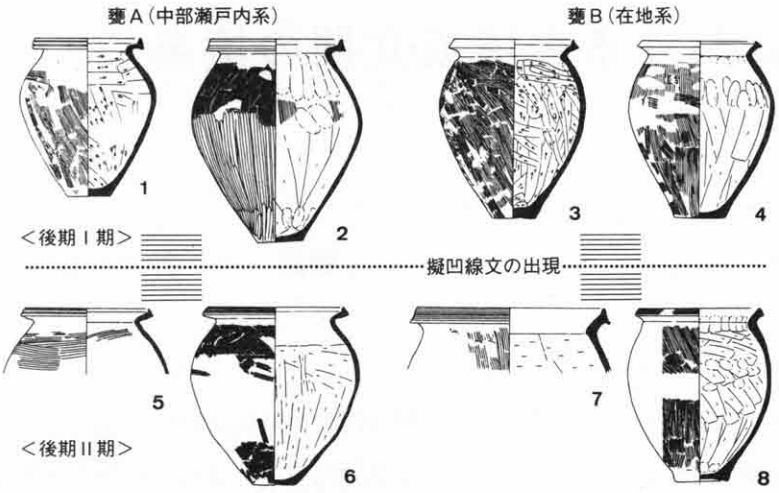
野島　永・野々口陽子

5．既存の編年との対応関係

前稿[注38]では、丹後地域の墳墓出土土器を主体とした弥生時代後期から古墳時代前期の土器のおよその変遷を明らかにした。この作業は、近年、増加している古墳出現期前後の墳墓の築造時期を再考し、その変遷を明らかにすることを意図したものではあるが、墳墓出土資料の希薄な時期については、集落遺跡の出土資料でその空白期を補い、土器の変遷のおおまかな概要を示すことに努めた。前稿で呈示した変遷は、既存の丹後地域の土器の編年的研究と対応する部分がある一方で、整合性を持たない部分も大きいため、本稿では、先行研究との対照作業を行い、相違点や問題点を明らかにしたうえで、現状で可能な限り、周辺地域の土器変遷との併行関係を探る。

北近畿の弥生時代の後期土器の研究は、1970年～1980年代に相次いで発掘された遺跡において、主に遺跡単位の土器の変遷が検討されたが、これらを総括したのは、1989年の『京都府弥生土器集成』であった。このなかで石井清司氏と小山雅人氏は、それぞれ丹後・北丹波の後期土器の編年的検討を試み[注39]、石井氏はさらに、同年に刊行された『弥生土器の様式と編年』(以下、『様式と編年』とする)において、丹後・丹波地区の後期土器の変遷を示した[注40]。また、1995年には、肥後弘幸氏が、丹後地域の後期土器を対象として、その編年的検討を行っている[注41]。石井氏と肥後氏の研究のなかで用いられた基準資料は、前稿において、筆者が用いた基準資料と重なる部分が大きく、ここでは各資料の帰属時期についての大まかな対照作業を行っておきたい。

まず、後期前半の土器群の位置づけであるが、北近畿では、1992年の兵庫県豊岡市東山墳墓群で、墳墓出土土器の良好な一括資料が報告され、松井敬代氏らによって、後期前半の土器として位置づけられたこと[注42]で、丹後町大山墳墓群に先行する段階の土器様相が、具体的に明らかにされた。この調査ののち、丹後地域でも、大宮町左坂墳墓群や、同三坂神社墳墓群で、該期の良好な一括資料が得られ、後期前半期の土器様相がようやく明らかになった。『様式と編年』の段階では、石井清司氏は、後期初頭の土器群として、久美浜町ＳＤ－21Ⅲ層出土資料をあげ、ＳＤ－21Ⅳ層(Ⅳ様式)→同Ⅲ層(Ｖ－１様式)→同Ⅱ層(Ｖ－２様式)と連続的に堆積されたとする層位学的成果を重視し、Ⅳ様式とＶ様式の過渡的様相を示すと位置づけている。しかしながら、近年の調査成果からみれば、Ⅳ層からⅢ層への土器様相にはヒアタスがあり、橋爪遺跡ＳＤ－21Ⅲ層出土資料には、甕の組成として、中部瀬戸内系甕を主体とする先行する一段階を設定する必要があるといえる。したがって、石井編年のＶ－１・２は、それぞれ後期Ⅱ期古・新におおよそ対応し、Ｖ－３期は、後期Ⅳ期に対応すると思われる(第１表)。また石井編年Ｖ－２とＶ－３の間には、



1・3.大宮町三坂神社墳墓群　2・4・8.豊岡市東山墳墓群
5・7.久美浜町橋爪遺跡ＳＤ21Ⅲ層　6.大山墳墓群

第１図　北近畿における後期前半期の甕の２系譜

型式上のヒアタスが大きく、この間に一段階を新たに設定し、正垣遺跡ＳＤ05の資料をあて、後期Ⅲ期とした。後期Ⅲ期は、新たな形式としては有段口縁の広口壷が出現し、鉢のあらたな型式が定着すること、あるいは擬凹線文有段口縁器台や同高坏の型式変化や、各形式の口縁部の拡張傾向などからも、導き出される段階である。

丹後地域において、『様式と編年』以降の後期土器の研究としては、肥後弘幸氏による編年的検討が知られる。肥後氏は、後期を五期区分したうえで、後期初頭をＶ－１期とし、基準資料として、久美浜町鳥取城下層、大宮町大谷遺跡の資料や、さらに後論で、左坂墳墓群の前半期の土器群をあげ(注43)、その組成内容をほぼ明らかにした。これらの資料は、筆者が後期Ⅰ期とするものとほぼ内容を同じくしており、肥後氏のＶ－１期と、後期Ⅰ期とは、基本的に対応する。しかしながら、後期のはじまりを「擬凹線文の出現および中期的な土器の崩壊」とし、擬凹線文の出現を中期と後期を画する指標とすることについては、擬凹線文は、北近畿系甕Ｂ（第１図）の発展過程のなかで、その属性の一つとして出現している可能性が高く、後期のなかでもやや遅れて現れる特徴であり、問題があろう。後期前葉の土器群では、中期後半からつづく凹線文系の甕Ａが主体となっており、「擬凹線文の出現」によって、後期初頭の土器と中期の土器群との弁別を行うのは困難である。

また、肥後氏がＶ－２・３にあげた資料は、それぞれ後期２期古・新の資料に対応する部分があるものの、後期後葉とされたＶ－４には、筆者が後期２期古・新とした大山墳墓群周辺第23主体部・同第26主体部出土土器があげられ、後期Ⅲ期とした正垣遺跡ＳＤ05の土器群とともに基準資料とされており、整合が不可能なものとなっている。この段階は『甕Ａｂの複合口縁化がさらに著しくなる時期』ではあるが、『予想的な土器設定』と設定根拠の不安定性を明らかにされているとおり、多形式の同時期性が確認できない一群であり、設定に関して、その論拠を欠くと言わざるを得ない。

以上、丹後地域における先行研究との対照作業を行った。つぎに、搬入土器や、模倣土器、あるいは共通する型式的特徴を手がかりに、日本海側の周辺地域との併行関係を探っておきたい。

６．日本海域の諸地域との併行関係

＜但馬＞　但馬では、前述したとおり、豊岡市東山墳墓群の報告における、後期前葉～中葉に

かけての土器群についての松井氏による編年的検討があり、さらに『弥生土器の様式と編年－山陰・山陽編－』においても、谷本　進氏により、後期を４期区分する編年案が出されている。[注44] 但馬は、地理的にも丹後と隣接しており、基本的には同一の地域圏を形成し、土器組成、型式ともほぼ同様の変遷をとげている。編年案の対応関係をみてゆくと、東山Ｖ－１期および但馬Ｖ－１期は、丹後後期Ⅰ期に、また、東山Ｖ－２期および但馬Ｖ－２期は、丹後後期Ⅱ期古・新に対応する(第２図)。さらに但馬Ｖ－３期の基準資料とされた若宮墳墓群４号墓出土の一括資料には、口縁部の拡張が未発達なものと、定式化し口縁部が拡張する擬凹線文高坏が共伴することから、丹後後期Ⅳ期でも古い時期に、併行関係の１点を認める。現状では但馬Ｖ－３期の資料をさらに二分し、後期Ⅲ期・Ⅳ期を設定した形となっている。続く但馬Ｖ－４期は、有段口縁高杯の口縁部に施される擬凹線文が消失するものが含まれることや、口縁部が短く立ち上がり、端部に面をなす主に庄内併行期古相で盛行する北丹波系のタタキ甕が含まれることなどから、この段階は、丹後Ⅳ期の後半から庄内併行Ⅰ期を含むある程度の時間幅をもって設定されたと考えている。

＜北陸＞　北陸では、北加賀の西念・南新保遺跡で、多年にわたる調査の結果、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の大量の土器資料が蓄積され、同一遺跡内での土器編年が、楠正勝氏によって検討されている。[注45] この編年は、後期中葉から庄内併行期の小様式とその各小期設定については、能登の資料を中心とした栃木英道氏の編年案[注46]や、南加賀の田嶋明人氏による漆町遺跡の編年案[注47]をともに配慮した内容になっており、その小様式の認識、および時期区分は、北陸地方の広域編年に対応しうる性格のものとされている。

北陸の後期前半期の土器様相は、早くから、谷内尾晋司氏や吉岡康暢氏らによって、北近畿の土器群との類似性が指摘され[注48]、特に高杯の型式群には著しい親縁関係が認められる。こうした親

第１表　日本海域の土器編年併行関係対照表

(出雲) 中川 1996	(出雲) 松本 1992	(出雲) 花谷 1987	(伯耆) 清水 1992	(伯耆) 松井 1997	(因幡) 岩吉遺跡 1991	(北近畿) 谷本 1992	(北近畿) 野々口 1999	(越前) 赤澤 1996	(南加賀) 漆町遺跡 1992	(北加賀) 西念遺跡 1996	(北加賀) 谷内尾 1983	(北加賀) 南 1995	(能登) 栃木 1995	(能登) 吉岡 1991
山陰Ⅰ	Ⅴ－１		Ⅴ－１	Ⅴ	Ⅱ古	Ⅴ－１	後期Ⅰ 古	Ⅴ－１	１群	猫橋 2 1		51	6	Ⅴ期 1
					Ⅱ新		後期Ⅰ 新			猫橋 2 2				
山陰Ⅱ			Ⅴ－２	Ⅵ	Ⅲ古	Ⅴ－２	後期Ⅱ 古	Ⅴ－２		猫橋 3		52		Ⅴ期 2
							後期Ⅱ 新			猫橋 4		53		
山陰Ⅲ	Ⅴ－２	九重３号墓式		Ⅶ	Ⅲ新	Ⅴ－３	後期Ⅲ	Ⅴ－３	２群	法仏 3 1	法仏 1	54	7 1	Ⅵ期 1
										法仏 3 2			7 2	
山陰Ⅳ	Ⅴ－３	的場式	Ⅴ－３	Ⅷ	＋		後期Ⅳ		＋	法仏 3 3	2	55	7 3	
										法仏 3 4			7 4	
山陰Ⅴ	Ⅴ－４	鍵尾Ａ区５号墓式	Ⅵ－１	Ⅸ	Ⅳ	Ⅴ－４		Ⅴ－４	３群	月影 4 1	＋	56	8 1	Ⅵ期 2
				Ⅹ						月影 4 2			8 2	
山陰Ⅵ 古							庄内併行Ⅰ 古	Ⅴ－５	４群	月影 3	月影 1	61	8 3	Ⅵ期 3
山陰Ⅵ 中		大木式	Ⅵ－２	ⅩⅠ	Ⅴ古					月影 4		62	8 4	
山陰Ⅵ 新				ⅩⅡ	Ⅴ新		庄内併行Ⅰ 新		５群	5 1	月影 2	63	9 1	Ⅰ期 1
							庄内併行Ⅱ		６群	5 2		11	9 2	Ⅰ期 2
		小谷式		ⅩⅢ	Ⅵ古		布留Ⅰ		７群	5 3	古府クルビ	12	9 3	Ⅱ期 1
				ⅩⅣ			布留Ⅱ		８群	5 4			9 4	Ⅱ期 2

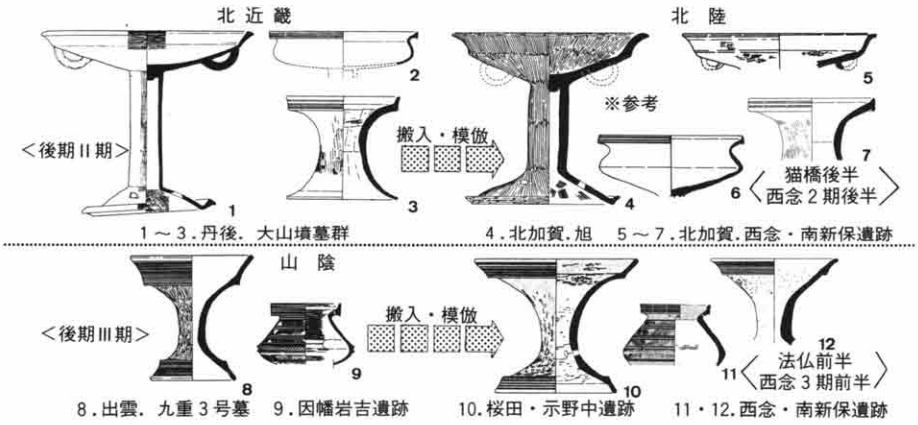
西念・南新保編年５期前半(１・２)は白江式

縁関係の強い形式を中心に、具体的にその併行関係についてみると、まず後期前半の丹後後期Ⅰ期は、内傾する口縁部に凹線文を施す中部瀬戸内系甕が特徴的にみられるが、このタイプの甕は、猫橋式前半とされる西念２期前半に位置づけられており、西念２期前半と、丹後後期Ⅰ期の併行関係をみることができる。猫橋式後半の西念２式後半には、口縁部が長く拡張し、擬凹線文を施文する甕が出現することや、擬凹線文高杯の口縁端部が肥厚し、杯部下半が鉢状に外方に張りだすことから、西念２期後半は、おおよそ丹後後期Ⅱ期に併行するものと考えられる(第２図)。

丹後後期Ⅲ期との併行関係は、法仏式とされる西念３期前半の土器群に含まれる北近畿系の擬凹線文高杯の型式が、丹後では、後期Ⅲ期にみられる口縁部を拡張する高坏であることから、後期Ⅲ期と西念３期前半の併行関係の一点が確認される。北陸地方の後期後半の小様式である法仏式は、北近畿系の土器の影響が強くみられた猫橋式後半の土器様相から一転して、山陰系土器の影響が祭式土器を中心に強まるとともに、装飾性の高い北陸地方の独自の型式群が展開する段階とされる。猫橋式から法仏式への様式変換の画期を前後して、北陸で出土する北近畿系擬凹線文高坏の型式は、杯部が、深い鉢状から皿状を呈するようになり、口縁形態は、肥厚し短くおさめるものから、薄く長く拡張する形態へと変化している。こうした変化は、丹後における後期Ⅱ期新から後期Ⅲ期への型式変化を示すものであり、法仏式と丹後後期Ⅲ期のはじまりが、時間的には大きく隔たるものでないことを示している。また法仏式後半の西念３期後半は、丹後後期Ⅳ期の多くの部分と重なるとみられるが、その終焉が西念４期前半の月影式前半とどのように関わるのか、資料的な制約から現段階では十分明らかにできず、やや流動的である。

月影式前半は、丹後・北陸の両地域とも、土器型式の在地色が高まり、独自性が強いうえに、外来系土器との接触が希薄であるため、併行関係の検討を困難なものにしている。丹後の後期Ⅳ期終末の状況については、丹後庄内併行期Ⅰ期古の白米山北１号墳出土の北陸系の壷が、月影式前半の南新保４期前半とされる壷の形態と近似しており、ここに丹後庄内併行期Ⅰ期古と月影式前半との接点をみておきたい。

＜山陰＞　山陰では、早くから山陰西部地方の青木遺跡の編年案[注49]が広く用いられてきたが、その資料的な制約から、特に後期前葉から中葉にかけての一型式群の時間幅が大きいなどの問題があり、鳥取県岩吉遺跡群における谷口恭子氏の編年[注50]や、松井　潔氏[注51]や中川寧氏[注52]による山陰地方の広域編年を意図した編年案を中心に、補強・修正されるべき部分が明らかにされてい



第２図　後期Ⅱ・Ⅲ期における土器の地域間交流

る。ここでは、後期前葉については、岩吉編年を、また中葉から後葉にかけては、山陰東部の資料を組み込んだ中川編年を補足しつつ、因幡・伯耆の土器を対象にした広域編年である松井編年との対応関係を中心にみてゆく。

まず、後期前葉については、岩吉Ⅱ期古と、Ⅱ期新～Ⅲ期古との区分は、中部瀬戸内系甕を主体とする段階から、直立気味に立ち上がり、やや拡張した口縁部に擬凹線文(報文では沈線とされる）を施す甕への変化が指標とされており、松井Ⅴ・Ⅵ期の時期区分もほぼこの変化に対応する。この時期の北近畿と山陰との土器交流は、北近畿と北陸との交流が密であるのと対照的に希薄で、直接的な搬入土器により、併行関係を推定することは難しい。しかしながら、後期前半の土器群を弁別する指標を、凹線文系の中部瀬戸内系甕から、擬凹線文系の在地系甕への変換と考えれば、山陰と丹後の後期前葉の時期区分の指標は基本的に同じであり、丹後後期Ⅰ期は松井Ⅴ期に、また後期Ⅱ期は松井Ⅵ期におおよそ対応するものと推定される。

丹後後期Ⅲ期との対応関係は、松井Ⅳ期に続くⅦ期の基準資料である、因幡の秋里遺跡ＳＫ02出土の北近畿系擬凹線文高杯が、口縁部形態が薄く拡張する特徴を示すことや、西桂見遺跡ＳＫ04出土の裾部がまだ未発達な北近畿系擬凹線文器台が含まれていることから、松井Ⅵ期と丹後後期Ⅲ期との接点をみることができる。この松井Ⅶ期の土器相は、いわゆる九重式の組成内容を示すものであり、岩吉Ⅲ期新および中川Ⅲ期にあたる。この段階は、台付装飾壺や山陰系擬凹線文器台などの祭祀土器を中心に、山陰と北陸との土器交流が強まる段階で、これらの土器が日本海側の各地域における編年の併行関係を探るうえで、極めて有効な指標となる。法仏式前半の西念３期前半で呈示される山陰系擬凹線文器台の型式は、いわゆる九重式の器台に近似するものであり(第２図)、松井Ⅶ期および中川山陰Ⅲ期の土器相で捉えられよう。また、鳥取県岩吉遺跡出土のⅢ期新の台付装飾壺は、松井Ⅶ期、中川山陰Ⅲ期の組成を構成する資料として呈示された土器だが、この台付装飾壺とほぼ同型式の壺が、石川県西念・南新保遺跡でも出土しており、法仏式前半の西念３期前半の資料として位置づけられている。これらの搬入・模倣土器の特徴から、九重式の組成内容を示す松井Ⅶ期・中川山陰Ⅲ期と、法仏式前半の西念３期前半は、存続時期をある程度共有するものであろう。さらに丹後との併行関係については、松井Ⅶ期の土器群に含まれる北近畿系擬凹線文器台および高杯の一群が、丹後後期Ⅲ期の型式であることから、松井Ⅶ期(九重３号墓式）―丹後後期Ⅲ期―西念３期前半(北陸法仏式前半)の併行関係の１点を確認することができる。

松井Ⅷ期は、おおよそ中川山陰Ⅳ期の組成を示し、的場式とされる出雲西谷３号墓の供献土器群が、この段階の古相を示すとされる。また、松井Ⅷ期新相とされる鳥取市西大路土井遺跡住居跡資料には、北近畿系土器の一括資料が含まれており、人の移住・移動が想定されているが、これらはほぼ丹後後期Ⅳ期新相を示す資料であり、併行関係の一端を窺い知ることができる。

以上、日本海域の諸地域と丹後の土器編年との併行関係を検討した。これまでに示した丹後の土器編年に従い、丹後の主要墳墓の時期と概要をまとめたものが、第２表である。表より、墳墓の変遷のなかで、特に、後期Ⅲ期における大風呂南１号墓出現の段階が、大きな画期となってい

第２表　各墳墓の中心主体部の諸属性

時期	墳墓名	群形成	墳丘規模	中心主体部							
				墓壙規模	棺形態	施朱	土器供献	外来系土器	副葬品		
									青銅器等	大形鉄器	玉類
中期後葉	奈具１号墓	墳丘墓群	21.2×10.7	2.9×2.2	箱形木棺	×	墓壙内破砕	－	－	－	－
	寺岡ＳＸ56	周溝墓群	33×20	6.7×4.2	Ｈ形木棺	×	墓壙内破砕	－	－	－	－
後期Ⅰ	左坂墳墓18号墓	台状墓群	10×７	3.2×1.8	Ｈ形木棺	×	墓壙内破砕	－	－	－	－
	三坂神社３号墓	台状墓群	一辺18	5.7×4.3	Ｈ形木棺	○	墓壙内破砕	－	漆塗り杖状木製品	素環頭刀１	水晶玉16・ガ勾玉１・ガ管玉14・ガ小玉10
後期Ⅱ	左坂26号墓	台状墓群	13×10	3.8×2.6	Ｈ形木棺	○	墓壙内破砕	－	－	素環頭刀１	－
	大山３号墓	台状墓群	2.8×1.8	2.2×0.5	箱形木棺	×	墓壙内破砕	畿	－	－	ガ管玉1
後期Ⅲ	大風呂南１号墓	２基独立	30×25	7.3×4.3	舟形木棺	○	墓壙内破砕	－	銅釧13・ガラス釧１・貝釧１	鉄剣11	ガ勾玉10・ガ管玉272
	犬石西Ｂ14号墓	台状墓群	４×６	2.7×1.3	Ｈ形木棺	×	墓壙内破砕	－	－	※鉄剣	－
後期Ⅳ	浅後谷南墳墓	独立墳	一辺20	6.5×4.4	舟形木棺	○	墓壙内破砕	－	－	鉄剣２	ガ勾玉５・ガ小玉約400
	金谷１号墓	独立墳	一辺15	５×2.7	舟形木棺	○	※墓壙内破砕	－	－	※鉄剣	－
庄内併行Ⅰ	白米山北古墳	独立墳	27×14	2.8×1.4	箱形木棺	×	礫敷上	北・畿	－	鉄剣1	－
	内和田５号墳	２基独立	15×12.5	4.5×３	Ｈ形木棺	△	墓壙上	北・山・畿	－	鉄刀１	－
庄内併行Ⅱ	左坂Ｇ13号墳	台状墓群	一辺13	3.8×2.7	箱形木棺	△	墓壙上	山・畿	－	－	－
	大田南２号墳	古墳群	22×18	8.0×3.6	舟形木棺	○	墓壙上	山・畿	画文帯神獣鏡１	鉄剣１	－
	大田南５号墳	古墳群	18.8×12.3	4.6×3.2	組合式石棺	○	墓壙上	北・山・畿	方格規矩鏡１	鉄刀１	－

＜施朱の△は赤色顔料、「畿」は近畿系、「北」は北陸系、「山」は山陰系、「ガ」はガラス、「緑凝」は緑色凝灰岩とする。※は周辺埋葬で確認。＞

ることは明らかである。大風呂南１号墓は、群形成のうえで、集団墓から最初の独立を果たした大形墳丘墓であり、棺形態も、「Ｈ」形組み合わせ木棺から、棺底が舟底状を呈する舟形木棺へと変化し、後期末葉の主要墳墓の中心埋葬に採用される舟形木棺の初現的な棺と推定される。また副葬品は、多量の鉄剣類に加え、南海産のゴホウラ製の貝輪、ガラス製釧、多量の有鈎銅釧が副葬されており、被葬者に、遠隔地交易を管掌した首長としての性格を認めることが許されよう。この大風呂南１号墓の築造される後期Ⅲ期は、北陸では、法仏式古相とされる福井県小羽山30号墓が築造され、山陰の各地でも四隅突出形墳丘墓の築造が本格化する時期であり、日本海側の諸地域で、大形墳丘墓の築造が相次ぎ、社会的に大きな画期を迎える段階といえる。

今回は、先の編年私案と丹後における既存の編年との対照作業をするとともに、日本海域の各地域の土器編年案との併行関係を探った。この作業は、次稿で行う古墳出現期前後の丹後の墳墓と、日本海域の各地で築造された墳墓との併行関係の検討を、より正確なものとし、大形墳丘墓築造の歴史的背景とその意義について考察するための基礎的作業でもある。

７．丹後地域の副葬鉄器と着装玉類

鉄刀については、おおむね後期初頭～前葉段階(野々口編年後期Ⅰ期)における素環頭刀(三坂神社墳墓群３号墓第10主体部・左坂墳墓群26号墓第２主体部)と、後期末葉～庄内式併行期(同編年後期Ⅳ期～庄内Ⅱ期)の短刀に分けられる。岡村秀典氏によると、三津永田遺跡の素環頭鉄刀や井原鑓溝遺跡、桜馬場遺跡の鉄刀など、北部九州の後期前葉の鉄刀は、前漢後期に鉄剣から鉄刀に変換されつつあった中国漢の最先端技術で製作されたものとし、それを倭人が入手し得たのは、倭が単に徳を慕うのみの朝貢国から外臣としての地位を得たこと、つまりその冊封体制下に入ったことによると解釈されている[注53]。近畿地方北部の丹後地域においても、弥生時代後期初頭の素環頭鉄刀は漢あるいは新との貢賜関係あるいはそれ以上の政治関係を想定することも可能であ

第３表　丹後地域の副葬鉄器数

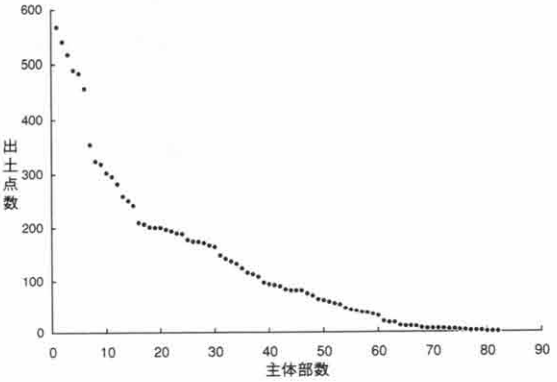
所在地	遺跡名	遺構(数量)	時期	鐶刀	刀	剣	鏃	鉇	刀子	鋤先	他
中郡	大谷	埋葬主体1	後期Ⅰ期				1				
中郡	三坂神社	埋葬主体9	後期Ⅰ期	1			10	5	1		
竹野郡	坂野丘	埋葬主体1	後期Ⅰ期			1					
中郡	左坂	埋葬主体25	後期Ⅰ・Ⅱ期	1	1	1	26	13	2		
竹野郡	大山	埋葬主体他10	後期Ⅱ・Ⅲ期				3	8	1		
与謝郡	大風呂南1号墓	埋葬主体2	後期Ⅲ期			13	5	1			やす状鉄器1
与謝郡	大風呂南2号墓	埋葬主体1	後期Ⅲ期			1					
与謝郡	犬石B	埋葬主体2	後期Ⅲ期			2					
与謝郡	玉峠	埋葬主体3	後期Ⅲ期				1	2			
中郡	帯城	埋葬主体4	後期Ⅳ期			3		1	1		不明鉄器1
与謝郡	西谷	埋葬主体2	後期Ⅳ期		1	2					不明鉄器2
中郡	金谷	埋葬主体7	後期Ⅳ期			5	3	4			指環状品2･他10
竹野郡	浅後谷南	埋葬主体3	後期Ⅳ期			5		2			環状鉄製品1
中郡	赤坂今井	埋葬主体5	後期Ⅳ期～		1		1	5			
与謝郡	白米山北	埋葬主体1	庄内併行Ⅰ期			1					
与謝郡	内和田	埋葬主体8	庄内併行Ⅰ期		1	1	11	5		1	
竹野郡	大田南2号墓	埋葬主体1	庄内併行Ⅱ期			1					不明鉄器1
竹野郡	大田南5号墓	埋葬主体1	庄内併行Ⅱ期		1						

り、そういった意味でも注目される。

第３表でみられるように、丹後地域の弥生時代鉄器の多くは、墳墓における副葬品である。集計した丹後地域の弥生後期から終末期の墳墓における主体部342基中、鉄刀は５例しか出土していないのに対して、鉄剣は36例であった。岩滝町大風呂南墳墓群１号墓第１主体部では11口もの鉄剣が副葬されており、すでに銅釧とともに貴重財の同種大量副葬の兆候がみられる。

鉄剣・鉄鏃・鉇（やりがんな）はともに但馬地域と類似した形態のものであり、それらが墳墓副葬品として出土例が多いことも両地域に共通してみられる地域性である。また、指輪状の鉄製品や鋏（かすがい）など、他の地域にはみられない特異な鉄器の存在も両地域の鉄器生産の親縁性をうかがわせる。だが、一方で両地域の副葬鉄器の器種ごとの比率は異なる。丹後地域では、鉄器出土埋葬主体85基中、鉄刀５例、鉄剣36例、鉄鏃61例、鉇46例、刀子５例、鋤先１例などであるのに対して、但馬地域では、鉄器出土埋葬主体78基中、鉄刀１例、鉄剣13例、鉄鏃29例、鉇61例、袋状鉄斧２例などとなっている。丹後地域では鉄刀・鉄剣・鉄鏃など武器の出現比率が高いのに対し、但馬地域では鉇などの鉄工具の出現比率が丹後地域より高いと言えそうである。

丹後地域における墳墓主体部出土の玉類は、その出土埋葬主体90基、総数11,902点以上となる。ほとんどが(カリ)ガラス製小玉であるが、水晶製・碧玉製なども副次的にみられる。第３図のように主体部ごとの出土総数を示してみると、ガラス玉を中心として450点を超える一群が突出しているのがわかる。小玉400点以下200点以上にも一群がみられるが、200点以下は漸減し、群化しない。



第３図　墳墓主体部別出土玉類総数

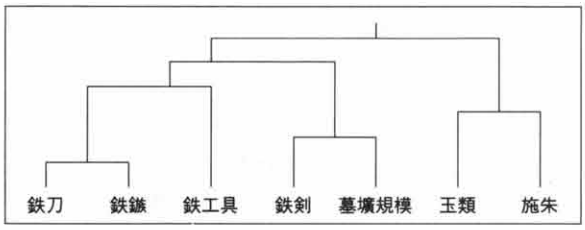
8．各種副葬(着装)遺物による階層性の抽出

以上のような予備的知識をもって、葬送儀礼に伴う財の投入の度合いを推し量るために、まず墓壙規模および墓壙に埋置される財の多寡を、葬送に投入された財の総体に比例するものと仮定し、かつ出現頻度の少ない遺物ほど、当該地域における当時の社会にとって入手が困難であった物、つまりそれを持つことで他者との威信の差を明示できうる可能性の高いものと認識したい。おそらくそれらの財は、隣接地域集団からの互酬的な贈与によって容易に入手できる物ではなく、地域社会の外界、外部社会との貢賜関係などによってもたらされた外部社会の威信を象徴する譲渡不可能に近い財であり、いわば「贈与の霊」を内在化する物に代表されると思われる。もちろん、多くの民族誌が示すように市場経済以外では、それぞれの交換財に応じた経済諸領域が存在しており[注54]、そのような高位の経済領域に属する財の贈与に対しては、生活必需財のように日常において消費・使用頻度の高い財ではなく、贈与される財に準じた使用頻度の極めて低い財を用意せねばならず、それには内部社会において特殊な貴重財の生産に労働の集約的投入を行わねばならないことが前提となる。つまり、外部社会との財の相互贈与は、内部社会においては労働の集約化を促し、労働価値が威信という上位の価値体系に変換(convert)されうる社会の諸条件を成熟させることとなる。

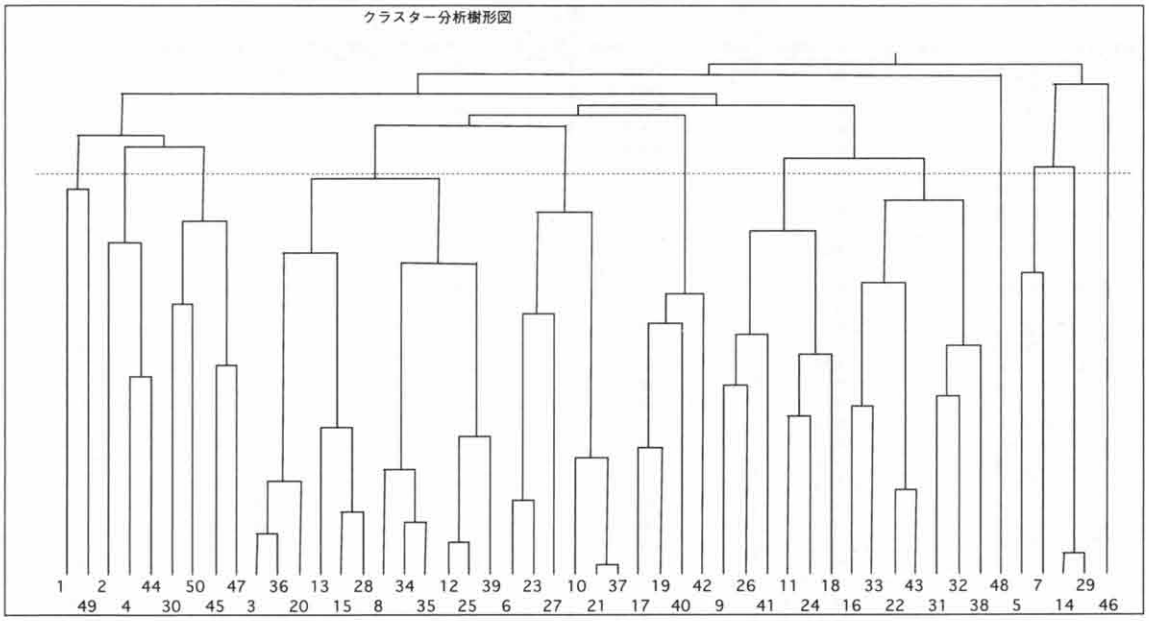
さて、具体的作業として墳墓主体部の副葬(着装)遺物の出現頻度を基準とした階層性の客観的把握のために多変量解析によるクラスター分析を行う[注55]。丹後地域における各種副葬(着装)遺物の出現比率を各品目ごとに百分率で数値化し、ユークリッド距離による項目ごとの数値計算を行い、合併後ウォード法によってグループ化した。まず、墓壙規模(検出面における墓壙面積)と各種副葬(着装)品および施朱の相関について述べてみたい(第４図)。鉄刀と鉄鏃は最も相関が強く、次に墓壙規模と鉄剣、玉類と朱が強いことがわかる。また、玉類は墓壙規模や鉄製副葬品の有無に左右されずに出土することも示している。つまり、被葬者の玉類着装の有無によって、墓壙の規模や墓壙に投入される財の多寡が左右されるものではなかったとみることができる。

さらに各種副葬(着装)遺物と施朱の出現頻度による墳墓主体部のグループ化を行ってみる(第５図)。50分割クラスターを13群にまとめ、階層として示した(第３・４表)。

階層13は、鉄剣11口をもつ大風呂南１号墓第１主体部で、副葬(着装)遺物の様相は群を抜き、ガラス釧や銅釧などを含めて多種多量の貴重財が副葬品として投入された特別な葬送儀礼が想定される。階層12～10までは鉄刀１口を持つ。鉄刀1口の他に組み合わされる副葬(着装)品および施朱の有無によって３階層に分離する。階層９は、複数の鉄剣とその他の鉄器を副葬している一群である。玉類や朱のみられるものも含まれる。階層８は、先述したようにガラス小玉を主体として玉類450点以上がみられるものである。いずれも鉄製武器や鉄工具は伴わないが、施朱の割合が高く、先述したように玉と朱の相関が認められる一群である。階層７は、鉄剣１口と鉇



第４図　墓壙規模と各種遺物の相関関係



第5図　各種副葬(着装)品のクラスターによる墳墓主体部のグルーピング

などの鉄工具あるいは鉄鏃などが共伴する一群である。階層6は複数の鉄鏃と鉇が主体となり、一部玉類や施朱がみられる一群である。階層5は、鉄剣1口のみか、あるいはそれに施朱がみられる一群となる。階層4は、複数の鉄鏃のみか、それに玉類がみられる一群である。階層3には墓壙に水銀朱が施され、一部には玉類を共伴する一群である。階層3以下では、施朱はみられないが、玉類が共伴する場合はある。階層2は、おもに鉇などの鉄工具を一点のみ副葬する一群である。玉類が伴う場合があるが多くはみられない。階層1は副葬遺物および施朱が認められない場合である。あるいは被葬者に玉類が着装される場合もある。玉類のみのものを階層1－2、副葬(着装)遺物皆無の一群を1－1として分離する。

以上の各階層にまとめられた墳墓主体部は、仔細にみればその階層ごとに出現時期がある程度まとまってみられることがわかる。第4表では、各階層に含まれる墳墓主体部の時期を示したものであるが、後期前葉･中葉(後期Ⅰ・Ⅱ期)から後期後葉(後期Ⅲ期)にかけて共通してみられるのは、階層8・6・4・3・1であるが、後期末葉(後期Ⅳ期)から終末期(庄内併行Ⅰ・Ⅱ期)には、階層10・7・5・2・1に変化する様相を見て取ることができる。

9．埋葬配置の3類形と葬送における財の投入

前稿で示したように丹後地域で調査された弥生時代後期の墳墓には、その墳墓の造営を行なう各集団の葬送儀礼における社会規範の根拠となる信念体系に差異があり、それに相応した3種の手順によって埋葬が続けられたために、結果として異なる埋葬配置が共時的平面形態として現出したと考えた(第6図)。以下に墳墓における共時的埋葬配置の差異による分類を再論し、財の投入の階層性について検討したい。

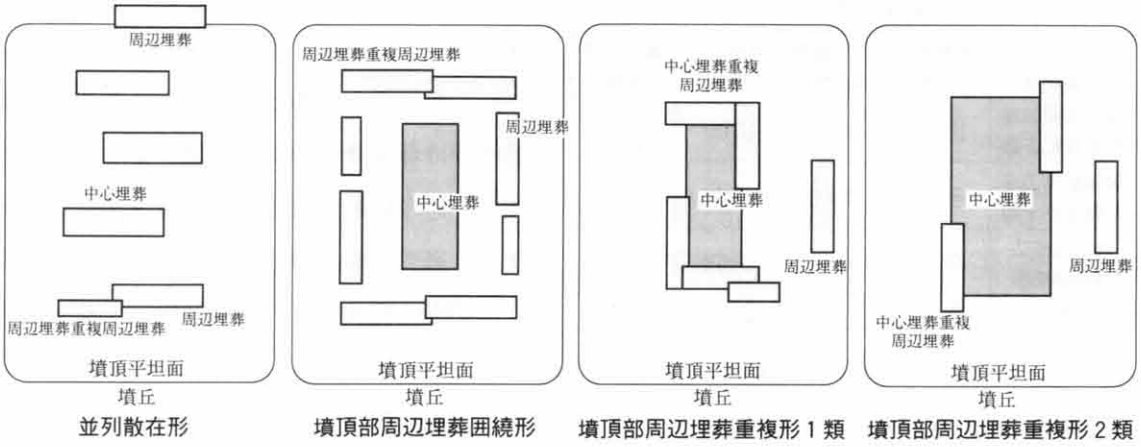
後期前半までは、丘陵を区画・整形することによって長方形平坦面を確保して埋葬を継続させ、連接した台状墓が丘陵全体を覆っていく過程を復原することができる。そのなかで、墳頂平坦面

第４表　墳墓主体部の階層と支群

階層	支群	主体部略称
13	48	大風呂南1-1
12	46	内和田5-1
11	14	三坂3-10
11	29	左坂1下層-5
10	5	大田南5-1
10	7	赤阪今井-7
9	1	浅後谷南-1
9	49	大風呂南1-2
8	17	三坂4-4
8	17	左坂14-6
8	19	三坂8-3
8	40	左坂25-10
8	40	左坂26-8
8	42	左坂31-1
7	30	左坂1下層-9
7	45	金谷1-6
7	45	金谷1-14
7	45	金谷1-15
7	45	帯城B南-5
7	47	内和田5-2
7	50	大風呂南2-1
6	9	三坂3-1
6	9	左坂24-20
6	9	左坂26-3
6	11	三坂3-3
6	11	大山周辺-18
6	18	三坂4-5
6	24	左坂16-2
6	26	左坂17-1
6	41	左坂26-4
6	41	左坂32-2
5	2	浅後谷南-2
5	4	浅後谷南-6
5	4	大田南2
5	4	金谷1-10
5	4	帯城A7-2
5	4	帯城B北-1
5	4	帯城B南-1
5	4	帯城B南-2
5	4	犬石B8-1
5	4	犬石B14-2
5	4	内和田4
5	4	白米山北-1
5	44	金谷1-5
4	16	三坂4-1
4	22	三坂8-8
4	22	左坂35-1
4	31	左坂1下層-10
4	32	左坂1下層-13
4	32	左坂25-1
4	32	左坂25-16
4	33	左坂1下層-15
4	38	左坂24-14
4	38	左坂26-2
4	38	左坂32-3
4	43	左坂32-1
4	43	大山3-1
4	43	大山5-1
4	43	内和田5-12
3	8	赤阪今井-10
3	8	三坂4-2
3	8	三坂8-13
3	8	左坂1下層-14
3	8	左坂14-5
3	8	左坂24-17
3	8	左坂24-22
3	8	左坂24-23
3	8	左坂24-25
3	8	左坂24-30
3	8	左坂25-7
3	8	左坂25-13
3	8	左坂25-14
3	8	左坂34-1
3	8	左坂34-2
3	8	左坂34-5
3	8	金谷1-2
3	12	三坂3-4
3	12	左坂16-1
3	25	左坂16-9
3	34	左坂14-1
3	34	左坂24-3
3	35	左坂14-2
3	39	左坂25-6
3	39	金谷1-3
2	6	赤阪今井-2
2	6	赤阪今井-3
2	6	赤阪今井-8
2	6	赤阪今井-11
2	6	三坂5-2
2	6	左坂14-10
2	6	金谷1-12
2	6	帯城B北-5
2	6	大山7-1
2	6	大山周辺-4
2	6	大山周辺-12
2	6	大山周辺-14
2	6	大山周辺-27
2	6	玉峠3-1
2	6	玉峠3-2
2	6	玉峠3-3
2	6	内和田5-3
2	6	内和田5-6
2	6	内和田5-8
2	10	三坂3-2
2	21	三坂8-7
2	21	左坂26-1
2	23	左坂15-12
2	23	大山周辺-9
2	27	左坂17-2
2	37	左坂24-9
1	3	浅後谷南-3
1	3	浅後谷南-4
1	3	浅後谷南-5
1	3	浅後谷南-7
1	3	浅後谷南-8
1	3	浅後谷南-9
1	3	大田南5-2
1	3	大田南5-3
1	3	大田南5-4
1	3	大田南4-1
1	3	大田南4-2
1	3	大田南4-3
1	3	赤阪今井-4
1	3	赤阪今井-5
1	3	赤阪今井-6
1	3	赤阪今井-9
1	3	赤阪今井-12
1	3	赤阪今井-13
1	3	三坂3-6
1	3	三坂3-8
1	3	三坂3-12
1	3	三坂5-1
1	3	三坂6
1	3	三坂7-1
1	3	三坂7-2
1	3	三坂7-3
1	3	三坂8-2
1	3	三坂8-4
1	3	三坂8-5
1	3	三坂8-10
1	3	三坂8-11
1	3	三坂8-12
1	3	左坂14-13
1	3	左坂15-2
1	3	左坂15-4
1	3	左坂15-5
1	3	左坂15-7
1	3	左坂15-8
1	3	左坂15-9
1	3	左坂15-10
1	3	左坂15-13
1	3	左坂16-3
1	3	左坂16-5
1	3	左坂16-7
1	3	左坂16-8
1	3	左坂17-3
1	3	左坂17-4
1	3	左坂17-5
1	3	左坂17-7
1	3	左坂17-9
1	3	左坂17-10
1	3	左坂17-11
1	3	左坂17-12
1	3	左坂18-1
1	3	左坂18-2
1	3	左坂18-3
1	3	左坂18-4
1	3	左坂18-5
1	3	左坂18-6
1	3	左坂19
1	3	左坂20
1	3	左坂21-1
1	3	左坂21-2
1	3	左坂23
1	3	左坂1下層-6
1	3	左坂1下層-7
1	3	左坂1下層-11
1	3	左坂1下層-12
1	3	左坂1下層-16
1	3	左坂1下層-18
1	3	左坂14-8
1	3	左坂14-9
1	3	左坂14-11
1	3	左坂14-12
1	3	左坂24-2
1	3	左坂24-4
1	3	左坂24-6
1	3	左坂24-7
1	3	左坂24-10
1	3	左坂24-11
1	3	左坂24-12
1	3	左坂24-13
1	3	左坂24-15
1	3	左坂24-16
1	3	左坂24-18
1	3	左坂24-19
1	3	左坂24-21
1	3	左坂24-24
1	3	左坂24-26
1	3	左坂24-27
1	3	左坂24-28
1	3	左坂24-29
1	3	左坂24-31
1	3	左坂24-32
1	3	左坂24-33
1	3	左坂25-2
1	3	左坂25-4
1	3	左坂25-8
1	3	左坂25-11
1	3	左坂25-12
1	3	左坂25-15
1	3	左坂25-17
1	3	左坂25-18
1	3	左坂26-5
1	3	左坂26-10
1	3	左坂22-1
1	3	左坂33-1
1	3	左坂33-2
1	3	左坂33-3
1	3	左坂33-4
1	3	左坂34-3
1	3	左坂34-4
1	3	左坂34-6
1	3	金谷1-1
1	3	金谷1-4
1	3	金谷1-7
1	3	金谷1-8
1	3	金谷1-9
1	3	金谷1-13
1	3	金谷1-17
1	3	帯城A7-1
1	3	帯城A7-4
1	3	帯城A8-1
1	3	帯城A8-2
1	3	帯城A8-3
1	3	帯城A8-4
1	3	帯城A8-5
1	3	帯城A周辺-1
1	3	帯城A周辺-2
1	3	帯城A周辺-3
1	3	帯城A9
1	3	帯城A10
1	3	帯城B北-2
1	3	帯城B北-3
1	3	帯城B北-4
1	3	帯城B北-6
1	3	帯城B北-7
1	3	帯城B北-8
1	3	帯城B北-9
1	3	帯城B北-10
1	3	帯城B北-11
1	3	帯城B北-12
1	3	帯城B北-13
1	3	帯城B北-14
1	3	帯城B北-15
1	3	帯城B北-16
1	3	帯城B北-17
1	3	帯城B南-3
1	3	帯城B南-4
1	3	帯城B南-6
1	3	大山4
1	3	大山5-2
1	3	大山8-1
1	3	大山8-2
1	3	大山周辺-1
1	3	大山周辺-2
1	3	大山周辺-3
1	3	大山周辺-5
1	3	大山周辺-6
1	3	大山周辺-8
1	3	大山周辺-10
1	3	大山周辺-13
1	3	大山周辺-15
1	3	大山周辺-16
1	3	大山周辺-17
1	3	大山周辺-19
1	3	大山周辺-20
1	3	大山周辺-21
1	3	大山周辺-22
1	3	大山周辺-23
1	3	大山周辺-24
1	3	大山周辺-25
1	3	大山周辺-26
1	3	犬石B14-1
1	3	犬石B14-3
1	3	犬石B14-4
1	3	犬石B15-1
1	3	犬石B15-2
1	3	玉峠2-1
1	3	玉峠2-2
1	3	玉峠2-3
1	3	玉峠3-4
1	3	玉峠3-5
1	3	玉峠3-6
1	3	玉峠3-7
1	3	玉峠3-8
1	3	玉峠3-9
1	3	玉峠3-10
1	3	玉峠3-11
1	3	内和田5-4
1	3	内和田5-9
1	3	内和田5-10
1	3	内和田5-11
1	3	内和田5-13
1	3	内和田5-14
1	3	内和田5-15
1	3	内和田5-16
1	3	内和田5-18
1	3	白米山北-2
1	3	大風呂南2-3
1	13	三坂3-5
1	13	三坂3-9
1	13	三坂3-14
1	13	三坂4-3
1	13	三坂8-1
1	13	左坂16-4
1	13	左坂14-13
1	13	左坂24-5
1	13	左坂24-8
1	13	左坂25-9
1	13	左坂26-6
1	13	大山周辺-11
1	13	大風呂南2-2
1	15	三坂3-13
1	15	左坂26-9
1	20	三坂8-6
1	20	左坂15-1
1	20	左坂15-6
1	20	左坂15-11
1	20	左坂16-6
1	20	左坂17-8
1	20	左坂1下層-8
1	20	左坂14-7
1	20	左坂24-1
1	20	左坂25-5
1	28	左坂17-6
1	28	左坂14-4
1	36	左坂14-3
1	36	左坂26-7
1	36	金谷1-11
1	36	大山周辺-7

第５表　副葬(着装)遺物の階層性と所属時期

階層	遺構数	出現比率	墓壙に投入された財の内容	後期Ⅰ・Ⅱ期	後期Ⅲ期	後期Ⅳ期	庄内期
13	1	0.29%	多量の鉄剣と鉄工具および玉類と施朱		■		
12	1	0.29%	鉄刀1と多量の鉄鏃				■
11	2	0.58%	鉄刀1と数点の鉄鏃・鉄工具および玉類と施朱	■			
10	2	0.58%	鉄刀1(+数点の鉄鏃・鉄工具)			■	■
9	2	0.58%	数点の鉄剣と鉄鏃あるいは鉄工具(+玉類・施朱)		■	■	
8	6	1.75%	450以上の玉類(+施朱)	■	■		
7	7	2.05%	鉄剣1と鉄工具(+鉄鏃および一部玉類・施朱)		■	■	■
6	10	2.92%	数点の鉄鏃と鉄工具(+玉類・施朱)	■	■		
5	13	3.80%	鉄剣1(+施朱)			■	■
4	15	4.39%	数点の鉄鏃(+玉類)	■	■		
3	25	7.31%	施朱(+玉類)	■	■	■	
2	26	7.60%	鉄工具1(+玉類)		■	■	■
1-2	40	11.70%	400以下の玉類	■	■		
1-1	192	56.14%	なし	■	■	■	■
合計	342	100.00%					



第６図　共時的埋葬配置による各類形

における中心埋葬はさほど意識されず、ほぼ同規模の墓壙を持つ埋葬主体が並列、あるいは一部直列・直交の位置関係を持って広がりつづける共時的埋葬配置を、並列散在形とし(第６図左)、墳頂中心に最も早く埋葬されるやや大きな墓壙を持つ主体部と、それを囲繞する墳頂周辺主体が形成されていく埋葬配置がある。墳頂部周辺埋葬囲繞形とした(第６図中)。周辺埋葬の墓壙自体はその後に埋葬されるさらなる周辺埋葬の墓壙によってその一端が破壊されることは注目できる。さらに、中心埋葬(初葬者)の墓壙一端のみを故意に破壊して重複させる墓壙の位置関係を墨守する一群がある(第６図右)。墳頂部周辺埋葬重複形とし、特に中心埋葬の墓壙が大形化するものを墳頂部周辺埋葬重複形２類とした(第６図右端)。墳頂部周辺埋葬重複形２類は、墳丘と中心埋葬の墓壙の大形化とともに、その隔絶性を強調し、墳丘裾周辺にまで埋葬を配置させる行為を明確にし始める。他の埋葬形態とは異なる集団の維持した社会の集合的記憶や社会規範の信念体系(祖先説話や創造神話)を誇示的に再生産させる葬送儀礼の肥大化の結果と推測される。

さて、上述の埋葬類形と埋葬主体の配置位置と副葬(着装)遺物による階層性との関連について述べてみたい。第５表は、埋葬類形と埋葬主体の配置位置によって、副葬(着装)遺物による階層性にどのような差異がみられるか示したものである。便宜的に第４表で示した階層番号の平均値で代理させる。墳頂部周辺埋葬重複形２類の中心埋葬は階層番号の平均値が10.33と最高になる。当該社会が最も入手しにくかった貴重財を投入した数少ない葬送を想定することができる。上述した各埋葬類形内において墳頂中心埋葬は最も高い数値を示しているが、各埋葬類形間に序列をみることもできる。すなわち、墳頂部周辺埋葬重複形２類を頂点として同1類と頂部周辺埋葬囲繞形、さらに並列散在形の墳頂中心埋葬がその下位に位置する序列を見て取ることができる。また、一方で墳頂部周辺埋葬囲繞形や並列散在形では、中心埋葬から位置的に離れるにしたがって副葬(着装)遺物による階層性が低くなる序列をみることもできる。しかし、墳頂部周辺埋葬重複形１・２類では、墳頂における中心埋葬重複周辺埋葬および墳頂周辺埋葬は墳丘周辺埋葬よりも副葬(着装)遺物による階層性が相対的に低い場合が多いことがわかる。それは、墳頂部に設定された埋葬被葬者の総体に投入されうる財の割合がより中心埋葬に集中したと説明できる。つまり、それだけ中心埋葬に集団の余剰労力を投入する割合を高めた結果とみることもできる。その意味

第６表　埋葬類形と配置位置による階層性

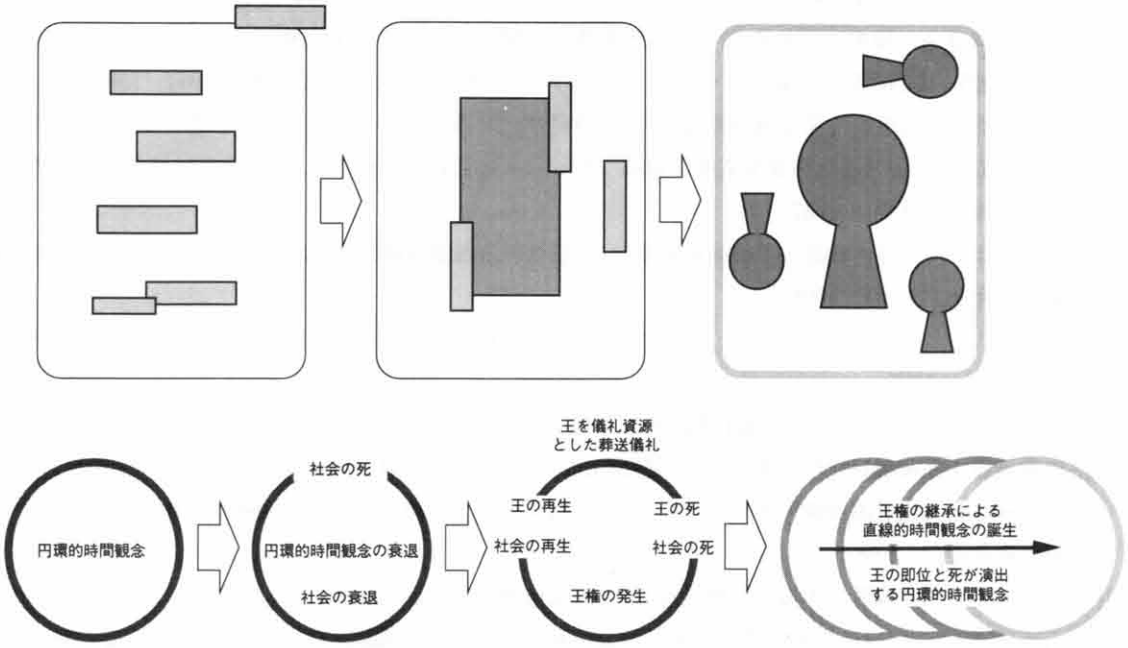
共時的埋葬配置	墳頂中心埋葬	中心重複周辺埋葬	墳頂周辺埋葬	墳丘周辺埋葬
墳頂部周辺埋葬重複形２類	10.33	2.09	3.00	3.85
墳頂部周辺埋葬重複形１類	6.50	3.00	1.82	3.83
墳頂部周辺埋葬囲繞形	5.35		2.53	1.59
並列散在形	2.75		2.00	1.33

では、墳頂部周辺埋葬重複形１・２類の葬送秩序とは、墳頂部を葬送儀礼の中心的な「場」とし、かつ中心埋葬と墳頂における２種の周辺埋葬は葬送儀礼の執行集団によって利用された一連の儀礼資源として意識されたとみられる。過去に個人の威信を示す多くの財とともに手厚く埋葬された墳頂部周辺埋葬重複形２類の中心埋葬の被葬者は、意図的にか、相対的にかなり低い財の投入しかなされない周辺埋葬の葬送儀礼の反復によって、より誇示的に顕彰され、社会の記憶として語り継がれる対象となったと解釈できよう。(注56)

10. 威信財投入による葬送儀礼の創出と時間観念の変化

以上から、入手難度によってその財の持つ物神性が示す威信の差を仮定し、葬送儀礼に投入された財の階層性が、墳墓において中心－周辺構造を持つ共時的な埋葬配置に対応していることを推測した。かつ、墳頂部周辺埋葬重複形では、墳頂部という場において、財の投入によって示される階層性が操作され、中心埋葬の被葬者を誇示的に顕彰する儀礼行為を復原した。墳頂部周辺埋葬重複２類は、その儀礼行為が肥大化し、集団内の死者の葬送の場であった丘陵頂部を、中心埋葬被葬者の葬送儀礼を行うために造成される場へと変化していく過程を示すものであったとみることができる。前稿でも述べたように、そこには死者の葬送の反復の場の喪失にみられる集合的祖霊観念の動揺と、現世には既に実在しない中心埋葬の被葬者を社会的記憶として顕彰していく神話化行為が表裏一体となっていることに気づかされる。丹後地域の弥生墳丘墓墳頂部周辺埋葬重複２類に典型的にみられた首長の死に伴う威信財の階層的投入は、地域集団内の権威的諸関係の強化を促し、中心埋葬の被葬者の社会的記憶に基づく社会規範の信念体系を増幅させる方向に導いた。墳丘墓という場における葬送儀礼を通して、地域集団の形成した内部社会と特定個人との隠喩的結合が強調されることとなったと思われる。

弥生時代後期末葉以降、後漢帝国を中心としていた外界の威信世界は、世俗化した黄老信仰の普及と黄巾の乱によって自らの世界の死を周辺東夷社会に意識させ、分裂して公孫氏を含めた複数の政権の存在を許した。倭人社会は、弥生時代終末期には不老長生の神とされた東王父・西王母を鋳出した画文帯神獣鏡など、神仙思想を象徴する財によって不老長生の追求を葬送儀礼に持ちこんだが、それは屍(被葬者)となった首長自身の不老長生を願ってではなく、社会の衰退と死を免れるための延命措置、あるいはその再生を祈念した不老長生の儀礼が行われたとみるほうが矛盾しない。つまり、神仙思想の導入は後漢末の政治動乱に東夷社会の世界秩序の崩壊を危惧した倭人社会が、各自の首長に託した一種の社会保全策であったように思える。それが葬送儀礼に集約的にみとめられるのは、地域集団における首長の死が社会の死と同等とまで捉えられ始めたからであり、その身体こそ、社会繁栄の象徴として位置付けられるに至ったからに他ならない。



第７図　共時的埋葬配置の変化と時間観念

結果として倭人社会は、過去と現在を通して神話化される王を共立し、その死を社会の通過儀礼として円環的時間に切れ目を入れ、社会の衰退を防ぎ、その再生と回復に向かわせるための壮大な王の葬送儀礼を創出した。王の身体は成長(即位)と衰退(死)を繰り返す社会の円環的時間観念を再構成させ、かつ世界秩序と社会繁栄を司る王権の系譜としての直線的時間観念を産み出したのである(第７図)。王権のもつパラドクシカルな二重性の構造は、時間観念においても見出すことができる。前方後円墳の成立とは、王の掌握する外部社会との交渉権を保証する新しい統一的威信の創出(注57)であるとともに、社会再生のための時間観念の変革でもあると想像できる。

小稿は、前半の土器の広域編年について野々口が、後半の副葬(着装)品分析と葬送儀礼における時間観念の変化については野島が執筆した。前後に分けて掲載したために論旨の一部が重複したことを御寛恕いただきたい。次稿は、岩滝町大風呂１号墓の報告や、弥生時代後期末葉前後の墳墓としては、国内最大級の規模をもつ峰山町赤坂今井墳丘墓の調査成果を待って、再度、稿をなすことにしたい。

(のじま・ひさし＝調査第２課調査第２係調査員)
(ののぐち・ようこ＝調査第２課調査第３係調査員)

注１　平良泰久・常盤井智行・黒田恭正編『丹後大山墳墓群』(丹後町教育委員会)　1983

注２　今田昇一「三坂神社墳墓群と左坂墳墓群の発掘調査の成果から」(『第２回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』京都府埋蔵文化財研究会)　1994、肥後弘幸・細川康晴「左坂墳墓群(左坂古墳群Ｇ支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1994

注３　今田昇一・肥後弘幸ほか『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』(大宮町教育委員会)　1998

注４　思考の枠組みは別として、文章表現を含めて溝口孝司氏の諸業績を参考とした。
溝口孝司「「記憶」と「時間」－その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割り－」(『九

州文化史研究所紀要』第38号　九州大学文学部九州文化史研究施設）　1993、溝口孝司「福岡県筑紫野市永岡遺跡の研究：いわゆる二列埋葬墓地の一例の社会考古学的再検討」（『古文化談叢』第34集）　1995、溝口孝司「墓前のまつり」（『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所）　1998など。

注５　岡田晃治「帯城墳墓群発掘調査概要Ⅰ」（『埋蔵文化財調査概報(1985)』京都府教育委員会）　1985、岡田晃治「３.国営農地開発事業関係遺跡　昭和61年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）　1987

注６　竹原一彦「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」（『京都府遺跡調査概報』第84冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998

注７　石崎善久「金谷古墳群(１号墓)」（『京都府遺跡調査概報』第66冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注８　森　正「内和田古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第49冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1992

注９　白数真也「与謝郡岩滝町大風呂南墳墓群出土のガラス釧」（『京都府埋蔵文化財情報』第70号、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998、白数真也『大風呂南墳墓群発掘調査概報』京都府岩滝町教育委員会　1999

注10　黒坪一樹「今井城跡・赤坂今井墳丘墓」（『京都府埋蔵文化財情報』第74号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999、黒坪一樹『赤坂今井墳丘墓・今井城跡』(京埋セ現地説明会資料No.99－09　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999

注11　森下　衛・辻健二郎『船阪・黒田工業団地予定地内遺跡群発掘調査概報』(園部町教育委員会）　1991

注12　肥後弘幸・鵜島三壽ほか『大田南古墳　大田南２・３号墳、矢田城跡発掘調査概要』(弥栄町教育委員会）1991、横島勝則・安田章「大田南５号墳ほか説明資料」（『京都考古』）　1994、横島勝則編『大田南古墳群・大田南遺跡・矢田城跡　第２次～第５次発掘調査報告書』(弥栄町教育委員会）　1999

注13　河野一隆「奈具墳墓群・奈具古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1995

注14　第６図作図にあたって、松木武彦氏の副葬品組成の分類を援用した(松木武彦「副葬品からみた古墳の成立過程」（『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室）　1999)。なお、墓壙面積の単位は平方メートルである。

注15　溝口孝司「「記憶」と「時間」－その葬送儀礼と社会構造の再生産において果たす役割り－」（『九州文化史研究所紀要』第38号　九州大学文学部九州文化史研究施設）　1993

注16　ファン・ヘネップ『通過儀礼』(秋山さと子・彌永信美訳、新思索社)1977、ピーター・メトカーフ、リチャード・ハンティントン『死の儀礼(第二版)』(池上良正・池上冨美子訳、未來社）　1996や、石川榮吉・岩田慶治・佐々木高明編『生と死の人類学』講談社　1984などを参考とし、葬送儀礼の社会的意味を考えた。

注17　福永伸哉氏は、弥生時代終末期から古墳時代は、社会のエネルギーの多くが墳墓築造を含めた首長層の葬送儀礼に費やされた特色から、葬送儀礼における儀礼管理と、政治権力の関連について考察を深めている(福永伸哉「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」（『考古学研究』第46巻第2号）　1999)。官僚的組織が、王の葬送儀礼を管理・執行する諸集団に遡源があり、国家の発展は、超自然的な諸力から社会の安全と幸福を守ろうとする諸集団の儀礼的試みの副産物に過ぎないとするＡ．Ｍ．ホカートの見解を援用して、新しい古墳時代像が創り出される可能性を重視したい。

注18　拙稿において、庄内式併行期前後の土器様相についてまとめている(高野(野々口)陽子「近畿北部地域における墳墓供献土器について」（『庄内式土器研究』Ⅻ　庄内式土器研究会)）　1998

注19　「ハ」の字状に開く脚部形態などに影響がみられるが、多条沈線の施文は中部瀬戸内系の影響か。

注20　奥村清一郎・中井英策ほか『大谷古墳』(大宮町教育委員会）　1987

注21　擬凹線文は、以下の文献で、最初に丹後の後期土器の特色として、位置づけられた(釋龍雄・林和廣・田中光弘ほか『途中が丘遺跡発掘調査報告書』(峰山町教育委員会)　1977)。

注22　擬凹線文については、後期Ⅳ期以降、回転運動を利用して施されるものが盛行する。

注23　石井清司・黒田恭正「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』2　京都府教育委員会)　1981

注24　竹原一彦「正垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注25　岩滝町教育委員会で、実見の機会を得た。また岩滝町教育委員会白数真也氏、京都府教育委員会肥後弘幸氏から、土器群についてのご教示を頂いた。

注26　岸岡貴英「野田川町西谷墳墓群」(石井清司編『京都府弥生土器集成』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1989

注27　増田孝彦「太田・下後古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第39冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1990

注28　石井清司「網野町林遺跡」(同上注26文献)

注29　供献土器では、畿内庄内系が、また集落遺跡では、山陰系複合口縁甕が顕在化する。

注30　河野一隆「白米山北古墳」(『京都府遺跡調査概報』第57冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

注31　報告では、角閃石を多く含み、生駒西麓産と推定されたが、兵庫県教育委員会渡辺昇氏から、底の特徴などから、生産地は讃岐地方の可能性があるとのご教示を得た。

注32　石崎善久「左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第60冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994

注33　赤塚次郎「東海系器台覚書」(『庄内式土器研究』Ⅷ　庄内式土器研究会)　1993

注34　下川賢一・中島陽太郎編『霧が鼻古墳群発掘調査概要』(野田川町教育委員会)　1990

注35　田代　弘「北谷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注36　加悦町教育委員会佐藤晃一氏から、出土状況についてのご教示を得た。

注37　長脚高坏の坏部裏側には、刺突痕があり、古墳時代初頭の山陰系高坏と技法的な共通性がみられる。この点については、『京都府埋蔵文化財論集　第3集』(2001年刊行予定)に、別稿を用意した。

注38　野島　永・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」(『京都府埋蔵文化財情報』第74号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999

注39　前掲注24文献

注40　石井清司「丹波・丹後地域」(『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ－』　木耳社)　1989

注41　肥後弘幸「丹後地域の弥生後期から古墳時代前期の土器編年(上)－弥生時代後期－」(『太邇波考古』第7号　両丹考古学研究会)　1995

注42　瀬戸谷浩・松井敬代『上鉢山・東山墳墓群』(豊岡市教育委員会)　1992

注43　肥後弘幸「家族墓へのアプローチ－北近畿後期弥生墳墓の場合－」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

注44　谷本　進「但馬地域」(『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』　木耳社)　1992

注45　楠正勝編『西念・南新保遺跡』Ⅳ(金沢市教育委員会)　1996

注46　栃木英道『谷内・杉谷遺跡群』(石川県立埋蔵文化財センター)　1995

注47　田島明人編『漆町遺跡』Ⅰ(石川県埋蔵文化財調査研究センター)　1992

注48　a．谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」(『北陸の考古学』　石川考古学研究会)　1983、b．吉岡康暢「北陸弥生土器の編年と画期」(『日本海域の土器・陶磁』　六興出版)　1991

注49　大村雅夫・清水真一ほか編『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ(鳥取県教育委員会)　1978

注50　谷口恭子編『岩吉遺跡』Ⅲ((財)鳥取県教育福祉振興会)　1991

注51　松井　潔「東の土器、西の土器」(『古代吉備』第19集　古代吉備研究会)　1997

注52　中川　寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」(『島根考古学会誌』第13集　島根考古学学会)　1996　なお、日本海域における土器編年対照表には、上記以外に引用した文献として、以下の文献がある。赤澤秀則編『南講武草田遺跡』(鹿島町教育委員会)　1992、花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究－島根県内の資料を中心にして－」(『島根考古学会誌』第４集　島根考古学会)　1987、赤沢徳明(「弥生土器編年－福井県－」『ＹＡＩ！弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会)　1996、南　久和「月影式土器小考　その２」『金沢市額新町遺跡』(金沢市教育委員会)　1995、古川　登『小羽山』(清水町教育委員会)　1997

注53　岡村秀典「漢帝国の世界戦略と武器輸出」(福井勝義・春成秀爾編『戦いの進化と国家の生成』人類にとっての戦いとは１　東洋書林)　1999

注54　邦文では、メアリ・ダグラス「民族誌における分離された経済諸領域」(『儀礼としての消費』浅田彰・佐和隆光訳、新曜社)　1984　に詳しい。

注55　クラスター分析については、パソコンソフト「EXCEL多変量解析ver.4.0」((株)エスミ)を使用した。なお、今回の資料操作には、土器棺や墓壙規模が不明なものについては除外した。

注56　もちろん中心埋葬被葬者と墳頂部周辺埋葬被葬者との間には、現世における社会的従属関係が存在した可能性もあるが、かならずしも現世の階層差が墓制に表現されるとは限らない。葬送を行う儀礼集団の理想化された社会関係が表象されるものと見られる。

注57　野島は、鉄素材や鉄器の出土量からその交易形態を推測し、弥生後期後半から終末期には、列島各地で独自の再分配を伴う拠点的交易が行われつつあり、初期畿内倭王権の権力基盤は、長距離交易の統合による、倭の外界(威信世界)との交易権を保証する威信表示の場と、その文物の流通管理にあると指摘した(考古学研究会関西例会100回記念シンポジウム「国家形成過程の諸変革」大阪　1999)。

なお、京都府教育委員会文化財保護課肥後弘幸氏から前稿「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」第３図(p21)３、「丘陵周辺埋葬」とした左坂Ｇ支群西側丘陵20号墓は、表土直下から土師器が出土していることから古墳時代に下る可能性があることを御教示いただいた。感謝したい。ただし、丘陵の裾部周辺に埋葬を設置する21号墓や23号墓などの例が同墳墓群にもみられることから、筆者の趣旨に変更はない。また、溝口孝司氏をはじめとした近年のポスト・プロセス考古学における研究成果等を、京都大学大学院下垣仁志氏から御教示いただいた。文献提供もあわせて感謝したい。前稿ともに葬送儀礼についての瑣末な文章は、前掲した溝口孝司氏・福永伸哉氏の業績を発想起点としていることを明記しておきたい。

また、各墳墓の概要のうち、福井県清水町小羽山30号墓については、古川登氏から、岩滝町大風呂南１号墓については白数真也氏から、大宮町左坂26号墓については今田昇一氏から、ご教示をいただき、第２表への掲載をご快諾いただいたことを、記して感謝したい。

平成11年度京都府埋蔵文化財の調査

奥村清一郎

平成12年２月４日付けの朝刊各紙は、長岡京跡左京域で検出された大規模な掘立柱建物跡群を中心とする発掘成果について、大きく取り上げていた。その後の報道で、「東院」と墨書された土器片が複数出土したことが明らかとなり、当初、桓武天皇の離宮跡の一つとされていた遺跡の評価が、さらに限定され、東院の跡とほぼ判明した。この調査が、平成11年度における京都府内最大の発掘成果と評価される。この他にも京都府内の各地において数多くの調査成果が得られたが、平成11年度は全体に目立った発掘成果の少ない一年であったといえる。以下、平成11年度に京都府内において実施された発掘調査成果について、当調査研究センター実施分を中心として概観してみる。なお、当調査研究センターが実施した発掘調査の結果については、第１表にまとめた。

１．旧石器・縄文時代

大堰川上流部の河岸段丘上に位置する、京北町東山遺跡では、赤褐色チャート製の剥片石器、掻器、削器等の石器が、古墳時代以降に形成された堆積層の中から採取された。これらの石器は後世の包含層・表土層から検出されているものの、石材がチャートであることや、土器を伴わないことなどから、旧石器時代までさかのぼる資料である可能性が高く、平成12年度実施予定の本調査に大きな期待が寄せられている。

縄文時代の調査成果としては、大宮町五十河遺跡、久御山町佐山尼垣外遺跡、京田辺市三山木遺跡等で、縄文土器・石器等の資料が得られている。佐山尼垣外遺跡では、自然流路の肩部および斜面部から縄文晩期に属する深鉢の良好な一括土器群が検出された。三山木遺跡からも突帯文を有する深鉢の断片が出土している。

２．弥生時代

弥生時代前期に属する調査例として、京田辺市三山木遺跡がある。区画整理事業に伴って設定されたいくつかのトレンチの一つから、土器・石器がまとまって出土した。包含層出土の資料で、南山城地域では数少ない弥生前期の一括資料となった。所属年代は、前期末葉とみられている。

久御山町市田斉当坊遺跡は、近年になって旧巨椋池南岸の沖積平野部で新規に発見された、弥生中期の拠点集落遺跡である。今年度は、遺跡の南端部付近で調査が実施され、環濠、円形竪穴式住居跡、隅丸方形竪穴式住居跡、井戸、土坑などの集落関係の遺構のほか、方形周溝墓17基が検出された。井戸については、縦板横桟組の方形井戸２基が検出され、この種の構造の井戸とし

第１表　平成11年度発掘調査一覧（当調査研究センター実施分）

番号	遺　跡　名	種別	所在地	担当者	調査期間	概　　要
1	吉沢城跡	城跡	弥栄町	石尾政信	５～９月	平坦面、土坑、柱穴。天目茶碗、瓦質鉢出土。
2	墓ノ谷古墳群	古墳	弥栄町	石崎善久	５月	古墳状隆起２基。遺構・遺物なし。
3	今井城跡・赤坂今井墳丘墓	城跡・墳丘墓	峰山町	黒坪一樹	５～９月	中世の山城。下層に弥生時代の大規模な墳丘墓。
4	五十河遺跡	集落跡	大宮町	引原茂治	５～８月	中世の溝。平安時代～鎌倉時代ピット。
5	福知山城跡	城跡	福知山市	福島孝行	７～10月	近世の庭園に伴う石敷。
6	南稲葉遺跡	集落跡	綾部市	黒坪一樹	10～３月	溝、竪穴式住居跡。
7	狭間墳墓群	墳墓	園部町	引原茂治 福島孝行	10～３月	弥生時代の墳墓13基。弥生土器・ガラス小玉・鉇。（旧瓜生野古墳群）
8	平山古墳状隆起	古墳	園部町	引原茂治	９月	顕著な遺構・遺物なし。
9	カチ山北古墳群	古墳	園部町	引原茂治 福島孝行	11～１月	方墳２基、木棺直葬。鉄刀、鉄斧、土師器。古墳中期。
10	平山古墳	古墳	園部町	引原茂治 福島孝行	11～３月	円墳、木棺直葬。四獣鏡、勾玉、鉄斧、鉇。古墳中期。
11	今林６号・７号・８号墳	古墳	園部町	引原茂治 福島孝行	１～２月	古墳３基。円筒埴輪。
12	平安京右京一条三坊	都城跡	京都市	村田和弘	４～８月	門跡。溝。掘立柱建物跡。井戸。 鷹司小路推定地。平安時代前期。
13	東山遺跡	集落跡	京北町	中川和哉	７～９月	古墳時代の竪穴式住居跡。旧石器。
14	新田遺跡	集落跡	京田辺市	竹井治雄	11～２月	竪穴式住居跡群。奈良時代の溝。掘立柱建物跡。
15	新田遺跡	集落跡	京田辺市	岡崎研一	11～１月	顕著な遺構・遺物なし。
16	太田遺跡	集落跡	亀岡市	増田孝彦 竹井治雄	５～１月	弥生時代～中世。竪穴式住居跡。掘立柱建物跡。古墳２基。
17	杉北遺跡	集落跡	亀岡市	中川和哉	12～１月	顕著な遺構・遺物なし。
18	平等院旧境内	寺院跡	宇治市	田代　弘	12～２月	ピット。瓦溜まり。
19	三山木遺跡	集落跡	京田辺市	岡崎研一 田代　弘	５～10月	弥生時代前期の土器。 奈良・平安時代の掘立柱建物跡。
20	木津城山遺跡	集落跡	木津町	戸原和人	５～２月	弥生時代の高地性集落跡。
21	内田山遺跡・内田山古墳	集落跡 古墳	木津町	戸原和人 筒井崇史	９～２月	古墳１基。円筒棺２基。 弥生土器。
22	女谷横穴	横穴	八幡市	柴　暁彦 筒井崇史	２月	横穴10基。
23	荒坂横穴	横穴	京田辺市	柴　暁彦	１～２月	顕著な遺構・遺物なし。
24	荒坂遺跡	集落跡	八幡市	柴　暁彦	１～２月	顕著な遺構・遺物なし。
25	市田斉当坊遺跡	集落跡	久御山町	竹原一彦 岩松　保 森島康雄 中村周平 野々口陽子	５～２月	弥生時代中期の竪穴式住居跡。方形周溝墓、環濠、井戸。 弥生時代～古墳時代の竪穴式住居跡。 平安～中世の条里地割に伴う地境溝。 中世の島畑。
26	佐山尼垣外遺跡	集落跡	久御山町	竹原一彦 中村周平 柴　暁彦	６～２月	縄文時代晩期の土器。 弥生時代中期の方形周溝墓。 弥生末～古墳初頭の竪穴式住居、溝。 中世耕作溝。鹿の線刻土器。

27	佐山遺跡	集落跡	久御山町	竹原一彦 森島康雄 野々口陽子	9～1月	古墳時代前期の竪穴式住居跡。 平安～中世の地境溝。
28	稲葉遺跡	集落跡	京田辺市	森島康雄	7～8月	古墳時代～中世の遺物包含層。
29	河原遺跡	集落跡	城陽市	森島康雄	12～2月	顕著な遺構・遺物なし。
30	長岡京右京第635次	都城跡	長岡京市	松尾史子	5～7月	古墳時代前期の竪穴式住居跡2基。 平安時代の掘立柱建物跡。
31	下植野南遺跡	集落跡	大山崎町	松井忠春 石井清司 藤井　整 松尾史子	4～1月	弥生時代中期の方形周溝墓群。 古墳時代の竪穴式住居跡。奈良時代溝。
32	算用田遺跡	集落跡	大山崎町	伊賀高弘	7～8月	顕著な遺構・遺物なし。
33	森垣外遺跡	集落跡	精華町	小池　寛 伊賀高弘	5～1月	古墳時代の掘立柱建物跡。竪穴式住居跡。奈良時代の道状遺構。
34	春日神社遺跡	集落跡	精華町	伊賀高弘 松尾史子	11～12月	顕著な遺構・遺物なし。
35	柿添遺跡	集落跡	精華町	伊賀高弘 松尾史子	1～2月	古墳時代の溝。
36	大畠遺跡	集落跡	木津町	村田和弘	1～3月	弥生時代溝。古墳時代掘立柱柵、土坑。

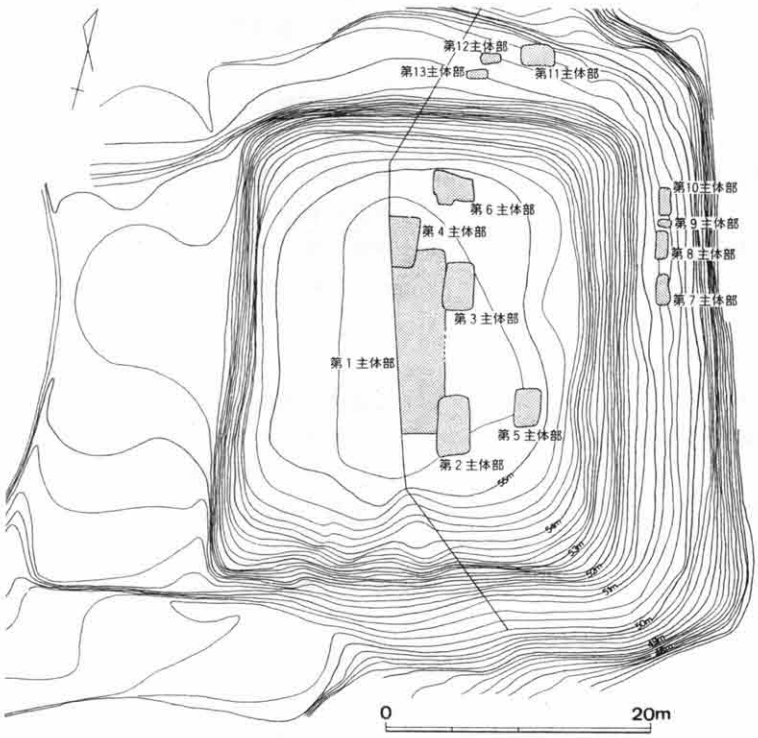
ては、わが国でも最古の一群に属する資料として注目を集めた。方形周溝墓は、一辺が9m前後を測る大規模なものと、一辺5m前後の規模の小規模なものの2群に大別されることが判明した。年代は中期前葉。

久御山町佐山尼垣外遺跡は、木津川右岸の沖積地で近年新たに発見された遺跡である。弥生中期後葉に属する環濠、竪穴式住居跡群、方形周溝墓10基などが検出された。珍しい資料として、方形周溝墓の周溝内から出土した土器の中に、鹿の絵を線刻した絵画土器が一点含まれていた。

大山崎町下植野南遺跡では、遺跡南西部において調査が実施され、弥生中期前葉の方形周溝墓9基が検出された。近辺での調査例と合わせると、総数40基を超える大規模な墓域を形成していることが判明した。ただし、当該期の集落跡については現在のところ未確認で、今後の調査研究課題である。

峰山町赤坂今井墳丘墓は、丹後半島中央部の丘陵端部に営まれた大規模な方形台状墓である。地山削り出し工法と盛り土工法を併用して一辺40m弱、高さ3m強の墳丘を構築している。墳丘中央に設けられた中心主体の掘形の長辺の長さは約14mを測る。この中心主体を含めて墳頂部に6基、墳裾部外周に7基の計13基の主体部が確認されている。主体部の構造は、箱形木棺および舟形木棺を直葬するもので、土器・鉄器を伴うことが判明している。弥生後期末葉の築造になるもので、当地域に散見する首長墓の一例として、マスコミにも大きく取り上げられ、全国的な注目を集めた。

園部町狭間墳墓群は、丘陵の稜上に並ぶ方形台状墓群で、工業団地の造成計画に伴って13基の全面発掘が行われた。墳丘の規模は大きいもので一辺15m、小さいもので一辺9m前後を測る。組合式箱形木棺、土器棺を埋葬主体とし、土器・鉄器を伴う。築造年代は、弥生後期後葉に属す



第１図　赤坂今井墳丘墓平面図（『京都府遺跡調査概報』第92冊第２図を改変）

る。南丹波地域における方形台状墓群の数少ない調査例と評価される。

木津町木津城山遺跡は、これまでの調査で弥生後期前葉に中心をおく南山城地域最大規模の高地性集落遺跡であることが判明している。今年度は、木津城跡の主郭を挟んだ北方の尾根上において試掘調査が実施され、溝、竪穴式住居跡、切通し遺構等が検出された。

亀岡市太田遺跡では、ほ場整備事業に伴い面的調査が実施され、弥生後期後葉に属する方形竪穴式住居跡３基が検出されている。

３．古墳時代

前期古墳の調査例として、園部町平山古墳がある。園部垣内古墳を南方眼下に見下ろす丘陵の頂部に営まれた長径17m・短径14mの円墳で、主体部は割竹形木棺を直葬する。棺の内外から四獣鏡・勾玉・鉄器・土師器二重口縁壺などが出土した。瑪瑙製勾玉を含むことから、園部垣内古墳とほぼ併行する4世紀後半代の築造と見られる。

中期古墳については、木津町内田山Ｂ１号墳、山城町上狛天竺堂１号墳、園部町カチ山北古墳群、亀岡市太田古墳群などの調査があった。内田山Ｂ１号墳は、試掘が実施された結果、従来円墳とされてきた墳形が、一辺15～18mの方墳となることが判明した。主体部は２基の埴輪円筒棺で、埴輪の特徴から中期前半に属するものであることが明らかとなった。天竺堂１号墳は、埴輪を伴う全長約27mの前方後円墳である。右片袖式横穴式石室の中から古式の須恵器・鏡・玉などが出土した。５世紀後半代の築造と推定されている。カチ山北古墳群は、平山古墳の後を受けて同一丘陵上に成立した小規模な方墳２基からなる古墳群で、木棺直葬の主体部から直刀、鉄斧、土師器等が出土した。５世紀後半代の築造と見られる。太田古墳群は、複合集落遺跡の太田遺跡の調査に伴って新規に発見された古墳群である。１号墳が円墳、２号墳が方墳で、墳丘はすでに削平され、周濠のみが残存していたものである。

後期古墳の調査の中では、長岡京市今里大塚古墳と城陽市黒土１号墳の調査で特に注目すべき成果が得られた。今里大塚古墳は、乙訓地域最大規模の両袖式横穴式石室を内部主体とする古墳

で、墳形については従来円墳とされてきたが、前方後円墳と見る見解もある。今年度調査においても、墳丘部にトレンチが設定されたが墳形を決定するに足る根拠は得られなかった。横穴式石室の羨道部の調査が実施され、ＴＫ217型式の須恵器が採取されたことにより、７世紀初頭頃の首長墓であることが判明した。黒土１号墳では横穴式石室の玄室部の一部が調査され、南山城地域でも最大級の規模を誇る横穴式石室の全容が解明された。なお、沖積地に営まれた後期古墳の調査例として、久御山町市田斉当坊遺跡で確認された一辺20～22mの規模の方墳がある。周濠内から出土した須恵器(ＴＫ10型式)により、６世紀中葉頃の築造であることが判明した。このような事例は今後さらに増加するものと推察される。

集落遺跡の調査成果として、大宮町五十河遺跡、京北町東山遺跡、亀岡市太田遺跡、長岡京市開田城ノ内遺跡、大山崎町下植野南遺跡、精華町柿添遺跡・同森垣外遺跡などで集落に伴う溝、竪穴式住居跡、土坑等の遺構とそれらに伴う遺物が検出された。このうち、開田城ノ内遺跡で検出された前期の竪穴式住居跡にはベッド状遺構を設けているのが特筆される。

４．歴史時代

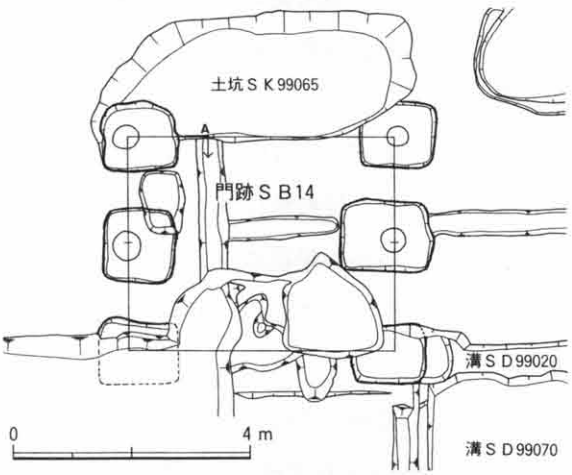
都城跡、集落跡、城跡等の調査が実施され、多大な成果が得られた。

京都府教育委員会が継続的に調査を行っている加茂町恭仁宮跡では、内裏地区において調査区が設定され、桁行５間、梁行４間の東西棟の建物遺構が検出された。この建物は、基壇と礎石を伴う瓦葺の建物で、塔跡基壇の北方に位置することなどから、山城国分寺関係の遺構と見られている。

長岡京左京北一条三坊二町・三町跡で実施された、長岡京左京435・436次調査では、東西３町南北２町計６町の広大な敷地を占有する、大規模な離宮遺構が検出された。掘立柱建物跡と礎石建物からなる建物跡計13棟のほか、遣り水遺構・溝・井戸等が検出された。建物跡の残り具合は極めて良好で、掘立柱の掘形は深さ１m以上残存し、足場穴を伴う。正殿建物は、７間×２間の身舎の四方に廂を設けた東西27m・南北16.2mの壮大な建物で、足場穴の配置等から掘立柱と礎石を併用した構造の建物であったと想定されている。「東院」と墨書された土器片が複数出土したことにより、この離宮遺構は文献記録に記された東院の跡である可能性が高くなった。

京都市平安京右京一条三坊九・十町跡では、現在府指定史跡となっている貴族邸跡の南面中央の位置から、桁行１間、梁行２間の掘立柱建物跡が検出され、貴族邸に伴う四脚門であることが判明した。

奈良・平安時代に属する集落遺跡の調査例としては、京田辺市新田遺跡、亀岡市太田遺跡などで、まとまった成果が得られた。新田遺跡では７・８世紀に属する竪穴式住居跡15基・掘立柱建物跡４棟・溝・土坑などの遺構に伴って、多量の遺物が出土した。竪穴式住居跡はおおむね７世紀に、掘立柱建物跡はそれよりやや年代が下る８世紀にそれぞれ属するものと見られている。太田遺跡では、奈良・平安期に属する掘立柱建物跡８棟・溝・井戸などの遺構が広大な範囲にわたって検出された。いずれも、当該期の一般集落の実態を解明する上で貴重なデータとなろう。断



第２図　平安京右京一条三坊九町の南面中央に建てられた四脚門跡（『京都府遺跡調査概報』第92冊第37図を改変）

片的な資料としては、綾部市南稲葉遺跡で検出された７世紀の竪穴式住居跡２基、大宮町五十河遺跡で検出された平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡の柱穴と見られるピット群などがある。

これらの集落関係の遺構に付随して、溝・畦畔・道路等からなる条里関係の遺構も確認されている。新田遺跡では、平安時代の綴喜郡条里に関係する南北方向の溝が確認されている。市田斉当坊遺跡では、平安時代から室町時代にかけての時期に属する東西・南北方向の側溝を伴う道路状遺構が検出された。

中・近世城郭に関しては、弥栄町吉沢城跡と福知山市福知山城跡等で調査が行われた。吉沢城跡は、中世末期に一色氏によって築かれた山城である。主郭の外周部の丘陵上で調査が行われ、テラス状遺構、犬走り状遺構、土坑、柱穴等の遺構に伴って、土師器、陶磁器、銭貨、石製品等の16世紀に属する遺物が見出された。福知山城跡では、板石を敷き並べた通路状遺構が検出され、絵図面に記された「御泉水」に関係する庭園遺構と推定された。上層に堆積していた土層から出土した遺物により、18世紀頃の年代が想定されている。

（おくむら・せいいちろう＝調査第２課課長補佐兼調査第４係長）

写真　南から見た赤坂今井墳丘墓（平成12年４月１日撮影）

平成11年度発掘調査略報

51. 狭間(はざま)墳墓群・平山(ひらやま)古墳・カチ山北(やまきた)古墳群

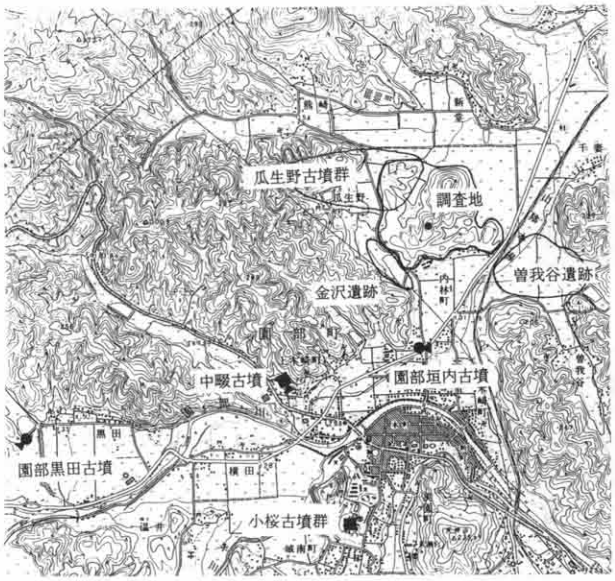
所 在 地　京都府船井郡園部町瓜生野ほか

調査期間　平成11年９月13日～平成12年３月３日

調査面積　3,300m²

はじめに　この調査は京都府が計画している京都新光悦村の建設に先立ち、京都府企業局の依頼を受けて発掘調査を実施した。今年度は事業予定地の内、西半分にあたる狭間墳墓群(旧称瓜生野古墳群)と山城跡、平山古墳状隆起の調査を実施した。この内、山城跡と見られていた平坦地は試掘調査の結果古墳群であることが判明したため、平山古墳、カチ山北古墳群と新たに名称を付した。瓜生野古墳群は、調査の結果古墳ではなく弥生時代の墳墓であることが判明したため、小字名を採って狭間墳墓群と改称した。

調査の概要　狭間墳墓群は通称平山と呼ばれる独立丘陵の西側に派生する尾根上にほぼ南北に13基が連接して築造された墳墓群である。この内、調査範囲内の12基を調査した。墳丘は墳丘下半を削り出しにより平面方形に整形し、上半にその残土を盛土として盛り上げて１～1.5mの高さに造り出している。外表施設としては４号墓の裾部に人頭大の角礫により、貼石を意識した化粧石が巡らされている。主体部は攪乱と削平により不明な１・13号墓、調査区外の９・10号墓、主軸を南北に採る11号墓を除くと東西方向に墓壙を穿っており、５号墓第１主体部を除いて木棺を直葬している。５号墓第１主体部は長軸4.2m以上、短軸2.5mの長方形土壙を穿ち、その内部に長さ2.6m・幅１mの範囲で板材などで囲いを設けて裏込めを施し、更にその内部に幅42cm・長さ175cmの木棺を据えて裏込めを施すという特殊な主体部の構造を持っている。供献土器はこの木棺の裏込め上、および棺上から棺内に落ち込んだ状況で、また囲いの裏込め上および囲い内部の落込み土下面で検出した。土器の形態から弥生時代後期後葉に位置づけられる。副葬品は２号墓第１主体部で鉄製鉋が１点、５号墓第２主体部で



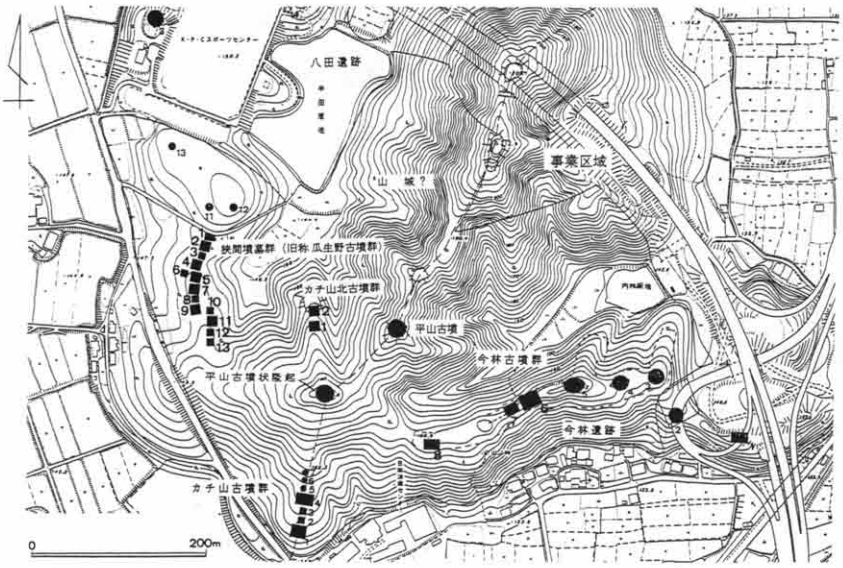
第１図　調査地位置図(1/50,000)

鉄製利器片・刀子状鉄製品が各１点、12号墓第１主体部でガラス小玉300点以上が出土した。６号墓および12号墓第１主体部では赤色顔料が認められた。供献土器は４号墓第２主体部、５号墓第２主体部、７号墓第２主体部、８号墓第２主体部、11号墓主体部、12号墓第１・２主体部などでも検出されており、おおむね弥生時代後期後葉から庄内期の時期と考えられる。

平山古墳は平山丘陵の最高所からやや南へ下った地点の尾根が西へ屈曲する地点に営まれており、墳丘は岩盤を削り出して整形する。主体部は長軸6.9m・短軸2.4mの２段墓壙を墳丘中心にほぼ東西方向に穿ち、割竹形木棺を納めた痕跡が見られる。副葬品は四獣鏡１面、袋状鉄斧１点、鉇１点、鉄製利器(刀子か)１点、鉄製針１点、勾玉１点が出土した。いずれも棺外のテラス状に置かれており、鉄斧と鉇１点を棺の南側に、その他を棺の北側にまとめて配置していた。墓壙上からは二重口縁壺の口縁部片が１点、墳丘裾から墓壙上の土器と同一個体と思われる土器片３点が出土し、築造時期は古墳時代前期と考えられる。

カチ山北古墳群は平山古墳から谷を一つ隔てた西側の北方へ伸びる尾根上に立地する。１号墳は地山削り出しと盛土によって墳丘を隅丸長方形に整形しており、北側から見ると高さのある墳丘であるかのように見える。墳丘規模は長軸11.4m・短軸9.1mである。主体部は東西方向に１基穿っており、箱形木棺を納めている。主体部からは鉄刀が１振り出土した。墳丘南側の溝から墳丘斜面にかけて、原位置を保った土師器群が出土し、古墳時代中期後半に築造された古墳であると考えられる。２号墳は岩盤を削り出して整形された一辺９mの方墳である。主体部は南北方向に１基穿たれており、箱形木棺を納めている。棺内から鉄刀１振りと、有肩鉄斧１点が出土し、古墳時代中期前半に築造された古墳であると考えられる。

まとめ　南丹波の弥生時代後期における墳丘を持つ墳墓が検出されたのはこれが初めてである。また副葬品としてガラス小玉が300点以上出土したことは特筆に値する。これらから当墳墓群の被葬者達は集落において、また南丹波地域において有力な人々であったと考えられる。さらに既往の調査によると、この丘陵の東端の今林遺跡では弥生後期後半の高地性集落が営まれていることが判明している。この墳墓群はこの集落に住んでいた人々の墓地である可能性が高い。また、狭間墳墓群→今林１号墳→平山古墳→園部垣内古墳という首長系譜が追えることも興味深い。この丘陵は今年度も調査が継続するため、その成果が期待される。



第２図　平山丘陵内遺跡配置図

（福島孝行）

52. 平等院旧境内・宇治市街遺跡

所 在 地　宇治市塔ノ川

調査期間　平成11年12月10日～平成12年2月28日

調査面積　約200㎡

はじめに　平等院旧境内遺跡・宇治市街遺跡は、古代からの遺構・遺物が複合する遺跡として周知されている。今回、当該遺跡地内で府道大久保宇治川線緊急街路整備工事が計画されたため、発掘調査を実施した。

調査概要　調査対象地は、平等院境内の東側を走る府道沿線に位置している。府道の拡幅工事が予定されている場所、４か所（Ａ～Ｄ地区）を発掘調査した。Ａ地区では塔ノ川旧流路に沿う旧地形を、Ｂ地区では縄文時代から古墳時代の包含層および土坑・ピットなどの遺構を検出した。Ｃ地区では、Ｂ地区と一連の遺構・包含層、平等院に関連する遺物を含む土坑などを検出した。Ｄ地区は攪乱をうけており、遺構・遺物を検出することはできなかった。

今回の調査の中で最も重要な成果はＣ地区検出土坑である。Ｃ地区は鳳凰堂の南方約100ｍに位置する調査地区で、南東約50ｍの地点に経蔵跡が推定されている。検出遺構中で最も重要な遺構は、瓦集積土坑（ＳＫ04）である。この土坑は、径が約２ｍ・深さ約１ｍの円形で、破損した多量の瓦が含まれていた。底部に炭・灰がみられ、瓦葺き建物が火災にあったか、あるい修理・補修された際に不要になった瓦を廃棄・処理した土坑と考えられる。瓦は、平等院鳳凰堂に用いられているのと同じ河内系を主体とするが、これまで未確認の型式の軒丸瓦も含まれている。この土坑は平安時代末期から鎌倉時代初期頃に形成されたとみられ、この時期に平等院に関連する瓦葺き建物が付近に存在したことを示す遺構として重要である。

調査地位置図（1/25,000）

まとめ　今回の調査では、下層で塔ノ川遺跡に関わる遺構・遺物を、上層で平等院に関わる遺構をそれぞれ検出した。瓦集積土坑（ＳＫ04）は、平等院旧境内南部地域で未確認の瓦葺き建物の存在を示しており重要な発見である。経蔵跡が近接地に推定されおり、これとの関連が有力である。平等院旧境内における建物配置を検討していく上で貴重な資料といえる。

（田代　弘）

53. 市田斉当坊遺跡第３次Ｄ地区

所 在 地　京都府久世郡久御山町市田新珠城地内

調査期間　平成11年12月８日～平成12年３月３日

調査面積　約1,700㎡

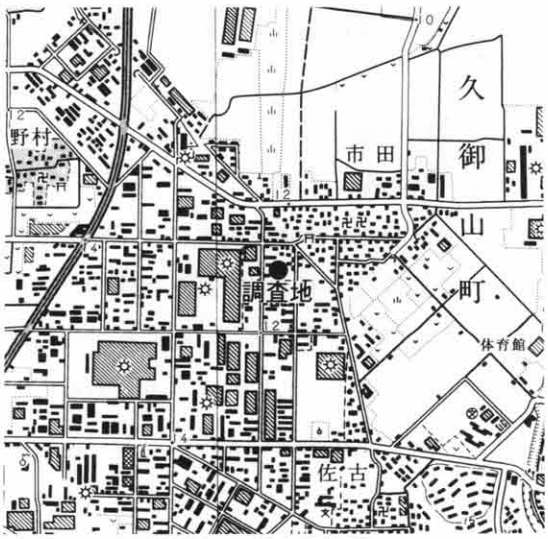
はじめに　市田斉当坊遺跡は旧巨椋池の南畔に位置しており、平成10年度から発掘調査を実施している。これまでの調査では、条里型地割にのる平安時代末頃以降の道路跡と弥生時代中期の方形周溝墓や環濠・竪穴式住居跡、中期前葉に遡る井戸などを検出している。

平成11年度の発掘調査は２か所で調査を実施し、今回報告するのはＤ地区の調査である。市田斉当坊遺跡の発掘調査は、建設省と日本道路公団が計画する国道１号京都南道路および第二京阪道路建設に伴う事前調査で、建設省の依頼を受けて実施した。

調査の概要　大きく分けて、中世段階と弥生時代中期の遺構を検出した。中世段階の遺構には、南北・東西溝、北で東に約５°振れる小溝群、土坑を検出した。南北・東西溝は、現地表に残る条里型地割にほぼ一致する。弥生時代の遺構には、方形周溝墓14基以上・同主体部５基・溝中埋葬11基・竪穴式住居跡４基・環濠状大溝・井戸などを検出した。

方形周溝墓は、大きいものは東西幅12.5ｍを測る方形周溝墓ＳＴ33から、小さいものでは一辺2.5ｍの方形周溝墓ＳＴ24までさまざまである。土坑ＳＫ22・43・45などは、方形周溝墓の主体部と判断される。溝中埋葬は、方形周溝墓ＳＴ17の西辺溝内で土層観察により、３基の土坑が重複して構築されているのを確認したが、他はすべて周溝底面で確認した土坑状窪みである。

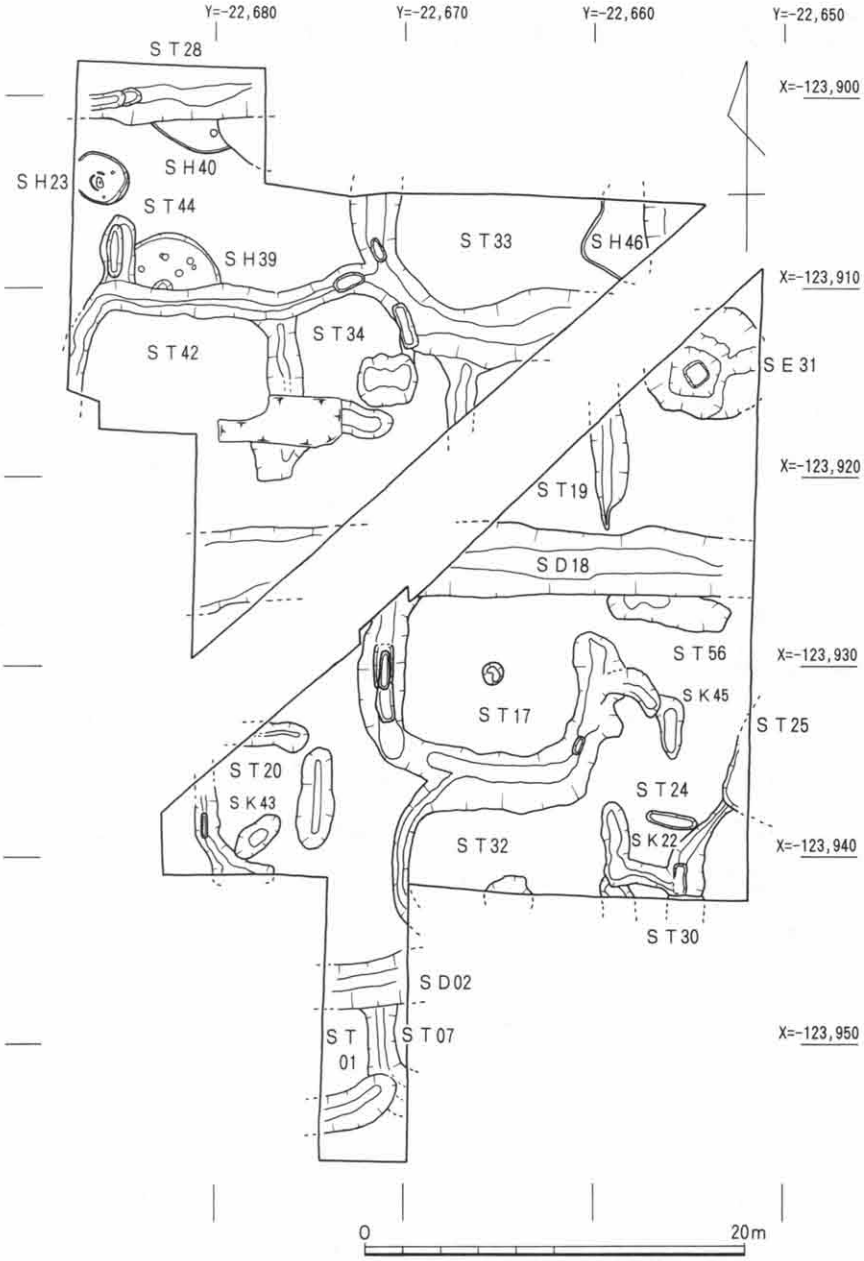
竪穴式住居跡は、調査地の北半でのみ４基検出している。このうち、竪穴式住居跡ＳＨ23は、３ｍ×2.5ｍの隅円方形状の楕円形を呈した小形の住居跡であるが、内部からは、弥生土器片の他、石針・碧玉未製品・玉砥石などの玉作り関連の遺物が多く出土した。



第１図　調査地位置図

方形周溝墓は、時期の確認できたものは弥生時代中期前葉のもので、竪穴式住居跡内から出土する土器とほぼ同じ時期であるが、方形周溝墓と竪穴式住居跡とが重複するものはすべて、方形周溝墓が上位に作られており、方形周溝墓に竪穴式住居跡が先行する。

環濠状溝ＳＤ18は、調査地のほぼ中央で、東西



第２図　Ｄ地区遺構配置図

方向に検出した溝で、幅が最大で約４ｍ、確認できる深さは最大で約1.7m、断面形は「Ｖ」字形を呈している。市田斉当坊遺跡では、Ｃ地区で５ないし６条の環濠状の溝を検出しているが、この溝が最も規模の大きいものである。埋土中からの土器の出土は少なく、Ｃ地区の環溝状大溝の様相から推測すると、中期後葉の溝と推測される。

井戸ＳＥ31は、4.5ｍ×5.7m以上の方形で、深さ約１ｍのすり鉢状を呈した穴の底面に、２ｍ×2.3m、深さ1.2mの隅円方形の坑を穿ち、その内側に縦板を並べて井戸枠を構築している。井戸枠は、内法が70cm×85cmの方形で、最も残りのよい縦板は、高さ約60cmを測る。板材は明瞭に残っていないが、縦板の内側には横桟を組んで、井戸枠を崩壊から防いでいたと推定される。井戸枠内部からは、中期前葉～中葉の土器が出土した。

まとめ　今回の調査は、今までの調査結果から判断すると、市田斉当坊遺跡の南端付近に位置している。Ｄ地区では、中期初頭に竪穴式住居跡(および井戸)の居住域から方形周溝墓を中心とした墓域へと土地利用形態が変わり、その後、方形周溝墓の周溝を繋げるようにして大溝を掘削している。また、弥生時代中期の板材を組んで構築した井戸は国内でも最古級のもので、当遺跡ではＣ２トレンチに次いで２例目の検出である。

（岩松　保）

54. 大畠（おおはた）遺跡第４次

所 在 地　京都府相楽郡木津町相楽岸間堂

調査期間　平成12年１月24日～平成12年３月７日

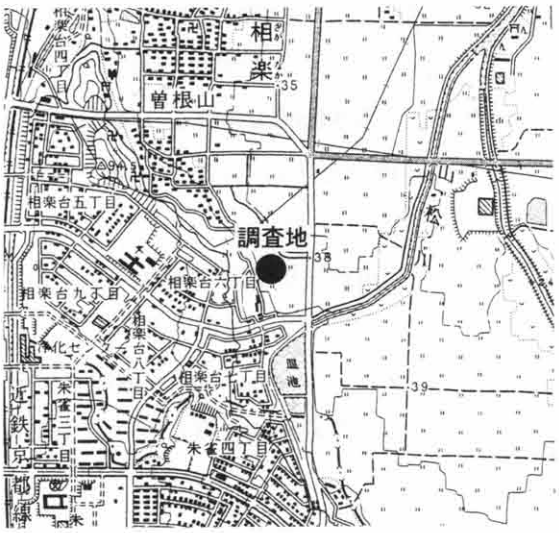
調査面積　約200㎡

はじめに　調査は、建設省・日本道路公団が計画している国道24号京奈道路の建設に先立ち、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて実施した。今回の調査地は、京奈道路北側の側道予定地内で、平成10年度（第３次調査）の調査地の北側に隣接している。そのため、昨年度の調査で検出した弥生時代中期から古墳時代後期に属する遺物や柱穴・土坑・溝などの遺構の北延長や掘立柱建物跡などの検出が予想された。

今回の調査は、側道建設予定地内に長さ約80m・幅約2.4mの調査トレンチを設定し実施した。その結果、遺構面を２面検出した。上層の遺構面で、古墳時代初頭と古墳時代中期～後期の柱穴や土坑・溝などの遺構を多数検出した。また、トレンチ東側では、下層遺構面で弥生時代中期～後期の柱穴や溝などの遺構を、また、今回新たに弥生時代前期の遺構を確認した。

検出遺構　上層遺構では、小規模な土坑や柱穴などを検出した。主要な遺構として、調査地の東半分で検出した柱穴５基が東西方向に並ぶ柵を検出した。この柵は、昨年度の調査で検出した建物などと方位を同じくするものであった。その他には、南北方向に長い長方形の土坑を検出した。調査トレンチの東部で検出した下層遺構では、布留式土器が出土した南北溝や弥生土器や敲石が出土した南北溝や土坑を検出した。

また、トレンチ中央部において南北方向の自然流路を検出した。この流路は、昨年度の調査で検出された流路の北側延長部分となる。深さは遺構検出面から約1.5mあり、底からは流木や種子が多く出土した。土器などの遺物は出土しなかった。



調査地位置図

まとめ　今回の調査地が昨年度の調査地の北側に隣接しているため、昨年度の遺構の北側延長を検出した。自然流路や掘立柱建物跡と方位を同じくする柵などを検出した。時期は、上層で古墳時代中期から後期にかけての遺構、下層で弥生時代・古墳時代前期の遺構を確認した。また、昨年度の調査では検出されなかった新たな遺構も検出した。そして、昨年の調査では出土していなかった弥生時代前期の遺構と遺物が新たに出土した。

（村田和弘）

長岡京跡調査だより・73

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成12年２月23日・３月22日・４月26日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内３件、左京域10件、右京域13件であった。京外の２件を併せると28件となる(調査地一覧参照)。

調査地一覧表(2000年４月現在)

番号	調査次数	地区名	調　査　地	調査機関	調査期間
1	宮内第384次	7ANEHJ-6	向日市鶏冠井町祓所36-1他	(財)向日市埋文	1/5～2/29
2	宮内第385次	7ANCMM-3	向日市南山56-2	(財)向日市埋文	1/25～2/2
3	宮内第386次	7ANBNI-5	向日市寺戸町西垣内8	(財)向日市埋文	2/15～3/6
4	左京第433次	7ANFSK-4	向日市上植野町尻引1-3	(財)向日市埋文	8/3～00.2/2
5	左京第434次	7ANVHR-3	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文	9/16～00.12/27
6	左京第435次	7ANDII-7	向日市森本町戌亥11他	(財)向日市埋文	9/16～00.3/31
7	左京第436次	7ANDII-7	京都市南区久世殿城町338	(財)古代學協會 古代學研究所	9/27～00.3/31
8	左京第440次	7ANEKZ-5	向日市森本町高田28-1・3 29-3	(財)向日市埋文	12/13～00.1/28
9	左京第441次	7ANFMZ-5	向日市上植野町南小路65-2	(財)向日市埋文	3/3～3/8
10	左京第443次	7ANFMR-3	向日市上植野町持丸5-1他	(財)向日市埋文	3/22～4/8
11	左京第442次	7ANLID-3	長岡京市馬場井料田4の一部	(財)長岡京市埋文	3/27～3/31
12	左京第444次	7ANMKU-1	長岡京市神足垣外ヶ内3他	(財)長岡京市埋文	4/12～5/15
13	左京第445次	7ANMKK-6	長岡京市神足上八ノ坪12他	(財)長岡京市埋文	4/17～6/25
14	右京第654次	7ANMDB-3	長岡京市神足２丁目地内	(財)長岡京市埋文	10/25～00.3/31
15	右京第657次	7ANIOK-4	長岡京市天神５丁目106	(財)長岡京市埋文	11/1～00.3/31
16	右京第661次	7ANNNM-2	長岡京市友岡西山14-7他	(財)長岡京市埋文	1/6～1/25
17	右京第662次	7ANNNM-3	長岡京市友岡西山14-7他	(財)長岡京市埋文	1/6～1/14
18	右京第663次	7ANIOK-5	長岡京市天神５丁目地内	(財)長岡京市埋文	1/5～3/24
19	右京第665次	7ANIHS-1	長岡京市今里樋ノ尻2-1他	(財)長岡京市埋文	2/1～2/29
20	右京第666次	7ANIMI-4	長岡京市一文橋１丁目6他	(財)長岡京市埋文	2/17～3/9
21	右京第667次	7ANKID-4	長岡京市開田４丁目502-2	(財)長岡京市埋文	3/6～4/19
22	右京第668次	7ANGAR-6	長岡京市井ノ内朝日寺27-2他	(財)長岡京市埋文	4/5～7/8

23	右京第669次	7ANMBB-2	長岡京市一里塚2-4他	(財)長岡京市埋文	3/13～4/3
24	右京第670次	7ANQKZ-3	長岡京市久貝２丁目408他	(財)長岡京市埋文	3/13～4/3
25	右京第671次	7ANKKS-4	長岡京市長岡２丁目108-3	(財)長岡京市埋文	4/3～6/1
26	右京第672次	7ANKNC-3	長岡京市天神4丁目211-2	(財)長岡京市埋文	4/10～4/30
27	山城国府跡第61次	7XYS'TH-15	大山崎町大山崎高橋13-39	大山崎町教委	3/6～4/21
28	大藪遺跡		京都市南区久世大藪町	(財)京都市埋文研	7/31～00.3/31

長岡京右京一条三坊二町・三町跡(長岡京右京第435・436次調査)

前回の『情報』第75号でも一部触れたが、向日市森本戌亥と京都市南区久世殿城町で(財)向日市埋蔵文化財センターと(財)古代學協会・古代學研究所が発掘調査を実施した長岡京期の大型建物群は、２月３日に現地説明会が実施され、多数の参加者をみたが、その後の調査の進展によって、建物の性格が明らかになった。まず、検出した遺構群の諸関係は方格地割りに基づいた配置計画から大きく２群に分けられ、東二坊大路や北一条条間南小路南面築地雨落ち溝を廃棄・埋め戻し後に造営されている。

現在までに出土した遺物の総量は、コンテナ約1200箱に及ぶ。遺物の出土傾向として地点別に井戸・溝・土壙で多い。特に井戸では平・軒瓦が出土し、それ以外の遺構からは木製品(木簡・杓子・箸・曲物・籠・皿・人形)、布製品(漆沙冠・布織物)、石製品(水晶)、鉄製品(鉄斧)などがある。瓦では、瓦当の中心飾りに「旨」の字の異体文字が刻印されるものが21点あり、離宮関連施設において使用されていることから、離宮用の瓦として製作されていた可能性が高い。また、須恵器杯Ａの底部外面には「東院」と判読されるものがある。また、出土した木簡には延暦12・13年の年号を持ち、大型建物の存続時期の下限を示し、勅旨所・内蔵寮・近衛府・尚侍に関連する文字資料は、近くに「内裏」が有ることを示唆している。

以上のように、右京一条三坊二町・三町で検出された大型建物跡は、延暦12年に仮内裏となった東院の可能性が高い。延暦12(793)年８月・延暦13(794)年正月と記す木簡は、『日本紀略』延暦12(793)年正月21日の宮を壊すため、「東院に遷御す」という記事と関連して注目される。

(平成12年３月31日付報道提供用資料「長岡京左京第436次調査」(財)古代學協會・古代學研究所より)

(河野一隆)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

（平成12年４月１日現在）

理事長
樋口　隆康
（京都大学名誉教授）

副理事長
中澤　圭二
（京都大学名誉教授）

常務理事
木村　英男

理　事
川上　　貢
（京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授）
上田　正昭
（京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授）
藤井　　学
（奈良大学学長・京都府立大学名誉教授）
佐原　　眞
（国立歴史民俗博物館館長）
都出比呂志
（大阪大学文学部教授）
井上　満郎
（京都産業大学文化学部教授）
中尾　芳治
（帝塚山学院大学文学部教授）
高橋　誠一
（関西大学文学部教授）
三品　廣実
（京都府府民労働部文化芸術室長）
津守　俊一
（京都府教育庁指導部長）
中谷　雅治
（京都府教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱）

監　事
小林　真一
（京都府出納管理局長）
竹延　信三
（京都府監査委員事務局長）

事務局長	木村　英男	
事務局次長	福嶋　利範	
総務課	課　　長	福嶋　利範（兼）
	主　　幹	安田　正人
	総務係長	安田　正人（事務取扱）
	主　　任	杉江　昌乃
	主　　事	今村　正寿　鍋田　幸世 岡田　正記　西林　紀子
	主査調査員	橋本　清一 （府立山城郷土資料館へ派遣）
調　査	課　　長	小山　雅人
第１課	企画係長	伊野　近富
	主査調査員	竹井　治雄
	資料係長	小山　雅人（事務取扱）
	主任調査員	田中　　彰　森下　　衛
	調査員	河野　一隆
調　査	課　　長	平良　泰久
第２課	主　　幹	久保　哲正
	課長補佐	奥村清一郎　水谷　壽克
	調査第1係長	水谷　壽克（兼）
	主任調査員	引原　茂治
	主査調査員	石尾　政信　黒坪　一樹
	調査員	石崎　善久　村田　和弘 福島　孝行
	調査第2係長	久保　哲正（事務取扱）
	主任調査員	戸原　和人　増田　孝彦 田代　　弘
	主査調査員	岡崎　研一
	調査員	中川　和哉　野島　　永 筒井　崇史
	調査第3係長	辻本　和美
	主任調査員	竹原　一彦　岩松　　保
	調査員	森島　康雄　中村　周平 柴　　暁彦　野々口陽子
	調査第4係長	奥村清一郎（兼）
	主任調査員	松井　忠春　石井　清司 小池　　寛
	調査員	伊賀　高弘　藤井　　整 松尾　史子

センターの動向(12．2～4)

1．できごと

2．1　女谷横穴群(八幡市)試掘調査開始

8　人権に関する職場研修(於：京都府乙訓総合庁舎)辻本和美調査第3係長出席

10　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：和歌山市)安田正人総務課主幹出席

公益法人等運営協議会(於:府立勤労者総合福祉センター等)福嶋利範次長出席

11　埋蔵文化財研究会第47回研究集会(於：高知市)河野一隆、藤井　整各調査員出席

15　荒坂横穴群(京田辺市)試掘調査終了(1.26～)

16　今林6～8号墳(園部町)試掘調査終了(1.26～)

河原遺跡(城陽市)試掘調査終了(12.15～)

17　新田遺跡第5次(京田辺市)現地説明会

18　職員研修(於：当センター)講師：川上　貢理事「押小路二条殿について」

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：東大阪市)久保哲正調査第2課主幹、伊野近富企画係長出席

23　長岡京連絡協議会(於：向日市埋蔵文化財センター)

24　時事問題講座・人権問題特別研修(於：京都府職員研修所)平良泰久調査第2課長出席

平等院旧境内・宇治市街遺跡(宇治市)関係者説明会

女谷横穴群試掘調査終了(2.1～)

荒坂遺跡(八幡市)試掘調査終了(1.18～)

26　第87回埋蔵文化財セミナー(於：京田辺市社会福祉センター)

28　佐山尼垣外遺跡(久御山町)現地説明会

市田斉当坊遺跡D地区(久御山町)現地説明会

平等院旧境内・宇治市街遺跡発掘調査終了(12.10～)

新田遺跡第5次(京田辺市)発掘調査終了(11.10～)

柿添遺跡(精華町)発掘調査終了(1.6～)

木津城山遺跡(木津町)発掘調査終了(5.6～)

3．3　南稲葉遺跡(綾部市)発掘調査終了(10.20～)

狭間墳墓群(園部町)発掘調査終了(10.1～)

市田斉当坊遺跡D地区発掘調査終了(12.8～)

佐山尼垣外遺跡発掘調査終了(6.21～)

6～8　埋蔵文化財発掘技術者特別研修「写真測量外注管理課程」(於：奈良国立文化財研究所)福島孝行調査員参加

7　大畠遺跡(木津町)発掘調査終了(1.24～)

10　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪市)、水谷壽克課長補佐、河野一隆調査員出席

14～17　埋蔵文化財発掘技術者特別研修

「荘園遺跡調査課程」(於：奈良国立文化財研究所)岡崎研一主査調査員参加

16　職員研修(於：当センター)講師：筒井崇史調査員「全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修報告・中国安徽省」

22　長岡京連絡協議会(於：当センター)

23　第58回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、川上　貢、上田正昭、井上満郎、中谷雅治各理事出席

30　退職職員辞令交付

4．3　昇任・異動職員辞令交付

11　今林遺跡・今林古墳群(園部町)発掘調査開始

下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査開始

18　稲葉遺跡(京田辺市)発掘調査開始

23　狭間墳墓群・平山古墳・カチ山北古墳群(園部町)現地説明会

26　長岡京連絡協議会(於：当センター)

27　大畠遺跡(木津町)発掘調査開始

2．普及啓発事業

2.26　第87回埋蔵文化財セミナー開催(於：京田辺市社会福祉センター)『都城－二都と二又遺跡－』：森正京都府教育庁文化財保護課技師「恭仁宮跡の発掘調査」、村田和弘調査員「平安京跡右京一条三坊九・十町の発掘調査」、鷹野一太郎京田辺市教育委員会主査「二又遺跡の発掘調査」

3．人事異動

3.31　中村　彰理事、土山喜英理事、京極隆夫監事退任

米本光徳主査調査員退職(京都府教育庁へ復職)

4．1　中尾芳治理事、高橋誠一理事、三品廣実理事、津守俊一理事、竹延信三監事就任

第87回埋蔵文化財セミナー風景(於：京田辺市社会福祉センター)

受贈図書一覧(12. 2～4)

(財)北海道埋蔵文化財センター

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第137集　滝里遺跡群Ⅸ、同第138集　柏台1遺跡

北上市立埋蔵文化財センター

北上市埋蔵文化財調査報告第29集　上大谷地・江釣子古墳群・国見山廃寺、同第32集　成沢Ⅱ遺跡、同第34集　曽山遺跡、同第35集　唐戸崎遺跡、同第36集　国見山廃寺(第17次・第18次)・滝ノ沢、同第39集　金成遺跡群(Ⅲ)、同第41集　北上遺跡群、文化財調査報告第11集　北上市極楽寺跡(復刻版)

(財)いわき市教育文化事業団

いわき市埋蔵文化財調査報告第47冊　相子島貝塚、同第51冊　小茶円遺跡、同第52冊　中山館跡Ⅱ区、同第63冊　清水遺跡

(財)茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第152集　木工台遺跡、同第153集　内宿井戸作城跡・木工台遺跡3、同第154集　中根十三遺跡、同第155集　中原遺跡、同第156集　実穀寺子西遺跡、同第157集　孫目A遺跡・孫目古墳群、同第158集　長峰古墳群・屋代B遺跡Ⅳ、同第159集　中原遺跡2、同第160集　六十目遺跡、同第161集　沢田遺跡、同第162集　仲丸遺跡・久保塚群・五万堀古道・向原遺跡・向原塚群・前原塚・仲丸塚、同第163集　石原遺跡、同第164集　明石遺跡・明石北原遺跡・上白畑遺跡、同第165集　西平遺跡・五安遺跡、第166集　熊の山遺跡、同第167集　下郷古墳群、同第168集　古峯A遺跡・古峯B遺跡・高土台塚群、同第169集　ニガサワ遺跡

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集　綿貫観音山古墳Ⅰ、同第258集　上滝五反畑遺跡、同第259集　沼南遺跡、同第264集　寺尾中城遺跡

(財)千葉県文化財センター

年報　No.24、千葉県文化財センター調査報告第346集　八千代市向境遺跡、同第347集　木更津市水深遺跡、同第348集　沼南町高柳新田所在馬土手、同第349集　袖ヶ浦市荒久(1)遺跡・三箇遺跡、同第350集　栗山川流域遺跡群多古町谷中地点、同第351集　千葉東南部ニュータウン21、同第352集　千葉ニュータウン21、同第353集　芝山町上宿遺跡、同第354集　市原市市原条里制遺跡、同第355集　市原市大作遺跡、同第356集　市原市今富新山遺跡・古市場遺跡(2)・千葉市古市場(1)遺跡、同第358集　印西市嶋神山遺跡・白井谷奥遺跡、同第359集　八千代市雷遺跡・雷南遺跡、同第360集　八千代市赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡、同第361集　大網白里町餅木横穴群、同第362集　武町小川崎台遺跡、同第363集　東峰西笠峰遺跡、同第364集　木更津市久野遺跡、同第365集　袖ヶ浦市中六遺跡、同第366集　市原市福増遺跡、同第367集　袖ヶ浦市重常遺跡、同第368集　千葉東南部ニュータウン22、同第369集　印西市白井谷奥遺跡、同第370集　下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡、同第371集　下総町名木天神台遺跡、同第372集　主要地方道成田松尾線Ⅸ、同第373集　市原市空堀遺跡、同第374集　袖ヶ浦市上泉遺跡

(財)山武郡市文化財センター

(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書第42集　山田新田Ⅱ遺跡、同第54集　大台西藤ヶ作遺跡、同第55集　庚申遺跡、同第56集　松尾城跡Ⅱ、同第57集　鷺山入遺跡、同第58集　上滝ノ下遺跡、同第59集　宮郷台遺跡、同第60集　古宿遺跡、同第61集　松尾藩公庁跡、同第64集　中台大木戸遺跡、同第66集　田越台遺跡、年報No.15

(財)君津郡市文化財センター

(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第155集　山谷遺跡、同第156集　西久保遺跡、同第157集　赤坂台遺跡、同第159集　雷塚遺跡、同第160集　椿古墳群Ⅲ、同第162集　北笹塚遺跡、金井崎遺跡発掘調査報告書、年報No.17

(財)市原市文化財センター

市原の文化財(1)　史跡上総国分寺跡、同(2)　縄文時代の生活、(財)市原市文化財センター調査報告書第23集　菊間手永遺跡、同第28集　山田橋表通遺跡、同第42集　市原市大厩浅間様古墳調査報告書、同第64集　市原市五霊台遺跡、同第65集　市原市西国吉遺跡、同第66集　市原市大厩辰巳ヶ原遺跡・八幡御所跡推定地、同第67集　市原市村上川堀遺跡、同第71集　市原市草刈遺跡Ⅱ

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第77集　栄町遺跡、同第78集　武蔵台遺跡、同第83集　美山町赤根遺跡(C地区)

(財)かながわ考古学財団

福田丙二ノ区遺跡(厚木基地の旧石器時代)、神奈川県立埋蔵文化財センター年報18、かながわ考古学財団調査報告65　松本谷戸遺跡、同68　福田丙二ノ区遺跡、同69　川尻遺跡Ⅱ、同76　三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)Ⅱ、同79　原東遺跡、同88　鎌倉城(二階堂紅葉ヶ谷)所在やぐら群、同89　鎌倉城(大町3丁目)所在やぐら、同90　極楽寺やぐら群、同91　福泉やぐら群、同92　長勝寺跡所在やぐら群、同93　極楽寺やぐら群、同94　弁ヶ谷東やぐら群、研究紀要5

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36　松原遺跡、同45　春山遺跡・春山B遺跡、同46　屋代遺跡群、同48　日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡大平B遺跡、同50　更埴条里遺跡・屋代遺跡群、同54　更埴条里遺跡・屋代遺跡群

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所

大規模発掘十年の出土品展

金沢市埋蔵文化財センター

金沢市文化財紀要158　金沢市内遺跡発掘調査報告書

Ⅰ、同159　正部・薬師遺跡、同160　戸水大西遺跡Ⅰ、同161　金沢市田上本町遺跡、同162　金沢市田上西遺跡、同163　神野遺跡Ⅰ、同164　金沢市打木町東遺跡、同165　上荒屋遺跡Ⅳ、同166　平成11年度金沢市埋蔵文化財調査年報

(財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第51集　南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡、同第54集　上原遺跡Ⅱ、同第55集　いんべ遺跡、同第57集　南整理遺跡、同第58集　瀬戸南遺跡、同第59集　榿ノ木洞遺跡、同第60集　岩井谷遺跡、同第61集　冬頭城跡・冬頭山崎1号古墓・冬頭山崎2号古墓・冬頭山崎1号横穴、同第62集　上ヶ平遺跡Ⅰ

各務原市埋蔵文化財調査センター

各務原市文化財調査報告書第27号　須衛市立南1号窯址発掘調査報告書、同第28号　蘇原中屋敷1号窯址発掘調査報告書、同第29号　須衛宮東1号窯址発掘調査報告書

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第22集　瓶子窯跡、研究紀要第8輯

嬉野町文化財センター

清水谷遺跡発掘調査報告、海・港・交流

(財)大阪府文化財調査研究センター

池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXⅣ、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第20-1集　陶邑・伏尾遺跡Ⅲ、同第31集　玉櫛遺跡、同第44集　尺度遺跡Ⅰ、同第45集　徳大寺遺跡、調査研究報告第2集、年報平成10年度、大阪府文化財研究第16号、平成11年度韓国・中国研修記録、第40回大阪府埋蔵文化財研究会資料集

(財)大阪市文化財協会

長原遺跡発掘調査報告Ⅶ、山之内遺跡発掘調査報告Ⅱ、崇禅寺遺跡発掘調査報告Ⅰ、発掘された大阪1979～1999、20年のあゆみ

高槻市立埋蔵文化財調査センター

高槻市文化財年報平成10年度、高槻市文化財調査概要XXⅣ　嶋上遺跡群24

桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市内埋蔵文化財1994年度発掘調査報告書2　桜井市高家一ツ塚古墳発掘調査報告書、同1995年度発掘調査報告書1、大和の縄文時代

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

年報15平成10年度

(財)徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第11集　神宮寺遺跡、同第18集　新蔵町一丁目遺跡合同庁舎地点、年報vol.10

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

川津川西遺跡・飯山一本松遺跡、国分寺六ツ目遺跡、高松城跡、川津川西遺跡、八丁知地遺跡・本村・横内遺跡

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県埋蔵文化財センター年報　第8号、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第36集　西本城跡、同第37集　奥谷南遺跡Ⅰ、同第38集　八田奈呂遺跡Ⅰ、同第39集　天崎遺跡、同第40集　小籠北遺跡、同第41集　福井遺跡、同第42集　浅村遺跡、同第43集　辺路石南遺跡・五反地遺跡、同第44集　里改田遺跡、同第45集　里改田遺跡

福岡市埋蔵文化センター

年報第18号

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集　牧の原第2遺跡、同第20集　平成10年度東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告第102集　岩手の貝塚

山形県教育庁文化財課

山形県埋蔵文化財調査報告書第151集　川口遺跡発掘調査報告書、同第152集　柳沢条里遺跡第2次発掘調査報告書、同第154集　早坂山b遺跡発掘調査報告書、同第155集　赤岩遺跡発掘調査報告書、同第158集　高瀬山K遺跡第1・2次発掘調査報告書、同第165集東田遺跡発掘調査報告書、同第167集　囲地田遺跡発掘調査報告書、同第173集　山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書、同第179集　高瀬山K遺跡第3次発掘調査報告書、同第183集　金俣Ⅰ・K遺跡・山海窯跡群第3次発掘調査報告書、同第185集　中田浦遺跡発掘調査報告書、同第186集　木原遺跡発掘調査報告書、同第187集　筋田遺跡発掘調査報告書、同第190集　鳥川遺跡群発掘調査報告書、同第191集　郡之神遺跡第2次発掘調査報告書、同第192集　山形西高敷地内遺跡第5次発掘調査報告書、同第193集　藤島城跡第5次発掘調査報告書

鶴岡市教育委員会

山形県鶴岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　山田遺跡

郡山市教育委員会

山田C遺跡第3次、大槻八頭遺跡、大安場古墳群第3次、蒲倉古墳群第5次、大槻向原遺跡、郡山館跡第2次、荒井猫田遺跡第7次～第10次、荒井猫田遺跡第11次、清水内遺跡6・8・9区、清水内遺跡7区、咲田遺跡第3次、宮ノ脇遺跡第3次、山中日照田遺跡第2次、舘下遺跡、郡山市埋蔵文化財分布調査報告6、第5回市内遺跡発掘調査成果展

前橋市教育委員会

内堀遺跡群X、六供下堂木V遺跡、萩原Ⅱ遺跡、大室小学校校庭Ⅲ遺跡、横手湯田Ⅱ遺跡・西田Ⅱ遺跡、箱田川西遺跡、ヌデ島川端Ⅱ遺跡、大友宅地添遺跡、横手湯田Ⅲ遺跡・徳丸仲田Ⅱ遺跡・西喜尺司Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅲ遺跡、西田Ⅲ遺跡、新井大田関Ⅱ遺跡・萩原Ⅱ遺跡、横手湯田Ⅳ遺跡、西田Ⅳ遺跡、平成10年度市内遺跡発掘調査報告書

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第102集　西島相ノ沢遺跡、同第157集　豊岡後原Ⅰ・Ⅱ遺跡、同第160集　高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書13、同第161集飯玉Ⅰ・Ⅱ遺跡、同第162集　京目杉ノ内・大沢大沢西遺跡、同第163集　真町Ⅱ遺跡、同第164集　倉賀野続橋遺跡、同第165集　根小屋一丁目畑遺跡、同第166集　史跡日高遺跡、高崎市遺跡調査会文化財調査報告

書第75集　寺尾館台・左近屋敷遺跡

鴻巣市教育委員会

鴻巣市遺跡調査会報告書第８集　生出塚遺跡、同第９集　生出塚遺跡

東金市教育委員会

平成11年度東金市内遺跡発掘調査報告書

袖ヶ浦市教育委員会

平成９年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書、山王台遺跡・下向山遺跡

東京都北区教育委員会

北区埋蔵文化財調査報告第26集　中里貝塚

目黒区教育委員会

油面遺跡（Ｃ地点）

あきる野市教育委員会

代継・富士見台遺跡

武蔵野市教育委員会

武蔵野市井の頭池遺跡群

藤沢市教育委員会

神奈川県埋蔵文化財包蔵地図　藤沢市域版

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査報告第５集　松ノ尾遺跡、同第６集　金の尾遺跡Ⅴ、同第７集　金の尾遺跡Ⅵ、同第８集　御岳田遺跡

長坂町教育委員会

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集　石原田北遺跡

佐久市教育委員会

年報７平成９年度、佐久市埋蔵文化財調査報告書第66集　中西ノ久保遺跡Ⅱ・仲田遺跡・寺畑遺跡、同第67集　供養塚遺跡、同第68集　前藤部遺跡、同第69集　高山遺跡Ⅰ・Ⅱ、同第70集　観音堂遺跡、同第71集　市内遺跡発掘調査報告書1997、同第72集　市道遺跡Ⅱ、同第73集　西一本柳Ⅲ・Ⅳ、同第74集　五里田遺跡、同第76集　南近津遺跡

岡谷市教育委員会

天王垣外・榎垣外・地獄沢遺跡発掘調査報告書

伊那市教育委員会

石塚遺跡、富士塚遺跡

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第81集　宮原遺跡Ⅱ、同第82集　下町田遺跡Ⅱ、同第83集　市内遺跡

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅵ　氷見市埋蔵文化財調査報告書第27冊

婦中町教育委員会

南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ、外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

年報11、12、福井県埋蔵文化財調査報告第37集　尾永見遺跡Ⅱ、同第40集　下黒谷遺跡、同第42集　今市遺跡、同第47集　下糸生脇遺跡

池田町教育委員会

願成寺西墳之越古墳群51・52号墳発掘調査報告書

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財報告書第57集　西軒遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第59集　守藤遺跡第２次・第３次発掘調査報告書

浅羽町教育委員会

北野遺跡・宮前遺跡

上野市教育委員会

上野市埋蔵文化財年報６

長浜市教育委員会

長浜市埋蔵文化財調査資料第25集　墓立遺跡・柿田遺跡・正蓮寺遺跡

草津市教育委員会

草津市文化財調査報告書第37冊　襖遺跡発掘調査報告書１、同第38冊　柳遺跡発掘調査概要

野洲町教育委員会

冨波遺跡発掘調査報告、野洲町文化財資料集1998-2小篠原・久野部遺跡発掘調査報告書、同1999-1　平成10年度野洲町内遺跡発掘調査概要

日野町教育委員会

日野町埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

大阪市教育委員会

平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書、大阪の歴史と文化財第５号

泉佐野市教育委員会

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要平成10年度、泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告53　上町東遺跡、同54　上町東遺跡、同55　上町東遺跡

藤井寺市教育委員会

古市古墳群とその時代

泉南市教育委員会

泉南市遺跡群発掘調査報告書XVI　泉南市文化財調査報告書第32集

柏原市教育委員会

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1999年度、柏原市文化財概報1999-Ⅱ　平尾山古墳群、柏原市文化財概報1999-Ⅲ　文化財基礎調査概報、柏原市文化財概報1999-Ⅳ　建造物詳細調査概報、古代たたら（鉄製）とカヌチ（鍛冶）、田辺のくらし－大正・昭和（戦前）－

能勢町教育委員会

能勢町文化財調査報告書第11冊　野間遺跡発掘調査報告書、同第12冊　平成10年度能勢町埋蔵文化財調査概要、同第13冊　大里遺跡発掘調査報告書Ⅲ

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

兵庫県文化財調査報告第158冊　勝雄経塚、同第190冊　西山遺跡群・西山西遺跡群

赤穂市教育委員会

赤穂市文化財調査報告書第50集　高雄・根木遺跡発掘調査報告書

川西市教育委員会

平成10年度川西市発掘調査概要報告

小野市教育委員会

行政マンが語る古墳時代

大和郡山市教育委員会

大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第６集　旧奥野家（紺屋跡）発掘調査報告書、ふるさと郡山が生んだ傑僧　叡尊

明日香村教育委員会

明日香村遺跡調査概報平成７～９年度、明日香村文化財調査報告書第３集　キトラ古墳学術調査報告書

高野町教育委員会
高野町文化財調査報告書第１集　高野山町石保存修理報告書
北条町教育委員会
北条町埋蔵文化財報告書29　町内遺跡発掘調査報告書第９集
総社市教育委員会
総社市埋蔵文化財調査年報９
勝田町教育委員会
勝田町埋蔵文化財発掘調査報告１　石ヶ坪遺跡
広島県教育委員会
中世遺跡調査研究報告第１集　万徳院跡の研究
庄原市教育委員会
庄原市文化財調査報告書第７集　陽内遺跡、同第８集　郷ノ原古墓、遺跡からみる庄原の歴史
下関市教育委員会
下関市埋蔵文化財調査報告書48　伊倉遺跡、同69　無多田遺跡、同70　綾羅木郷遺跡
徳島市教育委員会
徳島市埋蔵文化財発掘調査概報９、阿波国府跡発掘調査報告
三好町教育委員会
三好町埋蔵文化財調査報告第２集　円通寺遺跡(西内地区)・大柿遺跡
香川県教育委員会
池ノ下遺跡・川津井手の上遺跡、旧練兵場遺跡Ⅴ、県史跡　盛土山古墳範囲確認調査報告書、鹿伏・中所遺跡、下大橋・定兼遺跡、香川県中世城館跡詳細分布調査概報　平成10年度、埋蔵文化財試掘調査報告ⅩⅡ　香川県内遺跡発掘調査、香川県埋蔵文化財調査年報　平成10年度
福岡市教育委員会
那珂君休遺跡Ⅶ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第587集、下和白後口古墳群　同第588集、蒲田部木原群６　同第589集、堅粕３　同第590集、箱崎７　同第591集、箱崎８　同第592集、博多66　同第593集、博多67　同第594集、比恵27　同第595集、比恵遺跡群28　同第596集、那珂22　同第597集、那珂23　同第598集、大井遺跡　同第599集、吉武遺跡群ⅩⅠ　同第600集、板付周辺遺跡調査報告書第20集　同第601集、南八幡遺跡群　同第602集、野多目Ａ遺跡５　同第603集、弥永原遺跡４　同第604集、博多68　同第605集、藤崎13　同第606集、藤崎遺跡14　同第607集、有田・小田部32　同第608集、福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告６　同第609集、井相田Ｄ遺跡　同第610集、田村14　同第611集、拾六町亀田１・次郎丸高石４・田村13　同第612集、入部Ⅸ　同第613集、室見が丘　同第614集、飯氏古墳群　同第615集、橋本一丁目遺跡・女原遺跡　同第616集、広石南古墳群Ａ群　同第617集、峯遺跡２　同第618集、大坪遺跡・大坪南遺跡　同第619集、鴻臚館跡10　同第620集、福岡市埋蔵文化財年報vol.12
宗像市教育委員会
田久瓜ヶ坂　宗像市文化財報告書第46集、田久松ヶ浦　同第47集
大刀洗町教育委員会
大刀洗町文化財調査報告書第16集　下高橋遺跡Ⅳ、同第18集　冨多若草遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
北野町教育委員会
良積遺跡Ⅲ　北野町文化財調査報告書第12集、中厨子田遺跡　同第14集
山川町教育委員会
イモジＢ遺跡　山川町文化財調査報告書第３集
遠賀町教育委員会
牟田神社周辺遺跡　遠賀町文化財調査報告書第10集、尾崎・友田遺跡　同第11集、金丸遺跡　同第12集、尾崎天神遺跡Ⅳ　同第13集
志免町教育委員会
中山遺跡　志免町文化財調査報告書第10集、横枕遺跡Ⅱ　同第11集
新吉富村教育委員会
新吉富村文化財調査報告書第13集　宇野地区遺跡群Ⅱ
三日月町教育委員会
三日月町文化財調査報告書第10集　織島東分遺跡群Ⅱ
安岐町教育委員会
一ノ瀬古墳群　安岐町文化財調査報告書第６集
えびの市教育委員会
えびの市埋蔵文化財調査報告書第25集　浜川原遺跡、同第26集　昌明寺遺跡、同第27集　佐牛野遺跡
佐土原町教育委員会
佐土原町文化財調査報告書第11集　佐土原町内遺跡Ⅰ、同第13集　佐土原町内遺跡Ⅱ
平賀町郷土資料館
平賀町埋蔵文化財報告書第25集　阿蘇(3)遺跡発掘調査報告書、同第26集　大光寺新城跡遺跡、同第27集　大光寺新城跡遺跡
(社)日本金属学会附属金属博物館
金属博物館紀要第32号
土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場
年報第５号、尻冷南遺跡、谷原門遺跡Ｃ地点、三芳古墳・東谷遺跡、内海の貝塚
土浦市立博物館
紀要第10号
かみつけの里博物館
鳥の考古学
千葉市立加曽利貝塚博物館
貝塚博物館紀要第27号
流山市立博物館
年報No21
出光美術館
館報第109号
新宿区立新宿歴史博物館
信濃町地点・創価世界女性会館地点、四谷一丁目遺跡Ⅱ、北新宿二丁目遺跡Ⅱ、河田町遺跡
大田区立郷土博物館
紀要第10号
神奈川県立歴史博物館
年報平成10年度
長野県立歴史館
研究紀要第６号
富山市考古資料館
館報No.37

氷見市立博物館
宝田桂山展、氷見市近世史料集成第21冊　陸田家文書その6
土岐市美濃陶磁歴史館
豊臣期のやきもの
浜松市博物館
須部Ⅱ遺跡、梶子北遺跡、城山遺跡Ⅶ
常滑市民俗資料館
研究紀要Ⅸ
一宮市博物館
一宮市埋蔵文化財調査報告Ⅱ　元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅲ
斎宮歴史博物館
研究紀要９
滋賀県立安土城考古博物館
楽浪海中に倭人有り
大津市歴史博物館
研究紀要５～７
岸和田市立郷土資料館
幕末の文化人たち
吹田市立博物館
農耕の風景
西脇市郷土資料館
西脇市文化財調査報告書第８集　比延前田遺跡
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
あすかの石造物
橿原市千塚資料館
かしはらの歴史をさぐる７
倉吉博物館
輝く古代の山陰　伯耆国
広島県立歴史博物館
しまなみ海道をめぐる文化財展、10年のあゆみ
香川県歴史博物館
要覧
福岡市博物館
研究紀要第９号、年報６平成９(1997)年度、同７　平成10(1998)年度、収蔵品目録14、しあわせ博物館公式ガイドブック
佐賀県立九州陶磁文化館
年報・資料目録　平成10年度No.18
佐賀県立博物館・美術館
調査研究書第24集
ミュージアム知覧
紀要第５号、薩摩のかくれ念仏

東北学院大学学術研究会
東北学院大学論集第32、33号
筑波大学歴史・人類学系
歴史人類第28号
埼玉大学教養学部考古学研究室
平成11年度埼玉大学構内本村遺跡出土品展
早稲田大学考古学会
古代第107号
立教大学学校・社会教育講座学芸員課程
MOUSEION45
明治大学博物館事務室
研究報告第５号、図書目録第２号
愛知学院大学文学会
文学部紀要第29号
愛知大学文学部史学科
愛大史学－日本史・アジア史・地理学－第９号
名古屋大学年代測定資料研究センター
名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(ＸＩ)
大阪大学文学部
待兼山論叢第33号
大谷女子大学博物館
紀伊・砂羅之谷　大谷女子大学資料館報告書第40冊、鏡鑑２、大谷学園90周年記念施設大谷女子大学博物館
関西学院大学文学部史学科
関西学院史学第27号
天理大学考古学研究室
古事　天理大学考古学研究紀要第３冊
奈良大学図書館
奈良大学紀要第28号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山大学構内遺跡調査研究年報16、岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊　福呂遺跡１
福岡大学考古学研究室
福岡大学考古学研究室研究報告第１冊　倉瀬戸古墳群Ⅱ
九州大学文学部考古学研究室
遊牧民と農耕民の文化接触による中国文明形成過程の研究
慶尚大學校博物館
慶尚大學校博物館研究叢書第20輯・南江ダム水没地区遺蹟発掘調査報告書第４冊　晋州大坪里玉房２地区先史遺蹟
忠南大學校百済研究所
百濟研究第30輯、同第31輯

宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第22冊　桃生城跡Ⅴ、同第25冊　桃生城跡Ⅷ、年報1995、1996、1998、1999
(株)小学館
古代史の論点①　環境と食料生産
至文堂
日本の美術　第407号
都立学校遺跡調査会
日影町Ⅲ－１、日影町Ⅲ－２
台東区文化財調査会
谷中三崎町遺跡(正運寺跡)
吾妻考古学研究所
海老名本郷(ＸＶ)、同(ＸⅣ)、同(ＸⅦ)、薬師院裏遺跡
(財)韓国文化研究振興財団
青丘学術論集第16集
国立国会図書館
日本全国書誌通号2275号
倉見才戸遺跡発掘調査団
倉見才戸遺跡発掘調査報告書第３次調査
伊勢原市No.160遺跡発掘調査団
伊勢原市No.160遺跡発掘調査報告書
玉川文化財研究所

粕上原遺跡発掘調査報告書、宿根南遺跡発掘調査報告書

浜松市埋蔵文化財調査事務所

飯田町寺西遺跡2000

(財)古代學協會

古代文化　第52巻第1～3号

株式会社　埋文

淡河萩原遺跡第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ次・淡河中山遺跡第Ⅱ次

六甲山麓遺跡調査会

口酒井遺跡

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

案内

奈良県立橿原考古学研究所

研究紀要第5集、纒向遺跡の研究、年報24平成9年度、考古學論攷第22冊、三陵墓西古墳、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第72冊　山口遺跡群、同第73冊　南郷遺跡群Ⅱ、橿原考古学研究所研究成果第2冊　東明神古墳の研究

朝鮮学会

朝鮮学報第173、174輯

大和弥生文化の会

みずほ第32号

島根県古代文化センター

上塩冶築山古墳の研究　島根県古代文化センター調査研究報告書4

岡山県古代吉備文化財センター

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告148　山形福田遺跡、同149　北方地蔵遺跡2・北方薮ノ内遺跡、同150　高塚遺跡・三手遺跡2、同152　加茂東廃寺

津山弥生の里文化財センター

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第66集　日上小深田遺跡、同第67集　田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡、同第68集　二宮岡東遺跡、同第69集　押入兼田遺跡、津山弥生の里第7号

博物館等建設推進九州会議・編集委員会

Museum kyushu　通巻65号

国立文化施設配置の調査研究事業

歴史文化ライブラリー28　吉野ケ里遺跡、吉野ヶ里遺跡と古代国家

國立文化財研究所

文化財第32号

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

年報平成10年度

京都府教育委員会

京都の文化財(第17集)、埋蔵文化財発掘調査概報(2000)

弥栄町教育委員会

京都府弥栄町文化財調査報告第16集　丹後国営農地開発事業「坂野団地」造営工事に伴う発掘調査報告書、同第17集　弥栄町内遺跡発掘調査報告書、同第18集　弥栄町内遺跡発掘調査報告書

園部町教育委員会

園部町文化財調査報告第9集　片山遺跡発掘調査概報、同第10集　園部天神山古墳群発掘調査報告書、同第11集　園部町内遺跡発掘調査概報、同第12集　園部町内遺跡発掘調査概報、同第14集　園部町内遺跡発掘調査概報、同第15集　園部町内遺跡発掘調査概報

綾部市教育委員会

DUSTBOX

京田辺市教育委員会

京田辺市埋蔵文化財調査報告書第24集　稲葉遺跡第4次発掘調査概報、同第28集　二又・三山木遺跡第4次発掘調査概報、同第31集　新田遺跡第7次発掘調査概報

加茂町教育委員会

加茂町史　第五巻資料編2

山城町教育委員会

京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第19集　山城町内遺跡発掘調査概報Ⅷ、同第21集　椿井大塚山古墳、同第22集　山城町内遺跡発掘調査概報Ⅸ

京都国立博物館

平成10年度年報

京都府京都文化博物館

朱雀第10集、同第11集、京都文化博物館調査研究報告第13集　内里八丁遺跡、冷泉家の至宝展

宇治市歴史資料館

発掘宇治'99

宇治市源氏物語ミュージアム

常設展示案内

立命館大学文学部

立命館大学文学部学芸員課程研究報告第8冊　仰木遺跡発掘調査概報

佛教大学

壺ノ谷窯址群・桑ノ内遺跡発掘調査報告書

佛教大学総合研究所

紀要第7号、近代日朝における《朝鮮観》と《日本観》

京都府埋蔵文化財研究会

第6回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集

亀岡市

新修亀岡市史　資料編第一巻

泉屋博古館

近代陶芸名品展

口丹波史談会

丹波史談平成11年度

八木町史談会

郷土誌八木第10号

宮津市立前尾記念文庫

図書目録別冊

川越哲志

弥生時代鉄器総覧

河野一隆

災害から文化財を守る第2分冊、第47回埋蔵文化財研究集会　弥生文化の成立、突帯文と遠賀川、野毛大塚古墳

樋口隆康

三角縁神獣鏡　新鑑

水野正好

奈良大学考古学研究室調査報告書第17集　秋篠・山陵遺跡、安濃町埋蔵文化財発掘調査報告5　大城遺跡発掘調査報告書

村田晃一

発掘ダイジェスト－山王・市川橋遺跡－

編集後記

新緑の目に鮮やかな時分となりました。本号は丹後の遺跡・遺物を取り上げた３本の力作が揃い、いずれも、新しい丹後古代史像を描く上で重要な成果です。ご味読下さい。

ところで、日本人の歴史観は畿内を中心とする同心円的・ピラミッド形の歴史観にとらわれがちであり、丹後国家論などの地域国家論にしても、根底には日本民族の同一性を認めた上で成立するようです。しかし、丹後の古代史像は日本列島内の畿内と同時に、東アジア諸国にも目を向けて、理解されねばなりません。一度、地図をさかさまにして見て下さい。丹後がいかに大陸に近いかが分かるはずですから。

（編集担当＝河野一隆）

京都府埋蔵文化財情報 第76号

平成12年６月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877（代）　Fax　075-922-1189(代)

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961（代）